

昭和56年度県営圃場整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

1982. 3

三重県教育委員会

序

現在、三重県下には約8000箇所の埋蔵文化財が周知されており、各種開発事業の実施に当っては、それらの取り扱いについて事前の調整協議を進めつつ極力その保護に務めているところであります。

県営圃場整備事業については、事業地域が広大なため、多数の埋蔵文化財が必然的に内包されております。そのため、工事の計画変更により埋蔵文化財の現状保存のできない遺跡については、発掘調査を実施して記録を報告書にまとめるとともに、膨大な出土遺物については、広く公開して県民各位の文化財保護思想の普及と高揚に供しているところであります。

本報告所収の埋蔵文化財は、既に工事によって湮滅しましたが、本県の歴史を解明する上で極めて貴重であることは申すまでもありません。今後は、調査によって得られた出土遺物とともに、その成果を広く利用されることを切望する次第であります。

なお、協議及び調査に当り多大の協力をいただいた県農林水産部の各関係機関、地元土地改良区及び地元各位に対しまして、深甚の謝意を表するものであります。

昭和57年3月

三重県教育委員会

教育長 佐々木 昇

目 次

I	前 言	1
II	試掘調査遺跡	5
III	員弁郡東員町 小金塚遺跡(6 EKZ)	9
IV	安芸郡安濃町 大塚久保遺跡(7 FKB)	13
V	安芸郡安濃町 浄土寺米買遺跡(7 FKG)	21
VI	一志郡嬉野町 堀田遺跡(6 FHT)	31
VII	一志郡嬉野町 蛇亀橋遺跡(2 FJB)	37
VIII	伊勢市津村町 中新田遺跡(8 GNS)	49
IX	上野市蓮池 蓮池代遺跡(6 JHD)	57
X	上野市喰代 馬場遺跡(8 JBB)	63
XI	阿山郡大山田村 野中城跡(9 VNN)	69
XII	阿山郡大山田村 山出遺跡(4 JYD)	77

図版目次

P L 1	小金塚遺跡	全景	P L16	中新田遺跡	A地区全景
	"	S K 4		"	S A 1・S K 2・S D 3
P L 2	大塚久保遺跡	全景	P L17	"	S D 4
	"	S D 4・6・7		"	A・B地区全景
P L 3	"	S X13・S K14	P L18	"	S B 7
	"	S X12		"	S D 8
P L 4	"	S E 9	P L19	"	C地区西半部
	"	S E 9		"	D地区S B10~12
P L 5	浄土寺米買遺跡	遠景	P L20	"	S B19
	"	C地区全景		"	S E16
P L 6	"	C地区全景	P L21	蓮池代遺跡	航空写真
	"	C地区S E15・S B16		"	遺跡全景
P L 7	"	C地区S D18	P L22	"	全景
	"	C地区S E 7		"	S B26・21
P L 8	"	B地区全景	P L23	"	S B 2
	"	B地区S D 2・4		"	S E56
P L 9	堀田遺跡	航空写真	P L24	馬場遺跡	A区全景
	"	調査前遠景		"	S B 4
P L10	"	全景	P L25	"	B区全景
	"	全景		"	S B 1
P L11	蛇亀橋遺跡	A地区調査前遠景	P L26	野中城跡	航空写真
	"	B地区調査前遠景		"	遠景・T 1~2
	"	航空写真	P L27	"	T 2~5
P L12	"	A地区全景	P L28	"	T 6
	"	B地区全景		川久保遺跡	G 5~9
P L13	"	S B 1	P L29	山出遺跡	遠景
	"	S B 2		"	全景
P L14	"	S X 3 (合口甕棺)	P L30	"	全景
	"	S X 4 (合口甕棺)		"	全景
P L15	中新田遺跡	遠景	P L31	"	S X 2
	"	調査前遠景		"	S X 1

挿図目次

第1図 主要発掘遺跡位置図…………… 4	第7図 川久保遺跡出土土器…………… 7
第2図 老ノ木遺跡地形図…………… 5	第8図 高岡遺跡地形図…………… 7
第3図 川尻・梅ノ木・北戸遺跡出土土器…………… 5	第9図 小金塚遺跡位置図…………… 9
第4図 川尻・梅ノ木・北戸遺跡地形図…………… 6	第10図 遺跡地形図……………10
第5図 三谷遺跡地形図…………… 6	第11図 発掘調査区域図……………10
第6図 川久保遺跡地形図…………… 6	第12図 遺構実測図……………11

第13図	出土遺物	12	第44図	縄文土器拓影	46
第14図	大塚久保遺跡位置図	13	第45図	石器実測図	46
第15図	遺跡地形図	14	第46図	中新田遺跡位置図	49
第16図	発掘区平面図	15	第47図	遺跡地形図	50
第17図	遺構実測図	16	第48図	A地区遺構平面図	51
第18図	SE9実測図	17	第49図	B地区遺構平面図	51
第19図	SX12実測図	18	第50図	C地区遺構平面図	52
第20図	SE9・SX12土器実測図	19	第51図	D地区遺構平面図	53
第21図	浄土寺米買遺跡位置図	21	第52図	土器実測図	55
第22図	遺跡地形図	22	第53図	蓮池代遺跡地形図	57
第23図	発掘調査区域図	23	第54図	遺跡地形図	58
第24図	A地区遺構実測図	24	第55図	遺構平面図	59
第25図	C地区遺構実測図	25	第56図	SE56実測図	60
第26図	B地区遺構実測図	26～27	第57図	土器実測図	62
第27図	土器実測図	28	第58図	馬場遺跡位置図	63
第28図	SE17実測図	29	第59図	遺跡地形図	64
第29図	堀田遺跡位置図	31	第60図	発掘区平面図	65
第30図	遺跡地形図	33	第61図	A区遺構平面図	67
第31図	遺跡平面図	33	第62図	B区遺構平面図	67
第32図	遺構平面図・土層断面図	34	第63図	出土土器	68
第33図	遺物実測図	35	第64図	野中城跡遺跡位置図	69
第34図	蛇亀橋遺跡位置図	37	第65図	遺跡地形図	70
第35図	遺跡地形図	38	第66図	発掘平面図	70
第36図	発掘調査区域図	39	第67図	T1～5断面図	71
第37図	A地区遺構平面図	40	第68図	T6断面図	72
第38図	B地区遺構平面図	40	第69図	土器実測図	73
第39図	A地区土層断面図	41	第70図	山出遺跡遺跡位置図	77
第40図	SB1実測図	42	第71図	遺跡地形図	78
第41図	SX3・4実測図	43	第72図	発掘区平面図	78
第42図	縄文土器拓影	44	第73図	遺構平面図	79
第43図	縄文土器拓影	45	第74図	遺物実測図	80

表 目 次

第1表	昭和56年度県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財	1～2	第5表	掘立柱建物一覧表	60
第2表	三重県内古代陶硯出土遺跡一覧表	29～30	第6表	馬場遺跡第1次調査一覧表	65
第3表	堀田遺跡第一次調査概要	36	第7表	馬場遺跡A区出土の中世土器破片数	68
第4表	蓮池代遺跡第1次調査一覧表	58	第8表		

I 前 言

県教育委員会事務局文化課では、年度当初に県庁内の各開発関係課に対し、年度内に着工される公共事業について照会を行っている。

県営圃場整備事業については、県農林水産部耕地第二課へ照会し、その回答に基づき遺跡地図との照合と分布調査を行い、埋蔵文化財の確認結果を耕地第二課へ報告するとともに、事業地域内の遺跡の現状

保存を要請している。

特に県営圃場整備事業の場合は、施工面積が広大であり、遺跡の現状保存が困難な場合が多いが、極力前年度中に事業地域の把握と地域内の遺跡確認を行うことが、文化課と耕地第二課及び各耕地事務所の双方で急務となっている。

1. 分布調査

昭和56年度の県営圃場整備事業については、昭和56年3月に事業照会を行い、その回答を同年4月に得た。なお、耕地事務所からの計画平面図の入手は2月下旬に終わっている。これらの事業計画平面図を基に、遺跡地図との照合の後、全事業地域の現地分布調査を3月に終了した。

その結果、総事業面積 699haのうちに47遺跡、総面積 805,380 m²が所在することを確認し、それらの保護措置について協議を継続した。

協議の結果、前年度の協議によって調査を予定していた一志郡嬉野町蛇亀橋遺跡のほか、計画変更が不可能な農用地の削平部分と水路部分について限定した8遺跡を本調査の対象とし、その他の遺跡については試掘調査後にその取り扱いを再協議することとなった。なお、その時点で全面保存が確定した遺跡は、鈴鹿市南長太遺跡のみであり、工事立会いとしたものは8遺跡である。

耕地事務所	事業地区	事業場所	事業面積	遺跡名	遺跡面積	概況	保存方法
桑名	大安東部	員弁郡大安町	44 ha	——	—— m ²	——	——
	大安西部	〃 〃	45	上垣内遺跡	2,000	水田 古墳時代～	試掘調査 工事実施
	員弁	〃 員弁町	23	御蘭B遺跡	3,000	〃 〃	工事中立会
	東員	〃 東員町	51	寺垣内遺跡	40,000	〃 〃	〃
	〃	〃 〃		瀬古泉遺跡	4,000	〃 〃	試掘調査 工事実施
	〃	〃 〃		野田遺跡	1,000	〃 〃	〃 〃
	〃	〃 〃		小金塚遺跡	40,000	水田畑 〃	〃 排水路のみ本調査
四日市	ちくさ	三重郡菰野町	30	葛原A遺跡	700	水田 〃	工事中立会
	〃	〃 〃		葛原B遺跡	2,000	〃 〃	〃
	〃	〃 〃		市塚遺跡	8,000	〃 〃	試掘調査 工事実施
	〃	〃 〃		南の脇遺跡	2,500	〃 〃	工事中立会
	八風	〃 〃	20	首塚遺跡	4,000	山林 〃	試掘調査 工事実施
	鈴鹿第二安塚深溝	鈴鹿市南長太町	55	南長太遺跡	10,000	水田 弥生時代～	地区除外 保存
津	安濃川右岸	安芸郡安濃町	56	生水東方遺跡	20,000	水田 古墳時代～	試掘調査 工事中立会
	〃	〃 〃		岡南東方遺跡	1,300	〃 〃	〃 〃
	〃	〃 〃		浄土寺米買遺跡	120,000	〃 弥生時代～	〃 削平部のみ本調査
	〃	〃 〃		北神山遺跡	20,000	畑 〃	〃 工事立会

津	安濃川右岸	安芸郡安濃町	1	大塚久保遺跡	5,000	畑	弥生時代～	試掘調査	本調査
	津西部	津市片田町	16	田中町南方遺跡	9,000	〃	古墳時代～	〃	工事中立会
	津南部	〃 雲出長藤町	12	若子 A 遺跡	3,000	水田	古墳時代～	〃	〃
	〃	〃 〃		若子 B 遺跡	2,000	〃	〃	〃	〃
	豊地	一志郡嬉野町	27	堀田遺跡	50,000	水田	弥生時代～	〃	排水路のみ 本調査
	〃	〃 〃		蛇亀橋遺跡	2,000	水田畑	縄文時代～	〃	削平部のみ本調査
	三雲東部	〃	7	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	白山	一志郡白山町	38	正住寺遺跡	1,000	水田	古墳時代～	試掘調査	工事中立会
〃	〃 〃	上野遺跡		50,000	〃	〃	〃	〃	
松阪	上御糸	多気郡明和町	20	下尾遺跡	60,000	〃	〃	〃	〃
	斎宮	〃 〃	40	広垣内西遺跡	10,000	〃	〃	〃	〃
	東黒部	松阪市東黒部町	40	湖田遺跡	120,000	水田畑	弥生時代～	〃	〃
	〃	〃 〃		東浦遺跡	3,600	水田畑	古墳時代～	〃	〃
	〃	〃 〃		広畑遺跡	1,600	〃	〃	〃	〃
	〃	〃 〃		所前遺跡	3,000	〃	〃	〃	〃
	〃	〃 〃		長の垣内遺跡	2,000	〃	〃	〃	〃
	〃	〃 〃		丸橋遺跡	7,500	〃	〃	〃	〃
伊勢南部	伊勢市津村町	19	元新田遺跡	15,000	〃	弥生時代～	〃	〃	
	〃 〃		中新田遺跡	80,000	〃	〃	〃	削平部のみ 本調査	
	〃 〃		元新畑遺跡	3,600	〃	〃	〃	工事中立会	
熊野	相野谷	南牟婁郡紀宝町	19	高岡遺跡	13,000	〃	〃	排水路のみ本調査	
上野	上野西部	上野市笠部	13	老ノ木遺跡	4,000	水田	〃	試掘調査	工事立会
	上野南部	〃	17	〃	〃	〃	〃	〃	
	上野東部	上野市蓮池	16	蓮池代遺跡	5,000	水田	古墳時代～	試掘調査	削平部のみ 本調査
	〃	〃 喰代		馬場遺跡	10,000	〃	〃	〃	〃
	赤目	名張市赤目町	7	川尻遺跡	20,000	〃	弥生時代～	〃	工事中立会
	〃	〃 〃		梅ノ木遺跡	10,000	〃	〃	〃	〃
	〃	〃 〃		北戸遺跡	11,000	〃	〃	〃	〃
	大山田	阿山郡大山田村	1	山出遺跡	10,000	〃	奈良時代～	〃	削平部のみ本調査
	大山田第二	〃 〃	23	三谷遺跡	40,000	〃	〃	試掘調査	工事中立会
	〃	〃 〃		野中城跡	5,000	〃	室町時代	〃	削平部ほか本調査
〃	〃 〃	沢遺跡		5,000	〃	弥生時代～	試掘調査	工事実施	
友田	〃 阿山町	22	鳩館跡	400	〃	室町時代	〃	工事中立会	

第1表 昭和56年度県営圃場整備事業地内埋蔵文化財

2. 試掘調査

試掘調査は、31遺跡を対象として昭和56年5月から9月にかけて行った。

その結果、遺物包含層の深さと広がりや、遺構の残存状態の濃淡等に基づき、各耕地事務所との最終的な調整協議を経たうえで、中新田遺跡（伊勢市津村町）、蓮池代遺跡（上野市蓮池）、馬場遺跡（上野市喰代）の3箇所については削平部分を本調査することとした。

残る28遺跡については、工事施工可と判断されるものと、工事立会い実施が必要なものとして取り扱うことを確定し、各耕地事務所との一応の協議を終息した。その後、工事立会いと工事計画の変更部分については、そのつど立会いを行った。

以上の進捗状況に応じて、農林水産部の県営広域営農団地基幹農道整備事業や土木部の道路改良事業・河川改修事業などにおける事前協議経過を勘案し

ながら、最終的には11遺跡を対象として本調査を行うこととした。

なお、後述する第1次調査のうち、試掘調査として農林水産部から執行委任を受けたものは、市塚遺跡（三重郡菰野町）、堀田遺跡（一志郡嬉野町）、蓮

池代遺跡（上野市蓮池）、馬場遺跡（上野市喰代）、三谷遺跡（阿山郡大山田村）、川久保遺跡（阿山郡大山田村）の6遺跡であり、その調査結果に基づき本調査（第2次調査）を検討することとした。

3. 第1次調査

各耕地事務所の工事計画との調整に基づき、5月から6月にかけて9遺跡、総面積6,340㎡について第1次調査を行うこととし、5月9日付で調査経費の執行委任を依頼した。

浄土寺米買遺跡（安芸郡安濃町）は、昭和56年6月25日から11月13日にかけて調査を行った。前年度調査の浄土寺南遺跡の西方に当り、排水路と削平部分について試掘を先行し、最終的にA・B・C地区の約4,500㎡を調査した。

蛇亀橋遺跡（一志郡嬉野町）は、昭和56年6月1日から7月21日にかけて調査を行った。前年度の試掘調査によって、縄文土器片が確認されたため、56年度早期に調査を行うこととなっていたものである。

さらに、調査途中で削平地域の畑地を念のため試掘したところ、縄文時代晩期の土器片が出土したため、第一次調査経費枠内で対応することとし、A・

B地区の約2,500㎡を調査した。

堀田遺跡（一志郡嬉野町）は、昭和56年6月23日から7月20日にかけて調査を行った。昭和54・55年度の県営圃場整備事業に伴う調査によって白鳳時代の法起寺式伽藍配置を確認した天花寺廃寺の東北方に位置する。当遺跡については、昭和53年にも北側の一部を調査済であるが、今回はその南側のうちの削平部分と水路について試掘を先行し、前者は設計変更で現状保存し、後者の約500㎡を調査した。

野中城跡（阿山郡大山田村）は、昭和56年6月8日から6月20日にかけて調査を行った。戦国時代の平均的な居館跡であり、東辺側に一部土塁が残存しており、その外周部に堀が存在するか否かを確認するため、主としてトレンチによって約200㎡を調査した。

4. 第2次調査

試掘調査及び第1次調査の結果に基づき、各耕地事務所等との現地協議を継続した。そのうち盛土及び削平高の減少等による計画変更について、再三にわたって遺跡保存を前提とした検討を要望した。しかしながら、水田計画高の変更や盛土量の変更は、排水路の大幅な変更等が伴うものとなるため難色が示され、さらに工期の遅延をもたらすとの理由により、やむなく第2次調査の実施を検討せざるをえなくなった。特に、排水路については遺跡が広大なためいづれにしても調査対象とせざるをえなかった。

以上の経過により、6月30日付で第2次調査の経費について事業費分の負担を依頼した。

第2次調査は、第1次調査分を含む9遺跡を対象として行った。以下、第1次調査分を除き略述する。

小金塚遺跡（員弁郡東員町）は、昭和56年9月16日から9月30日にかけて調査を行った。水路部分に限定したため検出遺構と遺物は少量であったが、約450㎡について調査した。なお、調査終了後に、地元改良区側の要望として水路以外の遺跡保存部分についても本年度内に計画変更して施工したい旨との連絡を得たが、あくまでも現状保存することを要請し、保存されることとなった。

大塚久保遺跡（阿芸郡安濃町）は、昭和56年10月13日から12月12日にかけて発掘調査した。当遺跡は同一工区内で実施していた浄土寺米買遺跡の調査中に新たに確認されたもので、緊急に試掘調査を実施し、削平される畑地部分約1,000㎡に限定して調査を実施した。

中新田遺跡（伊勢市津村町）は、昭和56年11月24日から12月25日にかけて調査を行った。全域がタバコ畑のため試掘箇所は限定されたが、表土直下より遺構が検出されたため、取り扱いについて工事途中で再三協議した結果、A・B・C・D地区の約2,000㎡について調査し、他は現状保存とした。

高岡遺跡（南牟婁郡紀宝町）は、昭和56年12月1日から12月4日にかけて調査を行った。排水路部分の約180㎡を調査したが、本書では試掘調査として所収した。

山出遺跡（阿山郡大山田村）は、昭和56年10月12日から11月20日にかけて調査を行った。当遺跡については、昭和54年10月に試掘調査済みであり、古墳時代から鎌倉時代にかけての面積約10,000㎡の集落跡であることが確認されていた。その結果に基づき、極力盛土保存することとし、約2,000㎡について調査した。

蓮池代遺跡（上野市蓮池）は、昭和56年10月1日から昭和57年1月15日にかけて調査を行った。試掘

段階では、周辺の相当広い範囲に遺物と遺構の存在を確認したが、計画変更による現状保存とし、約2,700㎡について調査した。

老ノ木遺跡（上野市猪田）は、昭和56年11月4日から5日にかけて調査を行った。水路部分の約80㎡にトレンチを10箇所を設定した。

以上の如く、昭和56年度の県営圃場整備事業に伴う発掘調査は、試掘を除いて合計11遺跡、総面積約11,300㎡を対象とした。なお、調査終了時点における現地説明会については、蛇亀橋遺跡（昭和56年7月11日）、蓮池代遺跡（昭和57年1月10日）で開催するとともに、他遺跡では調査概要資料の地元配布によって埋蔵文化財保護についての理解の一助とした。

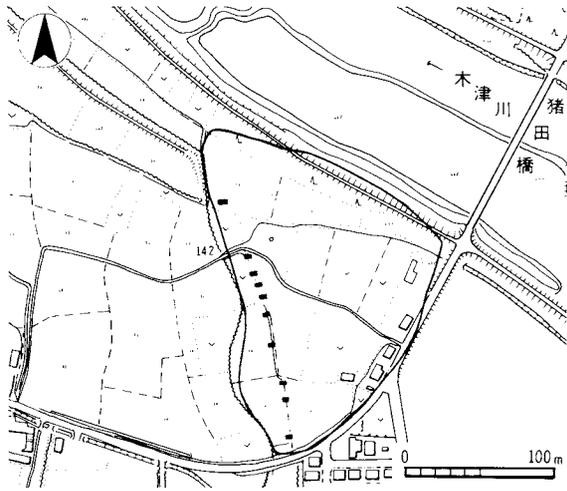
分布調査をはじめ各種の協議及び現地調査全般にわたる長期間、県農林水産部耕地二課、各耕地事務所、各土地改良区をはじめとして、関係各位には種々ご配慮をいただいた。ここに記して謝意を表する次第である。

（伊藤久嗣）



第1図 主要発掘遺跡位置図

II 試掘調査遺跡



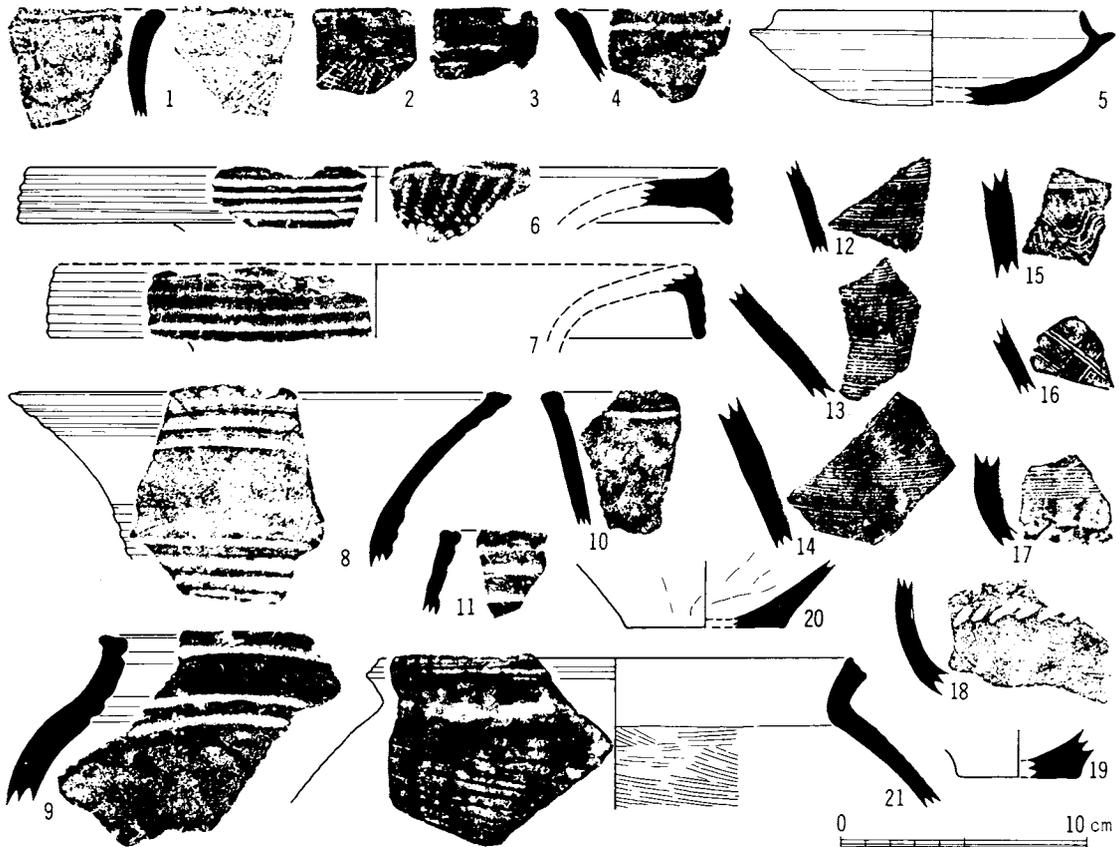
第2図 老ノ木遺跡地形図 (1 : 5000)

1. 老ノ木遺跡 (第2図)

木津川左岸の標高 142 m の沖積地の水田に位置する。事業に先立っての分布調査で、遺物の散布が認められた 4,000 m² の範囲のうち、水路掘削部分について、10箇所 の 2 m × 4 m ないしは 2 m × 3 m の試掘坑を設定して調査を実施した。各試掘坑からは、土師器、須恵器、中世陶器の細片が各少量出土した。しかし、明確な包含層や遺構は認められなかった。遺跡の中心は、分布調査からも明らかにされているように、ここより東の範囲にあるものと思われる。

2. 川尻・梅ノ木・北戸遺跡 (第3・4図)

当該遺跡群は、名張盆地を貫流する宇陀川の南岸

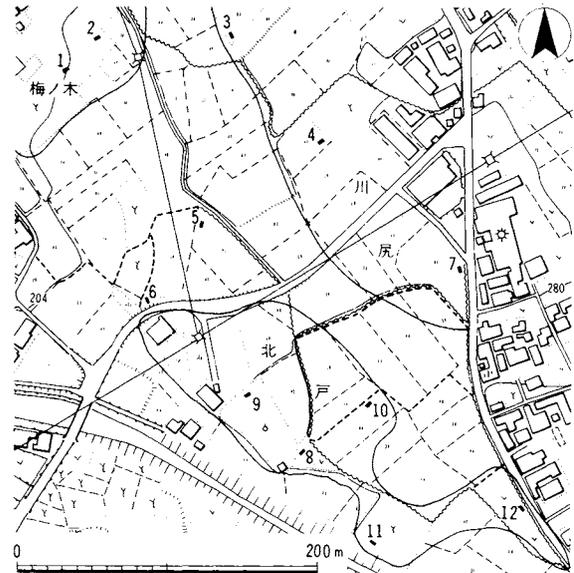


第3図 川尻・梅ノ木・北戸遺跡出土土器 (1 : 4)

1~3=G.3、4=G.6、5=G.9、6~8、10~21=G.7、9=G.7付近表採

に位置する。宇陀川の支流である滝川の扇状地上に立地しているため、水田床土下には厚い砂礫層が堆積している。

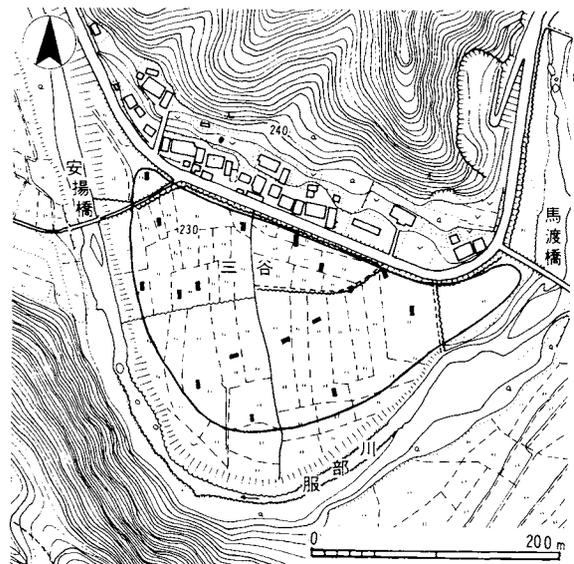
削平予定個所に12箇所の試掘坑を設けた。この結果、G 3では地表下約2 m から縄文後期の土器片（1～3）が出土した。G 7～8は古墳時代の、G 9～10は奈良時代等の包含層が認められた。そこで、G 7～9と古墳の可能性のあるG 6は、改めて工事立ち合いを実施した。立ち合いの結果、G 7では包含層から弥生土器（6～8、10～21）が出土した。また、G 6は古墳ではないが、各時代の土器片が出土した。図示した弥生土器は全て中期後半に属し、凹線文や櫛描文が多用され、二又の篋状具による斜格子文（16）や叩きを施した甕（21）も見られる。



第4図 川尻・梅ノ木・北戸遺跡地形図（1：5000）

3. 三谷遺跡

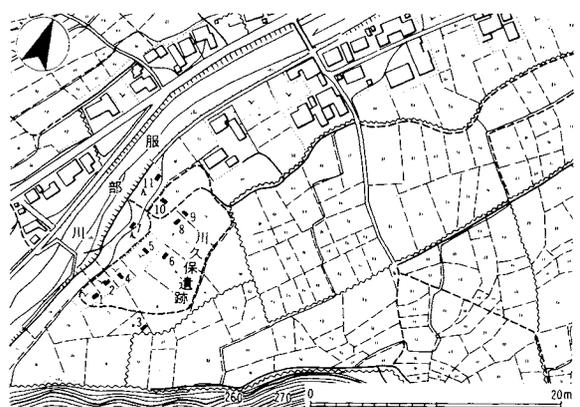
服部川右岸の標高230 mの低位河岸段丘上の水田に位置する。17箇所の試掘坑を設定して調査を行った結果、表土（耕土）下約40～170 cmに、遺物包含層ないしは遺構を確認した。遺物には、古墳時代～平安時代の土師器、須恵器、製塩土器並びに鎌倉～室町時代の瓦器、陶器等がある。遺構は、ピット、土壇、配石遺構等である。いろいろな制約のもとで、十分な数の試掘坑を設定し得なかったが、古墳時代以降中世に至る集落跡の所在が推定される遺跡として確認した。その面積は40,000㎡にもわたる。試掘調査の結果得た遺構及び包含層の深さにもとづき、それらの保存に努めることを条件に、圃場整備事業の工事が行なわれた。当遺跡を横断する県営農林漁業用揮発油税財源身替農道の整備事業については、別途発掘調査を実施した。



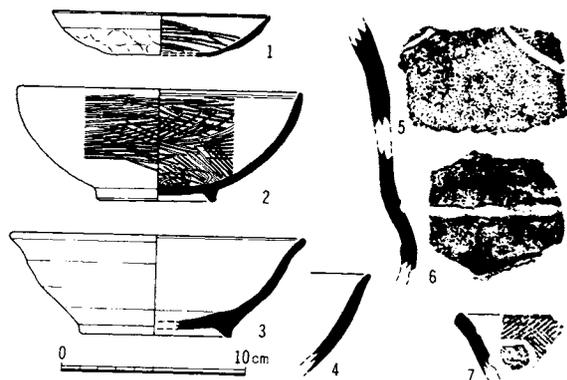
第5図 三谷遺跡地形図（1：6000）

4. 川久保遺跡（第6・7図）

位置と環境は、別章の野中城跡の報文にゆずる。試掘坑は11箇所設けた。その結果（P L 28参照）、G 1では土壇や小穴が検出された、口縁部に沈線を持つが高台の付かない浅い終末期の瓦器椀（1）



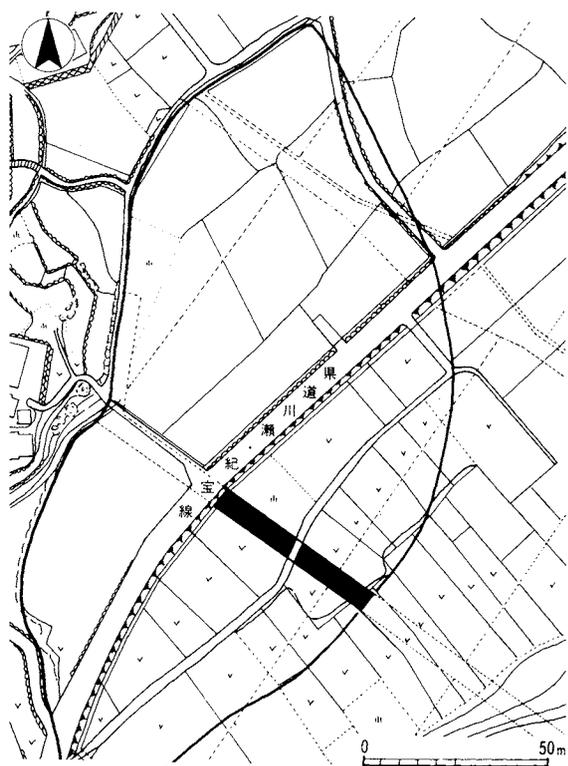
第6図 川久保遺跡地形図（1：6000）



第7図 川久保遺跡出土土器 (1:4)

1~4=G.10、5=G.1、6~7=G.5

出土した。G 2や5では小穴1が認められ、G 5からは縄文後期の加曾利B式併行の壺片(5~6)等が出土した。G 4からは古墳時代の土師器が出土した。G 6、8~9では、柱穴や溝等を検出した。おそらく、瓦器が伴う時代であろう。G10からは、初現期の瓦器椀(2)や山茶椀(3)が出土した。(2)は、口径15cm、器高約5.9cmを測り、器高指数は39である。やや細砂を含むものの、燻焼しており、明らかに瓦器であるが、盛行期の瓦器とは調整技法が異なる。すなわち、内外のヘラミガキの幅が広く、体部内面は不定方向に短く施され、底部内面も渦文に近い不規則なものである。また、体部外面のヘラミガキは、5単位に分けて施すようである。(4)は、黒色土器B類の椀である。



第8図 高岡遺跡地形図 (1:5000)

5. 高岡遺跡 (第8図)

三重県境を流れる新宮川の支流相野谷川右岸の河岸段丘上にあり、標高約10mである。これまで今回の調査地区の南方で弥生時代から古墳時代の土器片が多数出土したといわれていたが、幅6mの水路部分からは、少数の柱穴や炭化物を含む土壇などが出土したにとどまった。遺物も土師器片が少量のみであるため、時期決定ができなかった。おそらく、今回の調査地区は、集落の縁辺部と思われる。

(中森英夫・吉村利男・山田猛)

Ⅲ 員弁郡東員町 こがねづか 小金塚遺跡

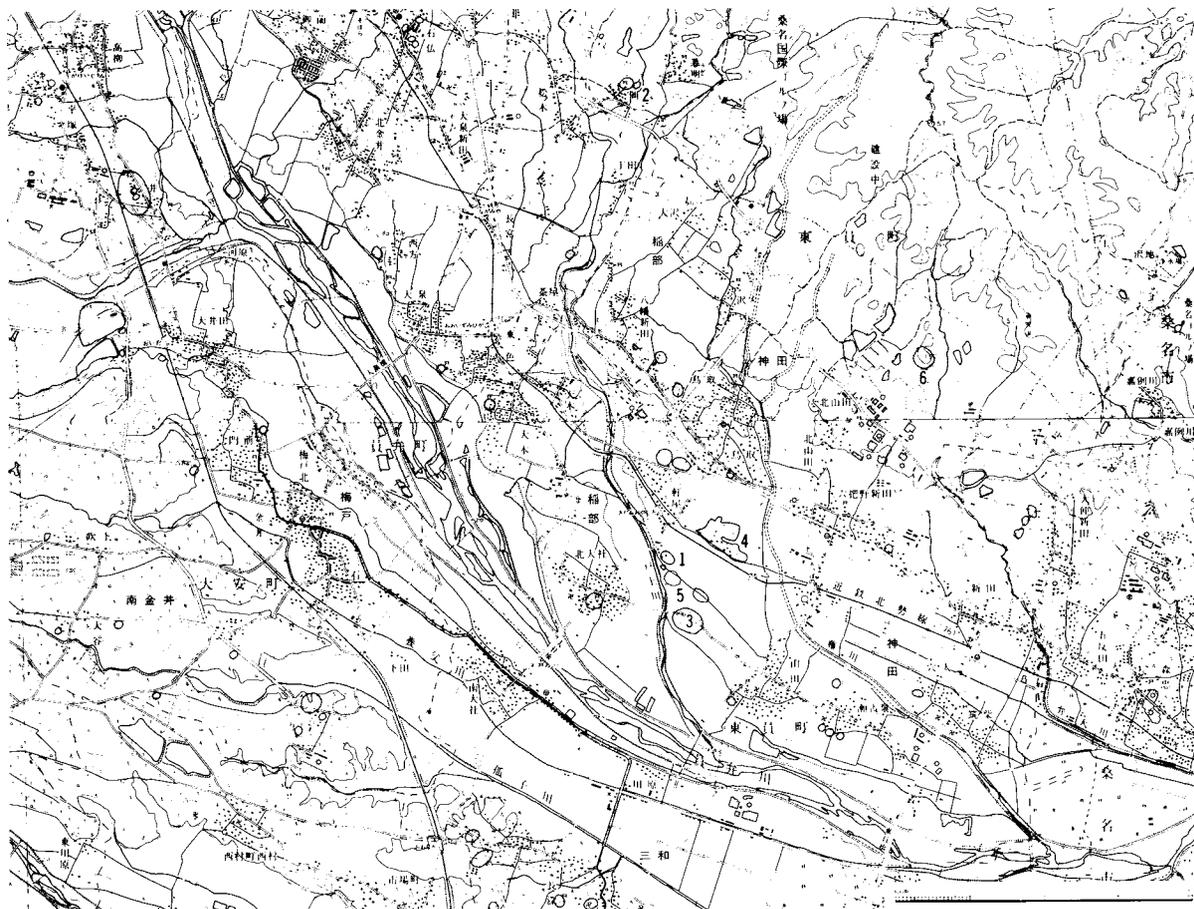
1. 位置と環境

東員町は、員弁郡の南東部に位置し、北部には標高90m内外のよく開析された台地が拡がり、南部には50～60mの小島台地が拡がる。この二つの台地の間には、鈴鹿山脈の烏帽子岳・三国岳に源を発する員弁川が東流して河岸段丘や河谷平野を発達させている。小金塚遺跡(1)は^①、員弁川の支流戸上川左岸、標高38m前後の河岸段丘上に位置する。遺跡の大半は畑地となり、一部は水田・雑木林となっている。行政上は、東員町山田字小金塚・西畑に属す。

河岸段丘上や南部の小島台地上には、古代以来の遺跡が多く分布している。小島台地には、飛鳥・奈良時代の鍛冶を専門的に行なったと推定される西山

遺跡^②や大型の掘立柱建物の存在と円面硯の出土により公的性をもっと推定される新野遺跡^③をはじめ、いくつかの古墳群や遺物包蔵地が知られている。また、員弁川左岸では、上流の員弁町地内で、員弁川流域としては最大規模をもつ岡1号墳(2)の前方後円墳が築かれる。東員町地内では、その所在が確認されていないが山田廃寺(員弁廃寺)の所在が出土瓦により推定されている(3)ほか、栗ノ木遺跡(4)西畑遺跡(5)などが分布している。

また、下流の桑名市内では9世紀と11世紀に操業を行なった七和2号窯の調査が行なわれている^⑤



第9図 遺跡位置図(1:50000)



第10図 遺跡地形図 (1 : 6000)



第11図 発掘調査区域図 (1 : 2000)

2. 遺 構

基本的層序は、I層——暗黒色粘質土（耕土）・II層——黒色粘質土・III層——暗茶褐色粘質土・IV層——茶褐色粘土（地山）となりIII層からIV層への移行で漸移的である。

検出された遺構は、土坑3基・溝3条のほか多数のピットを検出したが建物跡としてまとまるものはない。

1. 土 坑

SK1 調査区東部で検出。長径1.7m×短径1.2m・深さ0.4m。

SK4 調査区西部で検出。長径2.5m×短径1.6m・深さ0.4m。底部で少量の炭を確認。土師器皿・須恵器蓋（1）杯（3）、灰釉椀（5・6）が出土。

SK7 調査区西部で検出。径約4.0m・深さ0.3m。出土遺物もなく風倒木痕かと思われる。

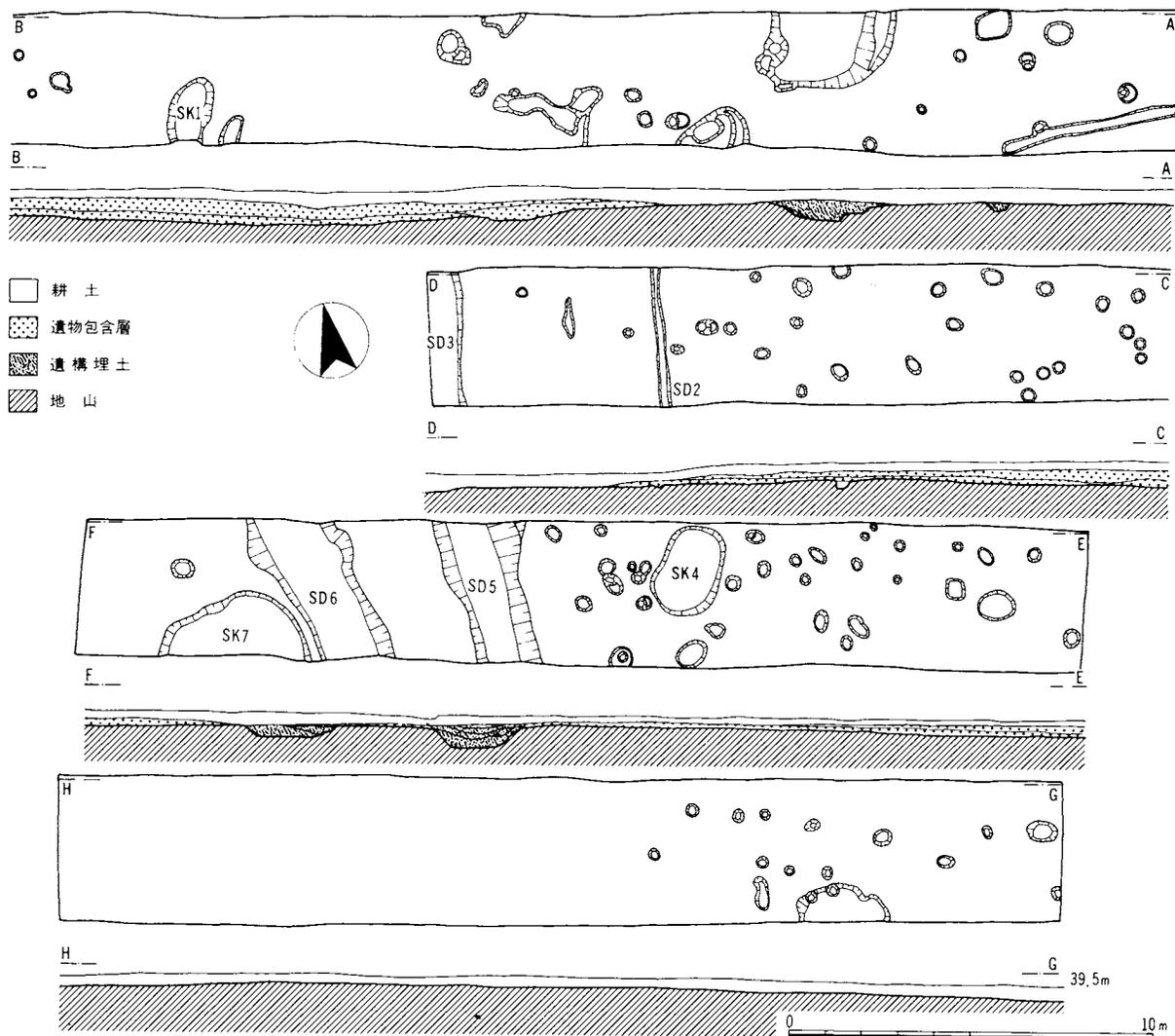
2. 溝

SD2 調査区中央部で検出。幅0.3m・深さ0.1m。後世のものであろう。

SD3 調査区中央部で東の肩のみ検出。深さ0.1m。出土遺物はない。

SD5 調査区西部で検出。トレンチに対し斜行し磁北へ向く。幅2.6m・深さ0.7m。石鏃（8）、須恵器甕・灰釉椀の細片出土。

SD6 調査区西部でSD5と2.5mの間隔をもってほぼ並行している。幅2.6m・深さ0.4とSD5より浅い。灰釉椀の細片出土。



第12図 遺跡遺構実測図（1：200）

3. 遺物

出土した遺物は、きわめて少なく整理箱に1箱ほどである。遺物には、石器・土師器・須恵器・灰釉陶器のほか、布目痕をもつ平瓦片が1点ある。

1. 石器

石鏃 (8) 全長2.4cmの凹基式。抉り先端部を欠損。刃部の剥離は、比較的ていねいである。サヌカイト製。

2. 須恵器

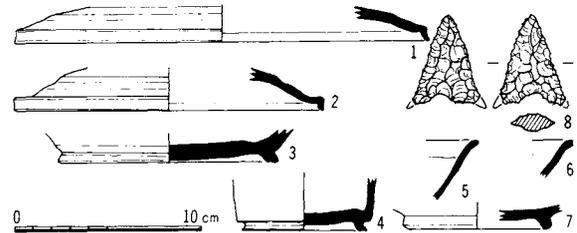
蓋 (1・2) (1)は、推定口径22cm。(2)は、口径12cm。ともに天井部を欠き、口縁端部がほぼ垂直に折れる。(1)の口縁部がわずかに丸味をもつものに対し、(2)では、口縁部で強く屈曲する。

杯 (3・4) 底径は、(3)で11.6cm(4)で6.7cm。

(3)は、低い高台が「ハ」字形につけられ、体部は外開するものであろう。(4)は、直立気味の高台が端部よりやや内側につく。体部は、直立気味に開く。

3. 灰釉陶器

椀 (5～7) (5・6)は口縁端部の細片である。器壁はともに薄く、ともに端部で外反するが(6)の外反度は大きい。(7)は、底径7.2cmの底部のみである。「ハ」字状に開く高台は、外側に稜をもつ。



4. 小 結

今回調査を実施した部分は、小金塚遺跡のなかでも遺物が多く散布している地域であるが、調査地区を幅4mの水路部分に限定したため、遺構・遺物の保存状況を確認する程度にとどまった。

検出された遺構のうち、SD5は方位を磁北に向けており、規模も大きく、今その用途を明らかにし得ないが一定の規準に従って掘削されたものであろう。並走するSD6は、わずかに西に偏りSD5との同時存在の可能性は薄い。

出土遺物は、須恵器と灰釉陶器に区別され、須恵器の形態が鳴海32号窯期に近く8世紀後半の所産と考えられる。また、灰釉陶器は全体に器壁が薄いことなどから平安時代前半期の所産と考えられる。

以上のように、今回の調査では建物の確認には至らなかったものの、この遺跡での遺構・遺物の保存状況が良好であることを確認し得た。そして、水路部分以外の地域については、遺跡保存のため盛土保存される予定である。

(駒田利治)

〈註〉

- ① 遺跡標示略記号を6EKZとした。
- ② 小玉道明『西山・新野遺跡』 東員町教育委員会 1976
- ③ ②に同じ 小玉道明『新野遺跡発掘調査報告—C地区—』三重県教育委員会 1972
- ④ 山田遺跡・小金塚遺跡とともに三重県教育委員会が1981年に調査を行なった。
- ⑤ 小玉道明『七和2号窯址発掘調査報告』 三重県教育委員会 1973

IV. 安芸郡安濃町 おおつかくぼ 大塚久保遺跡

1. 位置と環境

大塚久保遺跡（1）は、行政区画上、安芸郡安濃町大字大塚字久保に所在する。遺物散布状況等よりみて、その規模は、50m×120mに及ぶ遺跡面積である。遺跡の現状は、畑地と一部桑畑が混在するところであり、周辺の水田との比高は約50cmである。

当遺跡は、大塚の集落から北東へ約800m離れており、北東へ約300mには鈴鹿山系の南端に位置する経ヶ峰に源を発する安濃川が流れており、地形的に見れば安濃川右岸に形成された沖積地であり、現標高約36mである。

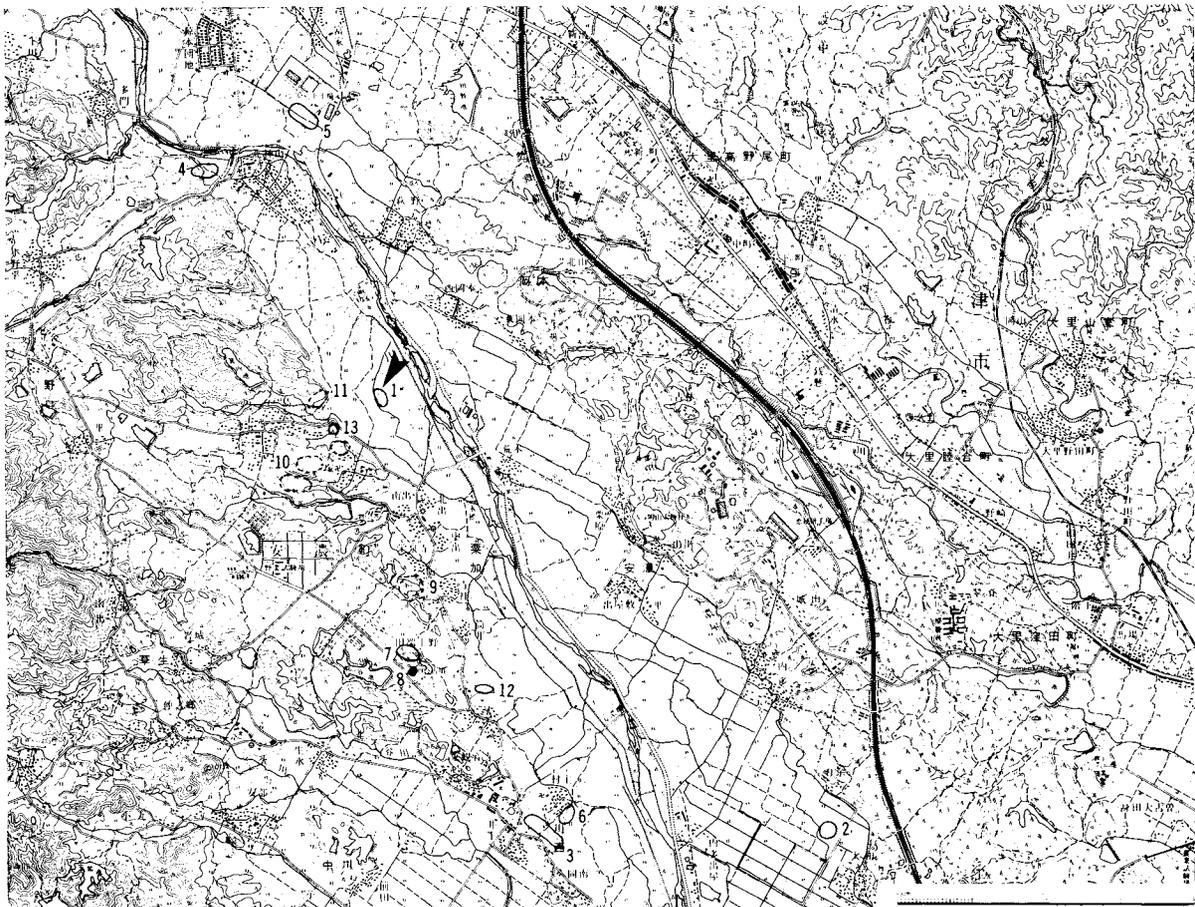
当遺跡は、これまで大塚A遺跡（県遺跡番号4366、町遺跡番号322）と登録されていた古墳時代以降の

遺物散布地であったが、今後は大塚久保遺跡と改称したい。

安濃川流域は早くから開拓された地域の一つで、遺跡も数多く発見されている。また、近年、安濃町内では各種開発事業に伴って、それらに起因する発掘調査が多く行われており、安濃町を含めた安濃川流域の歴史を解明する資料の提供をするところとなっている。ここでは以下時代順に分布する主な遺跡について概述したい。

縄文時代は、辻の内遺跡（2）、多倉田遺跡（3）で若干の晩期の土器が出土するのみである。

弥生時代では、小規模な集落遺跡が多く、前出の



第14図 遺跡位置図（1：50000）

ほか多門遺跡（４）、馬屋町遺跡（５）、川西遺跡（６）、田端上野A遺跡（７）がある。これらはほとんど古墳時代にも継続しており、古墳の築造も始まる。５世紀になると、２段築成で国史跡に指定されている明合古墳（８）が、南へ約２kmにある。その他、後期の群集墳として、南へ約１kmの粟加古墳群（９）、西へ約７５０mの大塚古墳群（１０）、北西へ約５００mの山の下B古墳群（１１）、とたくさんの群集墳が、安濃川によって形成された沖積地を望むように所在している。このうち、大塚古墳群（１０）のうち３基が、昭和５５年度グリーン道路建設に伴い発掘調査され、

山の下B古墳群のうち１５基が、昭和５６年度グリーン道路建設に伴い発掘調査され、６世紀から７世紀にかけての古墳の築造ラッシュを物語るものである。

歴史時代では、県営圃場整備事業に伴い昭和５３年度に南南東約２．５kmの北浦遺跡（１２）が調査され、掘立柱建物や中世墓が検出されている。安濃川流域には、兩岸の丘陵頂部を中心に中世城館の存在が知られており、昭和５７年度町道建設に伴い発掘調査された城坂館跡（１３）は西へ約３５０mにある。掘立柱建物２棟、中世墓が検出されている。

２．遺 構

遺跡の基本的な層位は、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：茶褐色土、Ⅲ層：黄褐色土（地山）となる。第Ⅱ層が遺物包含層である。

遺構は、土壇３基、溝３条、中世墓４基、石列２、

井戸１基である。

１．土壇

SK3



第15図 遺跡地形図（1：5000）

短軸 1.5m 長軸 2.0m の楕円形をした土坑である。深さは30cm前後である。東壁に20cm大の扁平な川原石を2段に積んでいる。埋土は茶褐色砂質土であり、土師器、山茶碗の少片が少量出土している。

SK 8

発掘区中央北寄りで検出した深さ50cm前後の不定形土坑である。遺物として土師器（皿・鍋）・山茶碗が出土している。

SK 14

発掘区の南壁にかかって検出された短軸 2.0 m、長軸 3.5 m、深さ50cm前後の楕円形の土坑であり、埋土中に20～30cm大の川原石を10数個含む。茶褐色砂質土の埋土であり、土師器（皿）、山茶碗、常滑甕片を含んでいる。

2. 溝

SD 4

幅30～50cm、深さ15cm前後でL字型に走る溝である。東端と南端は途切れている。埋土中の遺物は、

土師器の細片のみである。

SD 6

SD 4と同様に東端と南端が途切れるL字型の溝である。幅約60cm、深さ30cmであり、南へいくほど浅くなり、南端で集石にぶつかる。埋土は青味がかかった茶褐色砂質土であり、溝埋土にかなり多量の大小の川原石が認められたが、溝全体に規則性をもったあり方ではない。遺物として須恵器（杯・甕）、土師器（甕・壺・皿・鍋）、山茶碗、山皿などが混在している。

SD 7

発掘区を南北に横切る溝で、SD 6にほぼ平行である。幅0.7～1.0m、深さ20cm前後である。埋土は茶褐色砂質土であり、遺物として土師器（皿）、山茶碗片が少量出土している。

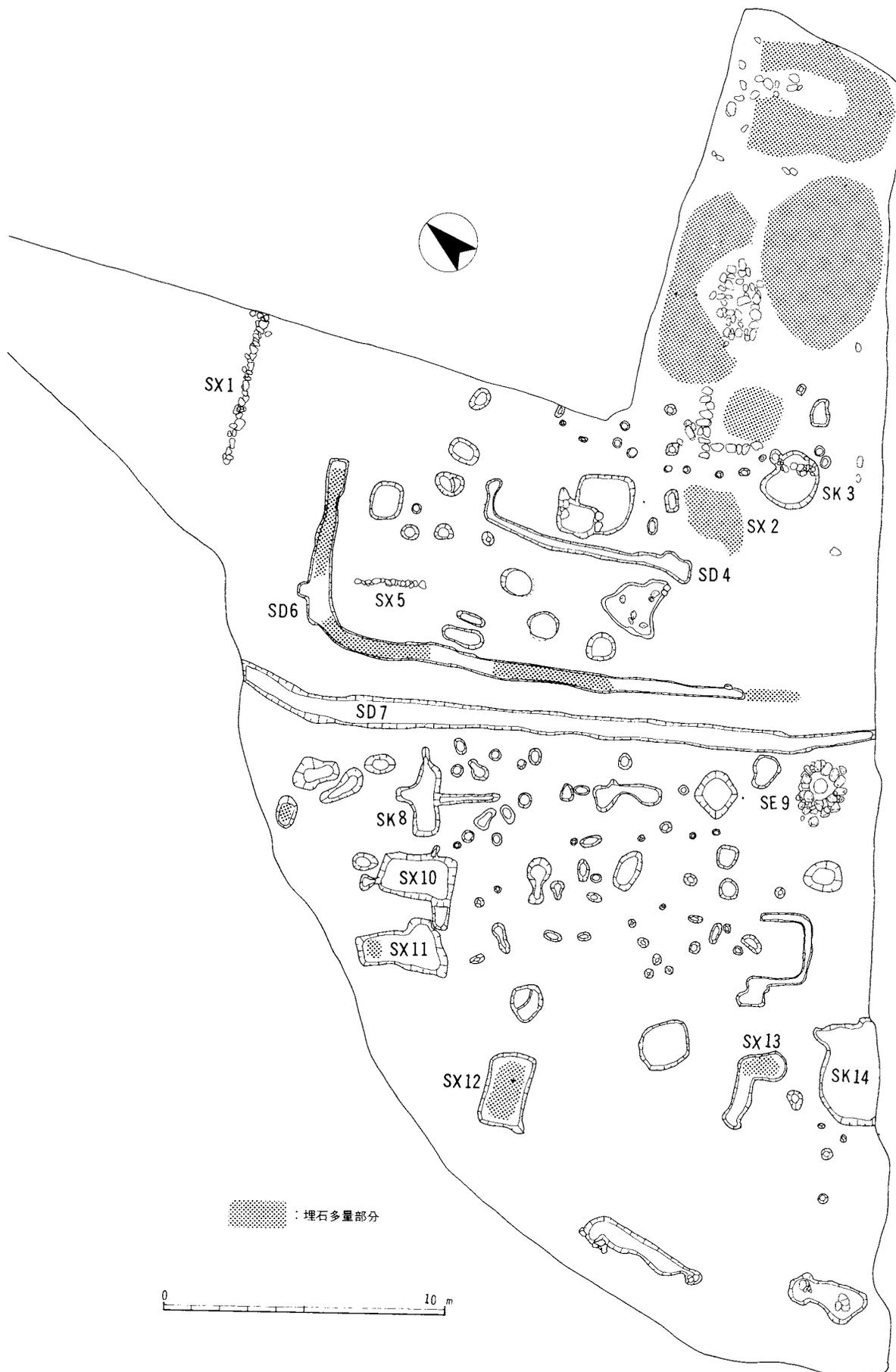
3. 井戸

SE 9 (第18区)

上部で平面約 3.2 m の円形の掘形に構築された



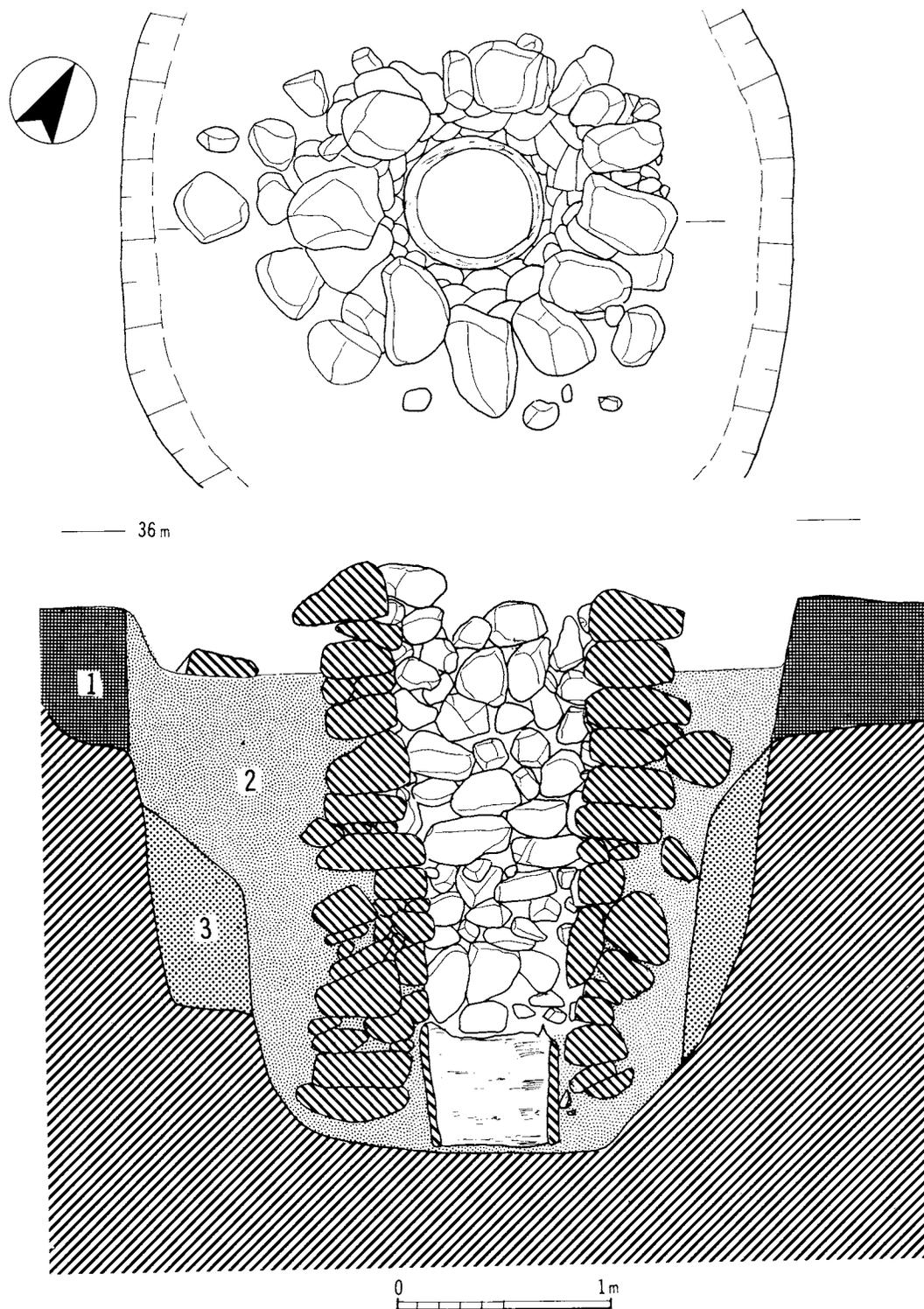
第16図 発掘区平面図（1：2000）



第17図 遺構実測図 (1:200)

乱石積の石積み井戸である。井戸は、掘形の底に据えられた井筒上に石積みを行ったもので、その井筒には径約50cm、長さ約55cmの自然木輪を中空に割り抜いたものを用い、周りにやや大きめの川原石と粘土（青灰色）を配して固定されている。それより

上へ、10~20cm大の川原石を約12段積み上げている。積石の断面プランは、底より5段目まではほぼ垂直に、そして、6段目から最上段にかけて開き気味となる。最上段部における内側径は約90cmである。井戸内の埋土の中に、川原石等の混入が少なかったことから



第18図 S E 9 実測図 (1 : 30)

みて、現在の天端の石が、恐らく、この井戸の構築時の最上段と考えてよい。この最上段より底までは約2m60cmである。掘形の土は底になるにつれて、砂・礫の混り具合が強くなる状況である。掘形内からは、山茶碗（1、3～5、10）、山皿（8）が出土している。そのうち体部外面に「+」の墨書がある(10)は、井筒を固定する粘土内に伏せられた状態で出土しているが、井戸に伴う祭祀として意識的なものか、落下等による偶然性のものかは不明である。なお、石組内にも埋土が充満しており、山茶碗（2・6）、山皿（7）、常滑甕片（9）等が含まれていた。

井戸の覆屋構造等については、SE9の位置が発掘区の南端ということもあり、柱穴等は確認できず、不明である。

4. その他の遺構

S X 1

発掘区北西端から西に向かってまっすぐ約5.5m伸びる石列である。西に向かうほど石列の遺存度はよくない。縦長で20～30cm大の川原石を地山より2～3段石積みしたものである。石の大きさには様々なものがあり、最下部には比較的大きな安定性のある川原石を配している。現状からしてこの石列は、何かを囲むような機能をもって当初は存在したことが推定できるが、不明の点が多い

S X 2

20～30cm大の川原石の集石である。石をはずすと、下には1.1m×1.0mの楕円状の掘形が検出された。深さは、東半分20cm、西半分は1mである。性格不明の集石遺構である。

S X 5

北西から南東にかけて、延長約2.5mの残在する石列である。20～30cm大の川原石を地山より2段積みしたものである。石の配列より東側に面（ツラ）を合わせたものと判断できる。

S X 10

長さ2.5m、幅1.5m、深さ50cm前後のほぼ長方形をした土壇である。壇底は南にやや深くなっている。埋土は黒褐色砂質土で、全体に木炭片が多く含まれているが、壇底上面で火葬の痕跡は認められず、人骨も検出されなかった。しかし、盛土が認められ

ないことや遺物の出土が少ないことから墓地跡とは速断できないが、一応、墓地跡と推定したい。出土遺物として、土師器皿（11）、山茶碗（14）、山皿（12、13）、常滑甕片（15）がある。

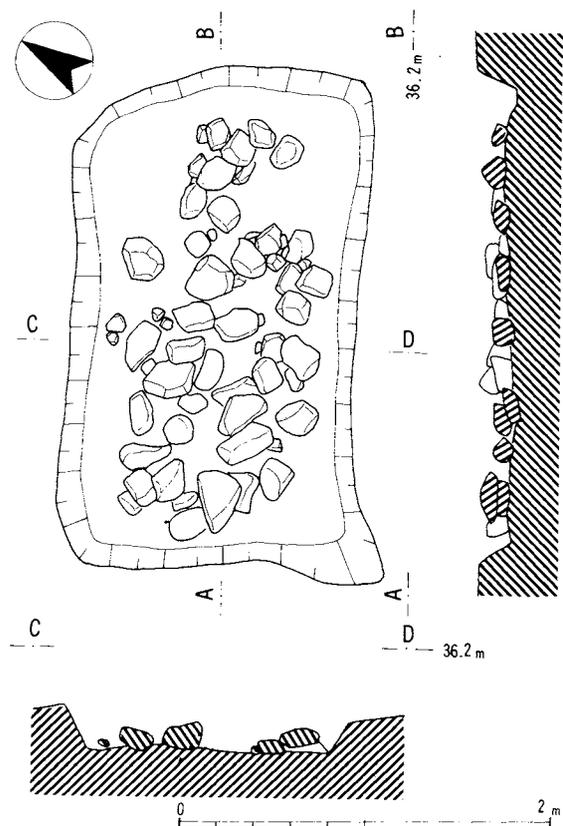
S X 11

長さ3.0m幅1.2m前後、深さ50cmの長方形をした土壇である。北壁に川原石の集石がみられる。埋土は黒褐色砂質土で、S X 10と同様に木炭片を多く含んでおり、墓地跡と推定したい。

遺物として山茶碗・山皿・常滑甕片・青磁片が出土している。

S X 12（第19図）

長さ2.5m、幅1.5m、深さ約25cmのほぼ長軸を東西に向けた長方形土壇で、内部に20～30cm大の川原石が埋められるのみで、埋土中に炭化物は認められなかった。



第19図 S X 12実測図

S X 13

長さ1.6m、幅0.8m、深さ約20cmの隅丸方形の土壇である。底に10～30cm、厚さ約10cmの扁平な

川原石が敷きつめられており、川原石上面全体に木炭片や炭化物がうすく堆積していた。埋土は黒褐色

砂質土で、人骨等は確認できなかったが、墓地跡と推定したい。

3. 遺物

1. SE9出土遺物 (1~10)

A. 山茶碗・山皿

山茶碗 (1~6, 10) いずれも完形品でない。
 (2)を除いて、いずれも内底面と体部との境が明瞭で、直線的な体部をもつ山茶碗である。(1)~(4)の高台はしっかりした貼り付け高台である。(6)の高台は低く小さめである。(5)(10)の高台は消滅している。すべてロクロ水挽き成形によるもので、(1)の底部外面には糸切り痕をのこす。(3・6)は、高台にモミ殻圧痕がみられる。色調は灰白色を呈し、胎土は細砂粒を含みやや粗である。(10)の体部外面には「十」という墨書がみられる。

山皿 (7・8) いずれも高台の消滅した山皿である。ロクロ水挽きによる成形で底部に明瞭な糸切り痕をのこす。色調は灰白色を呈し、胎土は砂粒を含みやや粗である。

B. 陶磁器

常滑甕 (9) 茶褐色の色調をもち、N字状の口縁部を有する常滑窯特有の甕の形態である。

2. SX12出土遺物 (11~15)

A. 土師器

皿 (11) 推定口径7.4cm、器高1.9cmの小型の皿である。内面と底部はナデ調整され、口縁部外面のみ横ナデされている。胎土は細砂粒・金雲母片を含みやや粗である。色調は灰白色である。

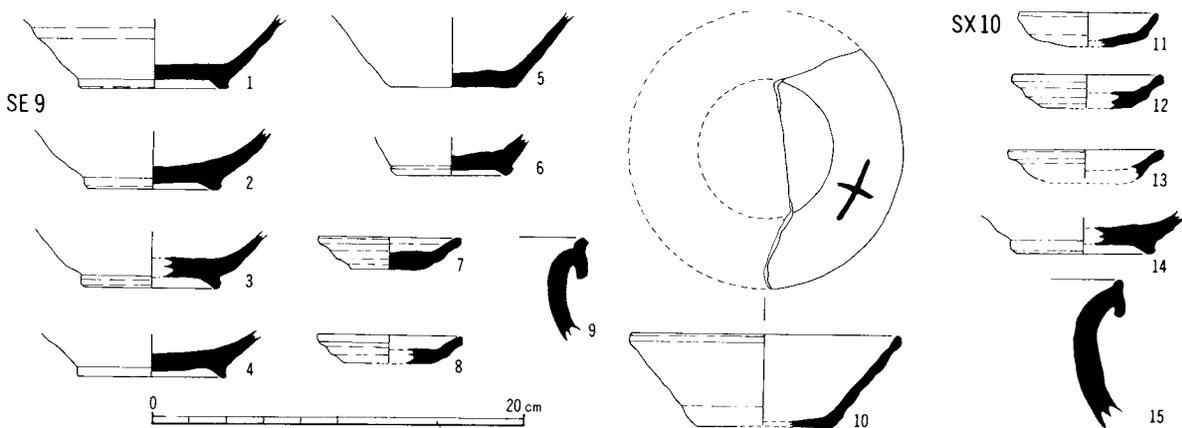
B. 山茶碗・山皿

山茶碗 (14) 高台はしっかりした丁寧な作りであり、体部はややふくらみをもつ。胎土は緻密で、色調は灰白色である。

山皿 (12, 13) いずれも高台の消滅した山皿である。口縁端部は外方に面をつくる。ロクロ水挽きによる成形によるもので、(12)の底部外面には糸切り痕がのこる。色調は灰白色を呈し、胎土はやや粗である。

C. 陶磁器

常滑甕 (15) 茶褐色の色調を呈し、N字状の口縁をもつ甕であるが、口縁の一部の出土である。



第20図 SE9・SX12土器実測図 (1:4)

4. 小 結

今回の調査の結果、大塚久保遺跡は鎌倉時代中期

から後期にかけての遺跡であることが明らかになっ

た。以下、簡単に要点をまとめて小結としたい。

1. 遺構について

当遺跡の特徴の第1点目として、遺跡全体に多量の埋石（川原石）がみられることである。特に、発掘区東端に拡がる埋石については、L字形に並ぶ石列がみられたが、その他の川原石については、埋没散乱が多く、その規則・秩序性は認められなかった。県下で同様の検出例を求めると、松阪市山添遺跡でよく似た遺構がみられる。報告書^①によれば、検討の余地を残すが石組遺構を水溜跡（水溜施設）としてとらえ、この根拠として、埋土に砂を多く含み底は鉄分の多く付着する赤褐色の土質が確認できる点等を挙げている。また、山添遺跡の石組は方形（コの字形）に現存している。以上の点を勘案して、当遺跡を再度検討してみると、自然の流れ込みによる埋石と判断したい。

2点目として、SD4、SD6、SD7の3条の溝がL字形に走るのが検出された。居住空間と他を区画する溝と考えられるが、溝の西側は墓地跡だが東側は性格不明のため断定できない。また、SX1、SX5の石列は現存する部分について考えてみると、これらの溝と対応する可能性がある。しかし、今後の検討の余地を多く残すものである。

第3点として、堅固な石積み井戸であるSE9が検出されている。今回の調査では集落跡が検出できなかったが、付近に集落の存在を示すものである。SE9の特色として、井筒の裏の粘土内に墨書山茶碗（体部外面に十印）が伏せられた状態で出土した。松阪市山添遺跡^①のSE10にもやはり墨書山茶碗（底部外面に十印）を伏せたようにして出土したと報告されている。墨書された位置は異なるが、乱石積みや自然木を削り抜いて井筒として利用しているなど共通点が多い。なお、県下各地で毎年、各時代の井戸が検出されているが、それらの時期を決定する要因として遺物の占める割合が多く、井戸の形態による編年分類には難しい点がある。

第4点として、SX10、11、12、13の4基の中世墓が検出された。火葬か土葬か判断に苦しむが、こ

うした墓地の在り方は、一定場所に限定して火葬骨等を陶製蔵骨器に埋納した大規模な中世墓とは様相が異なる。当遺跡の南南西約2.5kmの北浦遺跡にも中世墓が検出されている。報告書^②によれば、中世の墓制については被葬者の階層や在地寺院の宗教活動に規制され多様な形態があるとしている。当遺跡の被葬者について知る術はないが、北浦遺跡と同様に、在地村落の構成員の下層部分を含む可能性が強いと考えられる。

2. 遺物について

今回の出土遺物は、山茶碗・山皿が最も多く、土師器（鍋・皿）、常滑甕等の日常雑器類が多いことは、他の中世の遺跡の出土状況と変化する。

山茶碗・山皿についてみると、所謂行基焼^③第二型式から第三型式に属するものが一番多い。常滑甕については、N字状口縁をもつ常滑窯特有の形態などからして、山茶碗・山皿の時期に相当する。

その他、少数だが天目茶碗・青磁片が出土していることも付け加えておきたい。また、須恵器や土師器（壺・甕）が中世の土器と混在していたことに注目したい。これらの土器はあまり磨滅していないことなどからして、当遺跡の周辺に古墳時代から奈良・平安時代の集落跡が予想される。

以上、遺構・遺物について述べてみたが、今後、遺物を中心に詳細に検討することにより、さらに、遺跡の性格を明らかにしていきたい。

（中村 信裕）

〈註〉

- ① 新田 洋『山添遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1979
- ② 伊藤久嗣「安芸郡安濃町・北浦遺跡」『昭和53年度県営圃場整備地域埋蔵文化財報告 3』三重県教育委員会 1979
- ③ 杉崎 章『常滑の窯』学生社 1970

V 安芸郡安濃町 浄土寺米買遺跡

じょうど じこめがい

1. 位置と環境

三重県のほぼ中央部に位置する二級河川安濃川は、鈴鹿山系の錫杖ヶ岳(627m)に源を発し、その支流穴倉川は経ヶ峰(820m)に源を発している。この安濃川は中流域の安濃町域に肥沃な平野を形成して南流し、津市域に入って東折して伊勢湾へ注いでいる。

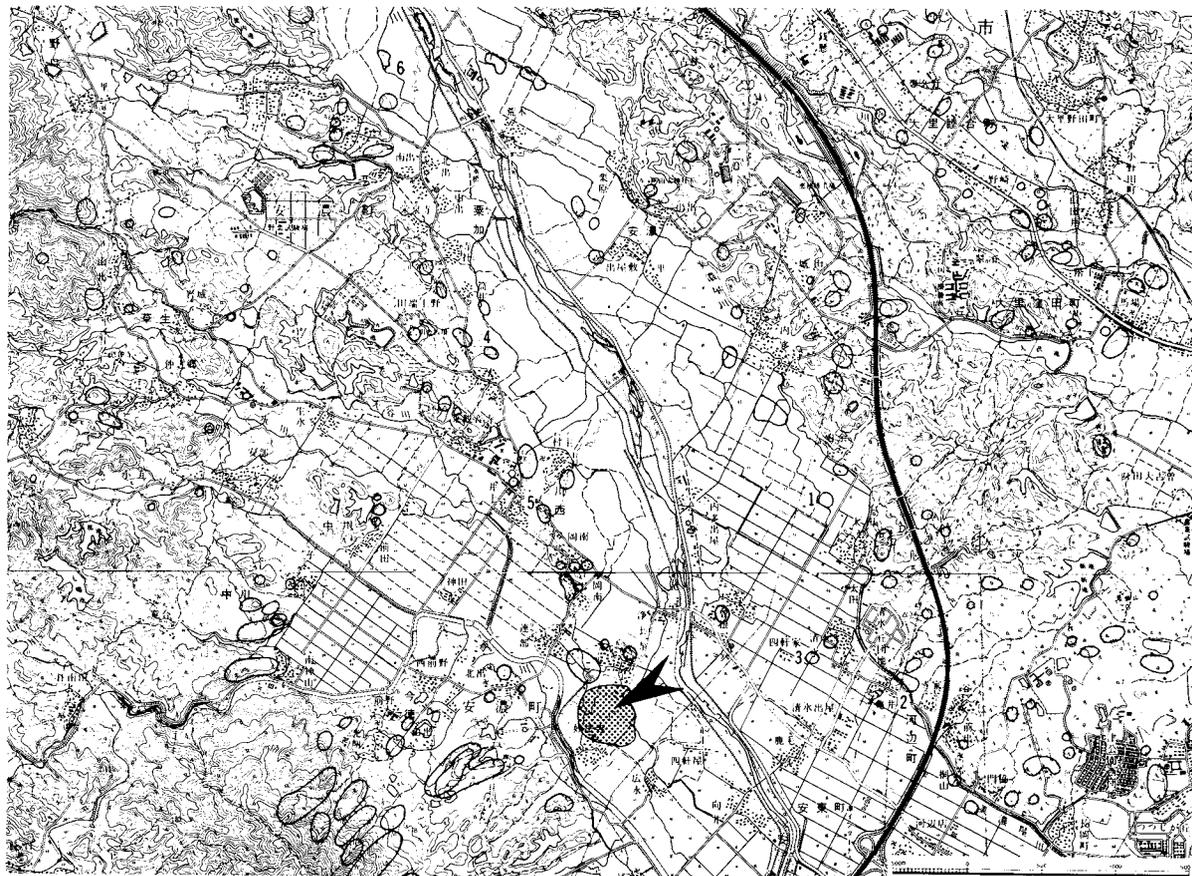
浄土寺米買遺跡は、東を安濃川、西を穴倉川に挟まれた標高約12~14mの沖積地に位置し、現状は水田と畑地である。行政上は、安芸郡安濃町大字浄土寺字米買に所在し、これまで浄土寺西遺跡(県遺跡番号4376)とされていたが、今回の調査により改称した。

安濃川流域と東方の美濃屋川流域及び周辺の丘陵部には、多数の遺跡が分布しており、開拓の歴史を

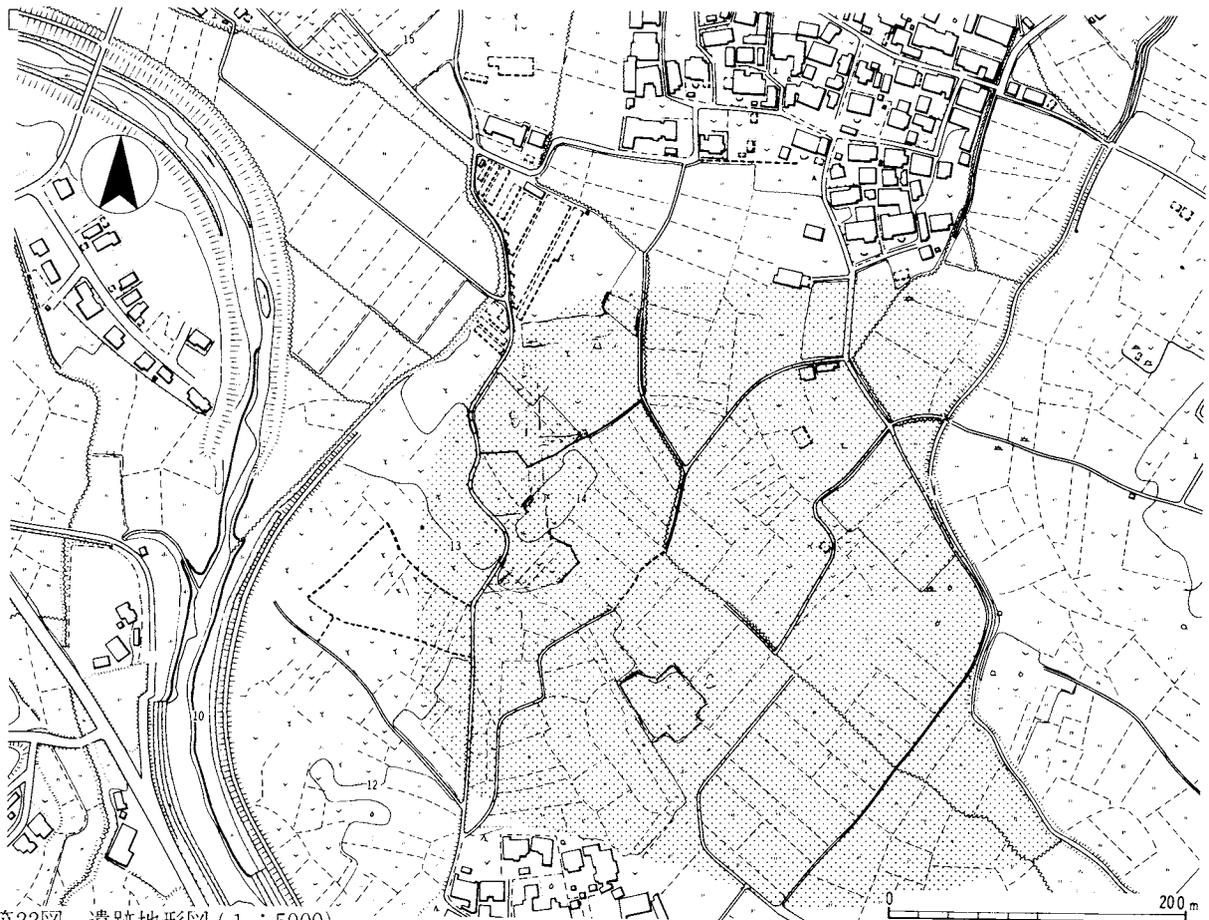
古くから辿ることができる。

縄文時代の遺跡には、辻の内遺跡^①と当遺跡の南方約4kmにある納所遺跡^②があり、いずれも晩期の土器が出土している。弥生時代から古墳時代にかけての遺跡には、上述の納所遺跡が安濃川流域屈指の大集落遺跡として著名であるが、美濃屋川流域にも亀井遺跡^③・清水西遺跡^④などがあり、周辺の古墳群の形成と関連して農耕社会の発展の足跡を知ることができる。

古墳時代以降の遺跡の発掘調査例も多いが、北方約2.5kmの北浦遺跡^⑤では、弥生時代後期の竪穴住居1棟のほかは奈良・平安時代の竪穴住居および掘立柱建物で形成されている。これらの律令制村落の一



第21図 遺跡位置図(1:50000)



第22図 遺跡地形図(1:5000)

端は、当遺跡の東南側にある浄土寺南遺跡^⑥において、昭和55年度の県営圃場整備事業に伴って発掘調査されている。そこでは調査地区内に限定されているとはいえ、竪穴住居26棟と、掘立柱建物12棟が検出され、特に後者については5棟の大型倉庫があり、官衙的集落ではないかと想定されている。

鎌倉時代以降の中世集落遺跡としては、北方約1.5 kmに当る多倉田遺跡^⑦からは、掘立柱建物や土坑墓などが検出されており、さらに北方約4 kmに当る大塚久保遺跡^⑧でも、本年度の県営圃場整備事業に伴

って掘立柱建物、土坑墓、井戸、特異な石組遺構が検出されている。これらの集落や墓地の立地や、あるいは豊富な出土遺物は、安濃川流域の歴史の変遷を物語るものであり、今回の当遺跡の調査でさらに新たな好資料を得たこととなり、文献資料と併せて将来の検討が期待されることとなった。

なお、浄土寺米買遺跡と浄土寺南遺跡は隣接しており、おそらく同一集落に内包されていると思われるので、遺跡範囲は両遺跡を統一して表示した。

2. 遺 構

今回の調査は、浄土寺集落に最も近い箇所をA地区とし、その隣接部をC地区、C地区の東南方向の一段高い畑部分の妙法寺集落に近い箇所をB地区とした。

なお、浄土寺米買遺跡の基本的層序は、第Ⅰ層：耕作土(約20cm)、第Ⅱ層：茶褐色砂質土(約30cm)、第Ⅲ層：黄褐色砂質層(地山)である。第Ⅱ層が遺物

包含層であり、場所によっては60cmの部分がある。

1. A地区

全体的に遺構分布は薄いのが、平安時代末葉から鎌倉時代の掘立柱建物(SB1)と溝(SD2)のみで、他の溝(SD3～7)は近世のものである。

SB1 桁行2間(4.6m)、梁行2間(4.2m)で、束柱を持ち、倉庫と思われる。



第23図 発掘調査区域図(1:2000)

SD2 幅2m、深さ60cmのU字溝で出土遺物はすくない。

2. B地区

SB5 桁行2間以上、梁行2間(3.2m)で東柱を持つ掘立柱建物である。北方はSD1・2・3と平行している。鎌倉時代。

SB11 桁行3間(6.3m)、梁行2間(3.9m)で東柱を持つ掘立柱建物である。柱間が不揃いであるが、隣接する。SB12・13と平行し、SD9・13とも平行している。鎌倉時代。

SB12 桁行2間(2.8m)、梁行2間(2.1m)で中央に東柱を持つ掘立柱建物である。柱間がやや不揃いであるが、倉庫と思われる。

SB13 桁行4間(8.1m)、梁行4間(5.5m)の掘立柱建物と思われるが、柱間がやや不揃いで、一部の柱穴については確認されなかった。

SB17 桁行2間(4.2m)、梁行2間(4.2m)の掘立柱建物で、柱間は等間であり、中央に東柱を持つ倉庫と思われる。

SB18 桁行は北辺で3間(3.6m)、南辺では3間または4間(3.7m)、梁行2間(3.1m)の掘立柱建物である。柱間が極端に不揃いであるが、井戸(SE19)の覆屋の可能性もある。

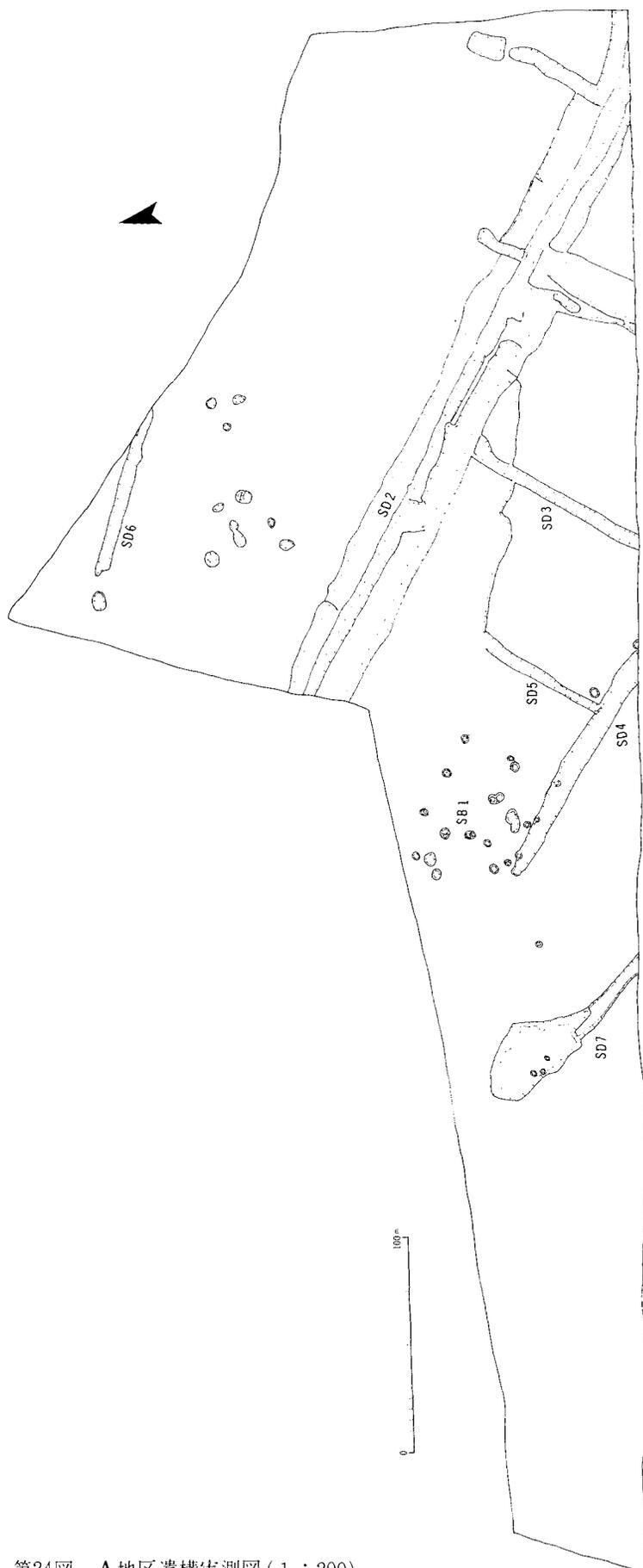
SB20 桁行3間以上、梁行2間以上の掘立柱建物と思われるが、東辺と南辺は削平されたためか確認されなかった。

SA15 SB13とSD16の間に位置する3間等間の柵と思われ、北端はSB13の北辺と一致する。

SA21 SB17の東方にあり3間等間の柵と思われるが、あるいは掘立柱建物になるかもしれない。

SE7 SD8の調査途中に確認されたもので、方形の掘り方は一辺約2.4m、深さ約1.3mあり、その中央に桧材の曲物を据え、さらに曲物の上面で四方に板を縦に8~10枚を並べて井戸枠とし、その外側に砂利を埋土として入れている。掘方埋土及び枠内埋土から鎌倉時代の山茶椀、土師器が出土した。

SE15 SB18のやや東西に片寄った所にある円形要素掘りの井戸で、直径1.2m、深さ1.3mである。



第24図 A地区遺構実測図(1:200)

鎌倉時代の山茶碗、土師器が少量出土したのみである。

SD1・2・3 調査地区の北端に当り、A地区の西端部と接する所にある。SD1が最も幅が広く1.5mあり、SD2・3は幅30~60cmで、3溝とも深さは10cm前後と浅い。少量の山茶碗と土師器片が出土した。

SD8 幅3~4m、深さ60~80cmの大溝で、昭和55年度調査の際にも同様例があり、関連するものと思われる。溝内からは弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土した。

SD9・10・14・16・22 相互に平行関係にある溝で、SD9が幅60~70cmで最も大きく、最も小さいSD22が幅30~40cmであり、深さはともに20~30cmで、底面はほとんど水平である。いずれも少量の山茶碗と土師器片が出土した。

SK4 SB5の北辺と重複する一辺1.7~1.9m、深さ15cmの浅い土壇で、少量の山茶碗と土師器片が出土した。

SK6 SB5の南方に当り、現長約9m、幅約2m、深さ20~30cmの不定形の土壇で、底面は起伏があるが東端部が最も深い。山茶碗と土師器片が出土した。

3. C地区

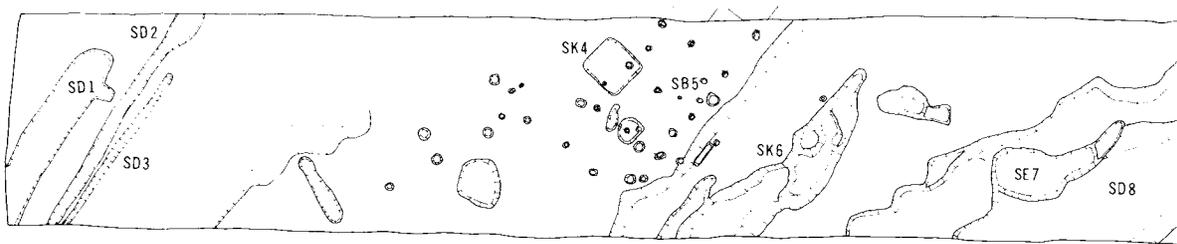
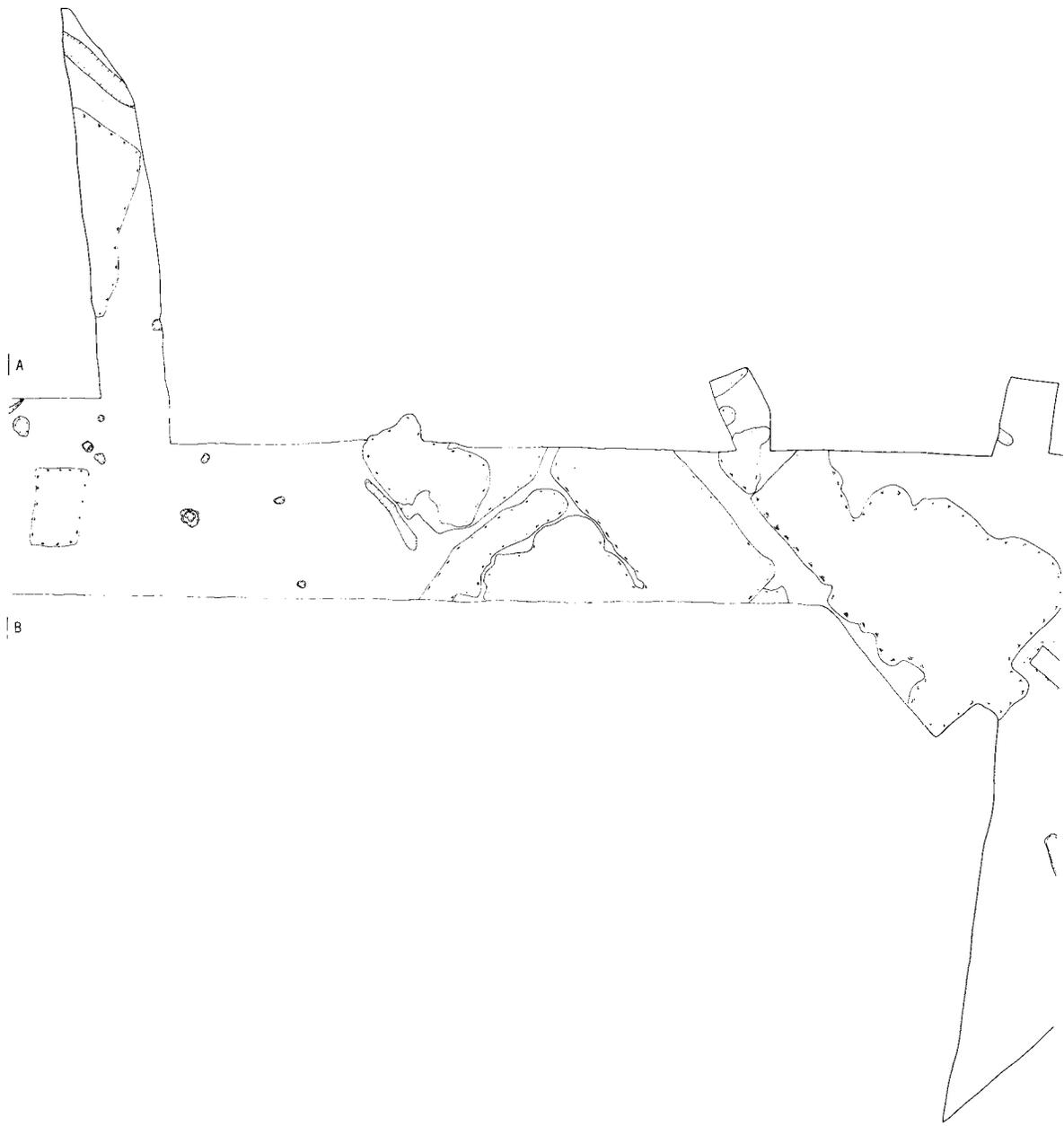
SD5 南端部で幅をせばめながらL字状に屈折する溝である。奈良時代に属し、幅4~4.5m、深さ50cmである。

SK3 東部が調査地区外にあり全容は不明であるが、現長3m、幅2m、深さ30cmであり、あるいは、SD5に平行する溝の端部かとも思われる。

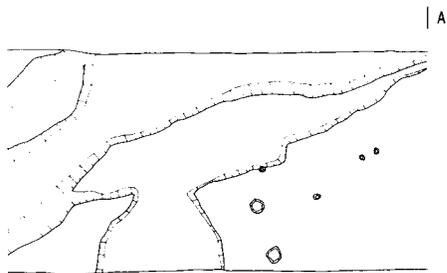
SD1・2・4・6・7 相互に平行あるいは直交しており、そのうち最も大きいSD2は、幅2.5m、深さ50cmで、西端で北に屈折する。いずれも、鎌倉時代から室町時代にかけての山茶碗・土師器片が少量出土した。



第25図 C地区遺構実測図（1：200）



第26図 B地区遺構実測図(1:200)



| B

3. 遺物

A～C地区で出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・青磁・山茶碗・山皿の他にフイゴ羽口があり、整理箱にして約50箱ほどである。各種の遺物のうち中心をなすものは、鎌倉時代の山茶碗・山皿・土師器であり、これに次いで、奈良・平安時代の須恵器・土師器が多い。殊に円面硯の出土は、遺跡の性格を考える上で重要である。

円面硯 (1・2) (1)は、硯部 $\frac{1}{2}$ ほどの破片であり、口径14.6cm。陸と海の区別は明瞭であり、硯部外端には2条の突帯がめぐる。(2)は、脚部のみの破片であり、推定底径20cm。長方形の透しをもつ。(1)と(2)は、胎土・焼成も異なり、復原径から考えても別個体のもと思われる。

須恵器蓋 (3) 口径15.2cm。平坦な天井部は、わずかに凹む。口縁部は垂直に折れ、端部は外反する。擬宝珠つまみを欠く。天井部外面はヘラケズリするが、他はヨコナデ調整する。

須恵器杯 (4) 口径16.0cm・器高45cm。口縁部は、直線的に外反し、端部は丸い。断面方形の高台

は、やや内側に直立して付けられる。

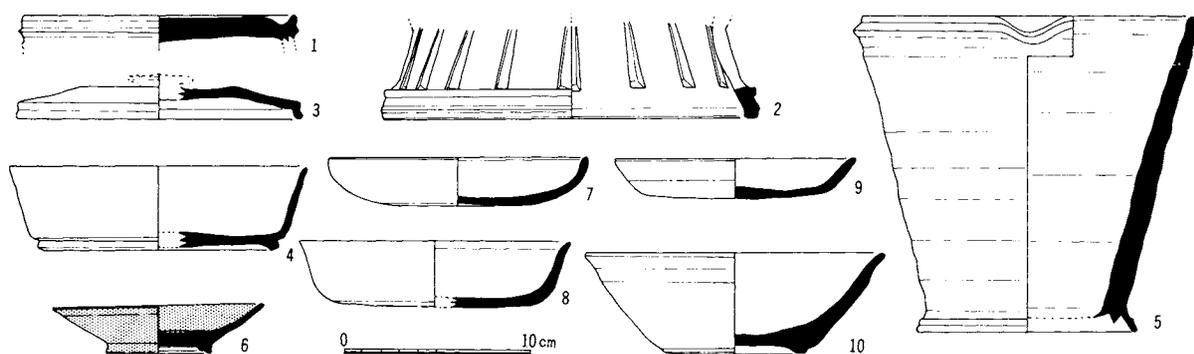
須恵器播鉢 (5) 推定口径17.7cm・器高16.5～18.0cm。底部を欠く。口縁部は片口となる。

緑釉皿 (6) 口径11.3cm・器高2.2cm～2.6cm。口縁部は大きく外反し、直立する高台が付く。底部内面には、細い沈線が1条めぐる。底部外面以外に鮮かな緑釉がかけられる。硬質。

土師器皿 (7～9) 各種のものがある。(7)は、口径13.8cm・器高2.6cm。口縁部は内弯し、端部でわずかに直立気味となる。口縁部内外面をヨコナデし、口縁部と底部の境をヘラケズリする。褐色。

(8)は、口径14.5cm・器高3.5cm。底部は平坦であり、口縁部は外傾し端部で外反する。褐色。(9)は、口径12.8cm・器高2.2cm。平らな底部は、中央部でわずかに凹む。口縁部は、直線的に外傾する。淡褐色。

山茶碗 (10) 口径15～16cm・器高5.5cm前後のものが多い。直線的に開く体部は、口縁部で外反する。高台は、断面逆台形のもの粗雑に付けられる。



第27図 土器実測図 (1:4)

4. 小 結

浄土寺米買遺跡は、隣接する浄土寺南遺跡と一体的であることが当初から推定されたが、調査の結果はそれを裏付けることとなった。

C地区のSD8が前回調査の大溝と関連するものであることは上述したが、当遺跡における本格的な開拓の歴史が、弥生時代末から古墳時代前期に当る

ことがさらに明らかとなった。

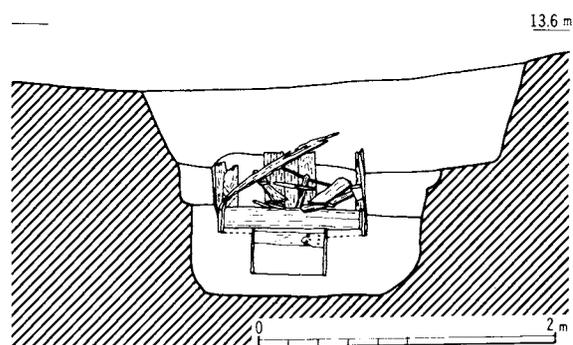
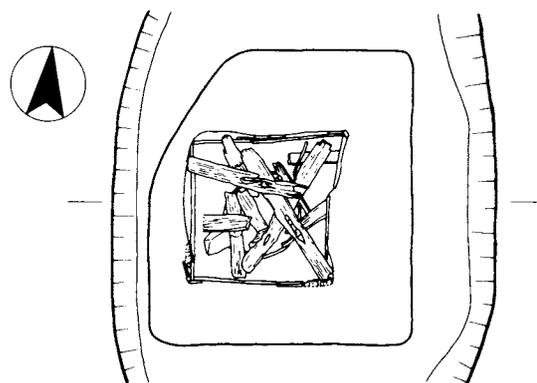
次いで奈良・平安時代の遺溝は土塚と溝跡のみであったが、B地区の遺物包含層から須恵器の円面硯破片2点が出土したことから、識字層の居住が想定され、官衙的集落ではないかという昭和55年度調査の想定を裏付けることとなった。

なお、この円面硯は三重県下で16例目に当るものである。

A・C地区では、鎌倉時代の掘立柱建物と溝を多数検出することができた。そのうち掘立柱建物は、柱間が不揃いであることが特色であるが、こうした傾向は県下では平安時代後半頃から一般的になるようである。

掘立柱建物と溝の位置関係についてみると、相互に平行関係にあり、おそらく屋敷地を区画する性格を持つものと思われる。今後はこうした中世村落内の屋敷地の広さや建物の組み合わせを追求することが大きな課題となるものと思われるが、その意味からも今回の調査は貴重な成果をもたらしたものである。

なお、C地区で検出した鎌倉時代の井戸(SE17)は、木組み構造を持つものであるが、県下における鎌倉時代の井戸の類例のうち、木組みの柱材の遺存例は、度会郡二見町荘遺跡^⑨で1例が検出されているほかは素掘り又は石積みがほとんどであるため、中世における井戸の構造を知るうえで極めて貴重な類例を得ることとなった。
(早川裕己)



第28図 SE17実測図(1:40)

第2表 三重県内古代陶硯出土遺跡一覧表

遺跡名	所在地	陶硯の種類と数量	保管先	主要参考文献
新野遺跡	員弁郡東員町中上字新野	圈足硯(1)	三重県教育委員会	東員町教育委員会『西山遺跡・新野遺跡』1976
西金井遺跡	桑名市西金井字高添	圈足硯(1)	桑名市教育委員会	岩野見司「西金井考古遺跡」『桑名市補篇』1950
岡山第1号窯	四日市市上海老町字東岡	圈足硯(1)	四日市市郷土資料庫	四日市市教育委員会『岡山古窯址群第1号窯』1966
岡山第2号窯	〃	圈足硯(1) 圈足円形硯(1)	〃	四日市市教育委員会『岡山古窯址群発掘調査報告』1971
鳩浦窯跡	四日市市大矢知町鳩浦	圈足硯(1)	〃	岩野見司「四日市の考古遺跡」『四日市市史』1961
西ヶ広遺跡	四日市市伊坂町字松山	圈足硯(1) 無脚硯(1)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970
境谷遺跡	鈴鹿市国分町境谷	圈足硯(?)	個人	三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財包蔵地一覧表2』
稲生東遺跡	鈴鹿市稲生町字中村	圈足硯(1)	鈴鹿市教育委員会	鈴鹿市教育委員会『稲生東遺跡発掘調査報告』1975
西高山C遺跡	鈴鹿市郡山町字西高山	円面硯(1) 蹄脚硯(1)	鈴鹿市教育委員会	鈴鹿市教育委員会『西高山遺跡発掘調査概要』1976
末野C遺跡	鈴鹿市郡山町字末野	圈足硯(1)	鈴鹿市教育委員会	鈴鹿市遺跡調査会『末野C遺跡発掘調査報告』1979
田茂遺跡	亀山市田茂町	圈足硯(1)	亀山市教育委員会	三重大学歴史研究会『田茂遺跡調査概要』1978

浄土寺南遺跡	安芸郡安濃町大字浄土寺字立町	圈足硯(3)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
浄土寺米買遺跡	安芸郡安濃町大字浄土寺字米買	圈足硯(2)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1981
堀田遺跡	一志郡嬉野町大字天花寺字堀田	圈足硯(1) 円面硯(1)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『埋蔵文化財年報9』1979
天花寺廃寺	一志郡嬉野町大字天花寺字堀田	圈足硯(1)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1980
平生遺跡	一志郡嬉野町大字平生字のぼこ	圈足硯(1)	三重県教育委員会	平生遺跡発掘調査団『平生遺跡発掘調査報告』1976
東裏遺跡	多気郡多気町大字河田字高木	圈足硯(1) 緑釉風字硯(1)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報9』1979
斎宮跡	多気郡明和町大字斎宮ほか	圈足硯(26) 緑釉風字硯(1) 瓦器風字硯(1) 灰釉風字硯(4) 黒色土器風字硯(2) 蹄脚硯(2) 転用硯(3)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『古里遺跡斎王宮址』1974ほか
北堀池遺跡	上野市大内字北堀池	圈足硯(1) 転用硯(1)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『北堀池遺跡発掘調査概要』Ⅲ1980
彼岸台遺跡	上野市猪田字波岸台	圈足硯(1)	三重県教育委員会	三重県教育委員会『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1979
唐木谷遺跡	上野市猪田字唐木谷	転用硯(2)	上野市教育委員会	上野市遺跡調査会『唐木谷遺跡発掘調査報告』1979
赤目壇遺跡	名張市赤目町壇字前垣内	圈足硯(2)	名張市教育委員会	水口昌也「考古ニュース大垣内古墳で硯片発見」『考古学ジャーナル』1941981

(註)

- ① 伊藤克幸・下村登良男 『安芸郡安濃村・辻の内遺跡』安濃村遺跡調査会 1975
- ② 伊藤久嗣 『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県教育委員会 1980
- ③ 谷本鋭次 「津市河辺町・亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』4 三重県教育委員会 1973
- ④ 谷本鋭次 「安芸郡安濃村・清水西遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』5 三重県教育委員会 1973
- ⑤ 伊藤久嗣 「安芸郡安濃町・北浦遺跡」『昭和53年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』3 三重県教育委員会 1979
- ⑥ 中村信裕 「安芸郡安濃町・浄土寺南遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1981
- ⑦ 早川裕己 『多倉田遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1981
- ⑧ 中村信裕 「安芸郡安濃町・大塚久保遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1982

VI 一志郡嬉野町 ^{ほった}堀田遺跡

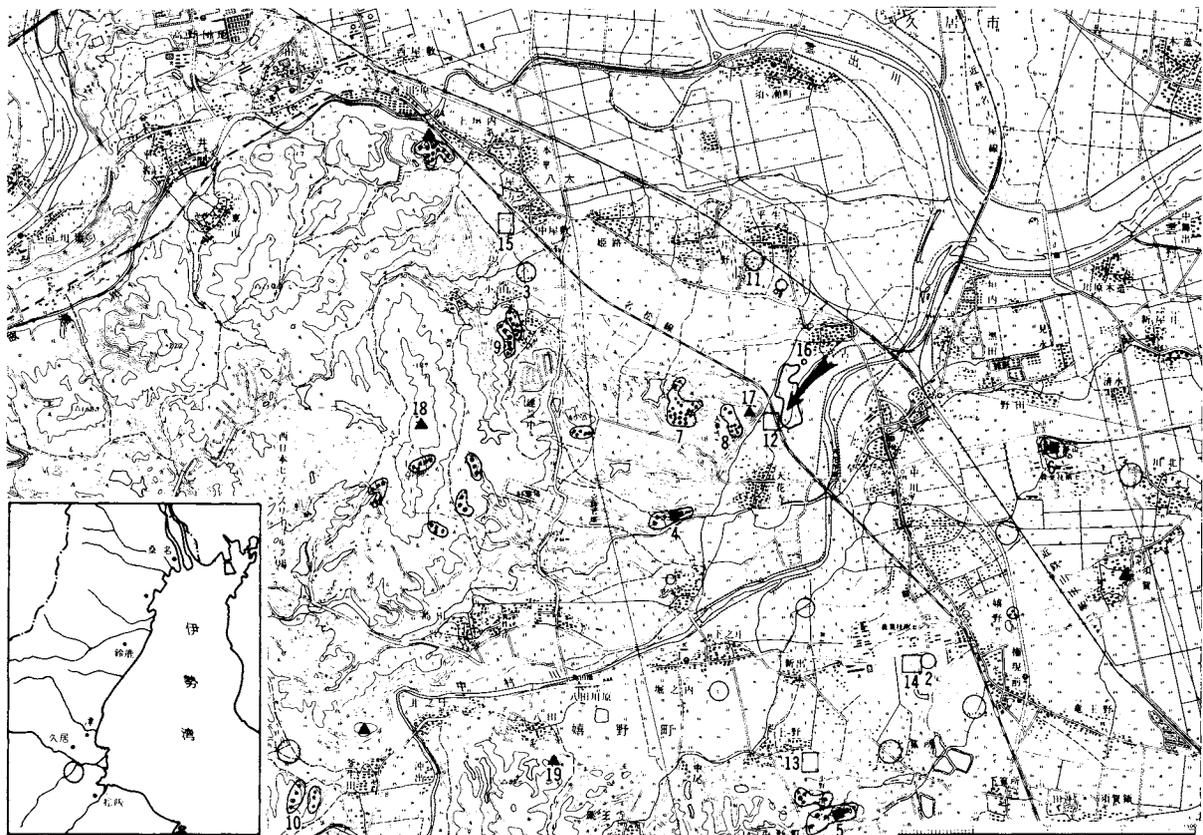
1. 位置と環境

堀田遺跡は、中村川が雲出川に合流する地点より約1.5 km上流の左岸に位置する。近鉄中川駅の西方1 km、宮古と天花寺の部落の中間で古くより博仏を出土したことで著名な天花寺廃寺とは国鉄名松線をはさんで東に接した箇所である。宮古の集落と同様、中村川のすぐ左岸の水田より数10cm一段高い畑地で、標高10m 前後である。遺物の散布する範囲は相当広く、東西60m、南北200 mに亘っており、現在水田となっている箇所にもひろがる可能性がある。今回調査した箇所は行政的には嬉野町宮古字堀田にあたる。

古代の三重県において雲出川の果たした役割は大きい。縄文時代末期、新しい弥生文化をもたらした人々は雲出川沿いに下ってきた。それは稲作と鉄器を

伴った新しい文化であり次の古墳文化もまた雲出川沿いに西日本からもたらされたと考えられている。その後も都が京都へうつるまで、この川は畿内地方と伊勢国を結ぶ強力な政治、文化のルートであった。

このため、雲出川が平野部に出る付近には多くの遺跡の存在が知られている。そのうえ、それらの遺跡は県下の他の遺跡とはその内容をやや異にしており、畿内地方との密接なかかわりが看取される。弥生文化の県下における最古のものは当遺跡より更に下った三雲村中ノ庄遺跡に見られ、県下の弥生文化はここより北上して、安濃川の津市納所遺跡、鈴鹿川の鈴鹿市上箕田遺跡へと伝播していった。弥生前期の遺跡を県下の河川別に見ると、この雲出川沿いに最も多く14箇所を数える。当遺跡の周辺では権現



第29図 遺跡位置図 (1 : 50000)

前西方遺跡(2)、鳥居本遺跡(3)等がある。続く古墳時代のはじまりもまた雲出川が平野部に出た箇所においてみられる。それは4世紀後半代の築造とされ、伊勢地方における最古の古墳と考えられており、出土遺物も三角縁神獸鏡をはじめ各種玉製品を出土している筒野古墳(4)、向山古墳(5)、西山古墳(6)の三基の前方後方墳である。これら前期古墳につづく古墳も周辺部に多く見られる。すぐ西の丘陵には赤坂古墳群(7)、小谷古墳群(8)小山古墳群(9)が、中村川の上流に杉谷古墳群(10)が分布している。歴史時代に入ると更に畿内的な要素が強く見られる。平生遺跡(11)、鳥居本遺跡では畿内と全くかわらない土師器杯、土馬等が出土しており、他地域の遺跡には見られない様相である。この時期の寺院跡も多く見られる。すぐ西の天花寺廃寺(12)、南方の円光寺跡(13)、嬉野廃寺(14)、北西方の斑光寺跡(15)等がある。

以上のように、この地域は新しい時代のはじまり

には常に先進地帯であった。それは畿内地方からの新しい文化の入口であり、あたかも畿内の人々が直接この地にやってきたかの様相である。あるいはこの地の人々が積極的に新しい文化を取り入れたにしても、この地域にそういった新しい文化、政治に対応し得る生産的基盤が既にあったものと思われる。

また、宮古は聖武天皇の伊勢行幸の際の一志頓宮があった地であるとする説がある。さらに当遺跡のすぐ東には「忘れ井」(16)がある。自然石で囲んだ径60~70cmの方形の井戸で、そばに大正六年に建てられた碑が建ち、それには「齋王恂子内親王御遺蹟忘井之碑」と刻まれている。恂子内親王は鳥羽天皇の天仁元(1108)年齋王に卜定された恂子のことである。

さらに、時代が下り、中世になると各所に城が築かれている。すぐ西の丘陵上には天花寺城跡(17)をはじめ小山城跡(18)、八田城跡(19)等がある。

2. 遺 構

1. A地区

検出された遺構は、奈良時代の溝1条、土壇1基 時期不明の柱穴数個である。

これらは幅2m、長さ53mの細長い発掘区の各所で点在して検出された。

遺構の層序は、第1層に濁灰色の水田耕作土が20cmあり、第2層に赤灰色粘質の床土が続く。第3層に混灰茶褐色の遺物包含層がある。部分的に遺物包含層の上層に黄灰色土がのるが、ほぼ単一層序である。第4層は黄茶色の砂質で地山となる。地山面はほぼ平坦で続いているが、発掘区の中ほどから徐々に東へ傾斜していく。

SK1

発掘区の最西部で検出されたもので、地区外へ続くため全体の形状は不明であるが二つの陽部が検出されている。1辺160cm、深さ20cm。埋土は茶褐色砂質土である。土師器、須恵器の小片が出土している。

SD2

発掘区の東部で斜行するように検出されたもので、

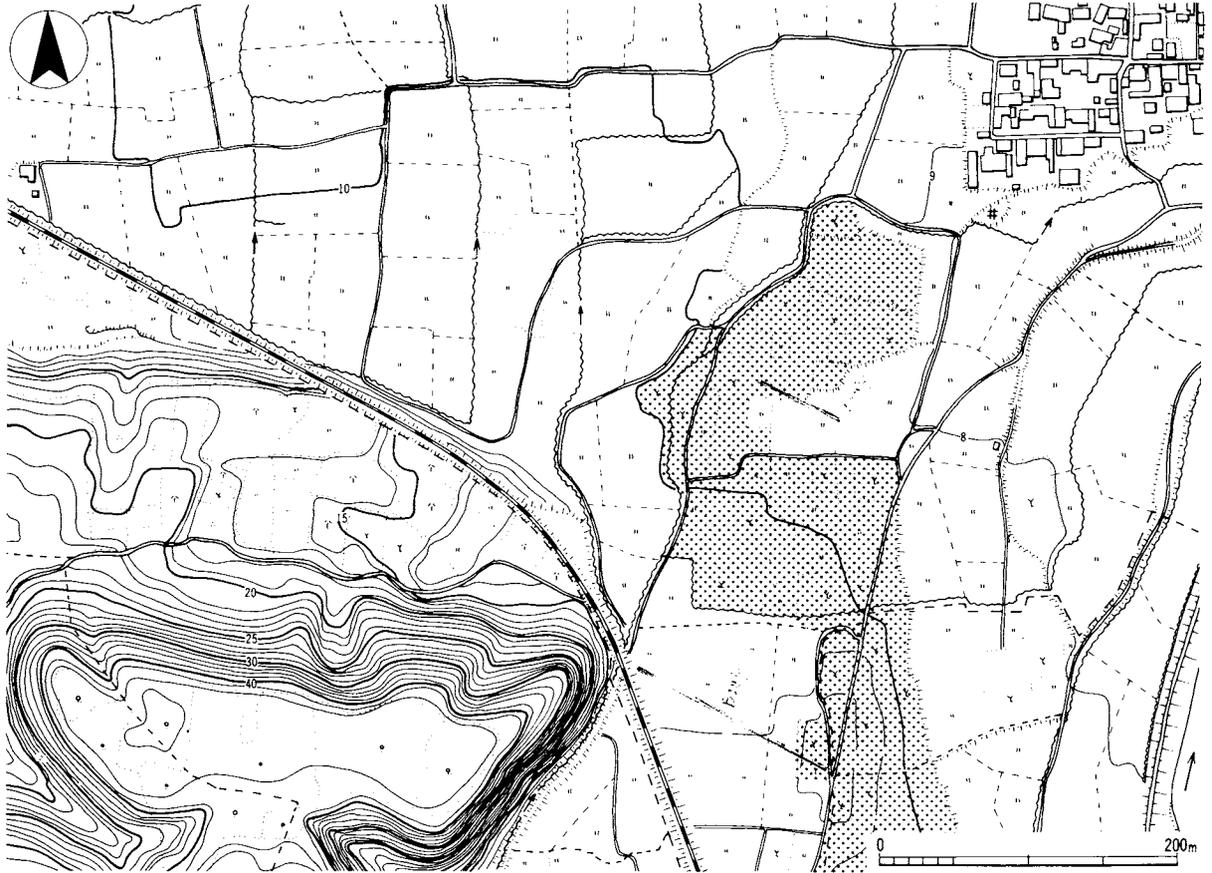
幅3m、深さ20~40cm。埋土は暗茶褐色粘質土である。脚柱部に面取りのある土師器高杯や平瓦・丸瓦が出土している。軒先瓦はない。

2. B地区

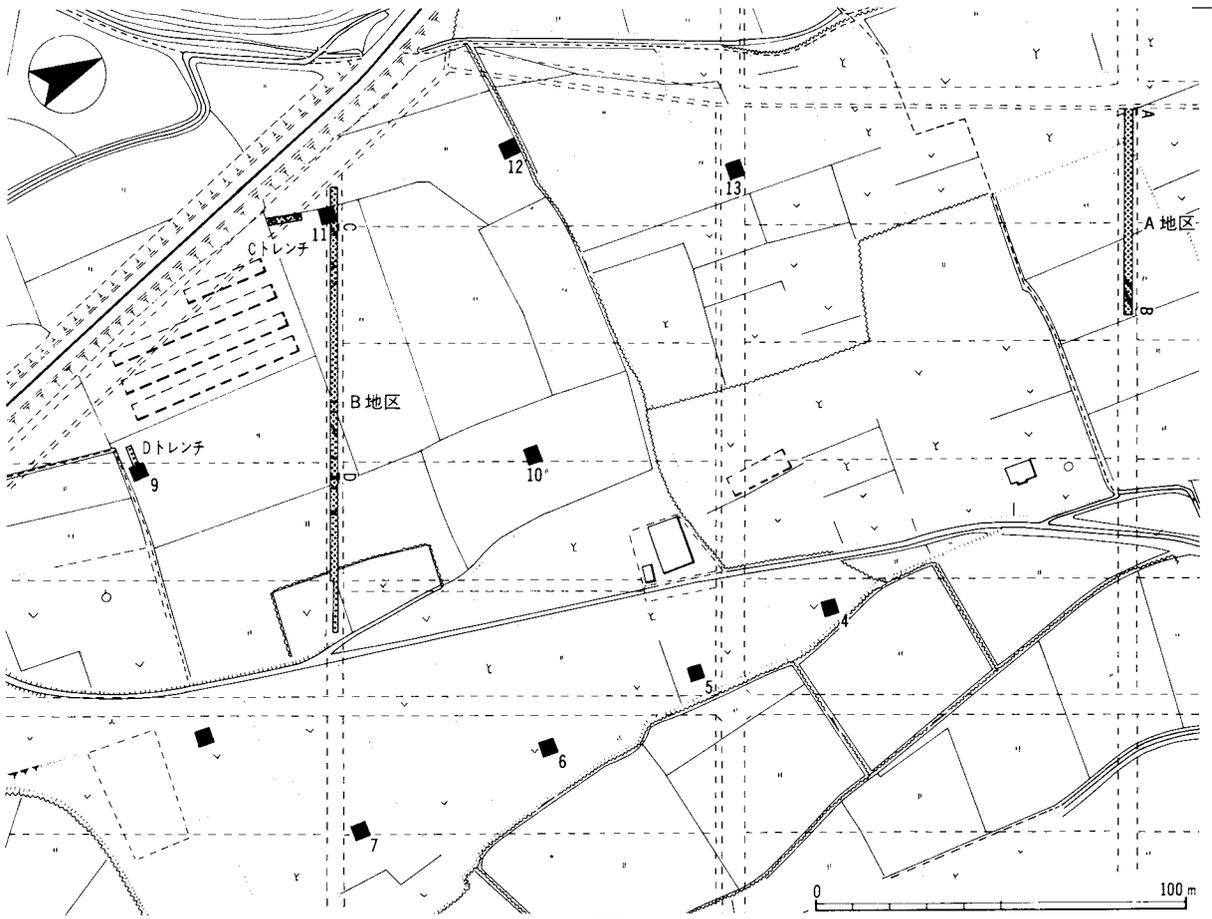
検出された遺構は、溝4条である。柱穴は皆無であった。

これらは幅1~2m、長さ123mの細長い発掘区のほぼ西半で検出された。各々重複はなく、埋土の中から大量の平・丸瓦が出土している。中には数点であるが、重圏文の軒平瓦や軒丸瓦が出土している。土師器、須恵器も出土しているが殆どが瓦であった。その出土状況から意図的に埋められたものではない。

遺跡の層序は、部分的に攪乱はあるが第1層に濁灰色の水田耕作土が20cmほどあり、第2層に混灰黄褐色粘質土(床)、第3層に灰褐色土、第4層に黄褐色粘質土(床)、第5層に灰茶色土、第6層に混茶褐色粘質土(床)、第7層に茶褐色土、第8層に混茶褐色粘質土(床)、第9層に遺物包含層の混砂茶褐色土が続く。遺物包含層の層厚は20~30cmで、表土が



第30図 遺跡地形図 (1 : 5000)



第31図 遺跡平面図 (1 : 200)

■ 第一次調査 ▨ 第二次調査 — 現況 - - - 計画

ら1mほどで黄褐色砂質の地山となる。地山面はほぼ平坦に続く。

SD 3

発掘区の西部で検出された大溝で、L字状を呈している。幅5m、深さ50cm～1m。底部はほぼ平坦で、西肩が高い。埋土は遺物包含層と同じ混砂茶褐色土である。土砂崩れのため層序を明確にできなかった部分がある。他の溝に比較して特に瓦の出土が多かった。

SD 4

SD 3の東方30mの地点で検出された溝である。幅9m、深さ50cm。西肩は掘形が明確であるが、東肩は徐々に傾斜している。

SD 5

SD 4の東方3mの地点でSD 4と並行して検出された溝である。幅5m、深さ40～80cm。西肩が高く、中段をもつ。埋土は暗茶褐色土である。底部に砂層は認められなかった。

SD 6

SD 5の東7mの地点でSD 4・5と並行して検出された溝である。幅1.2m、深6cmで、検出され

た溝の中では一番規模が小さい。西2mにSD 5の段をつくるように肩部が検出されている。

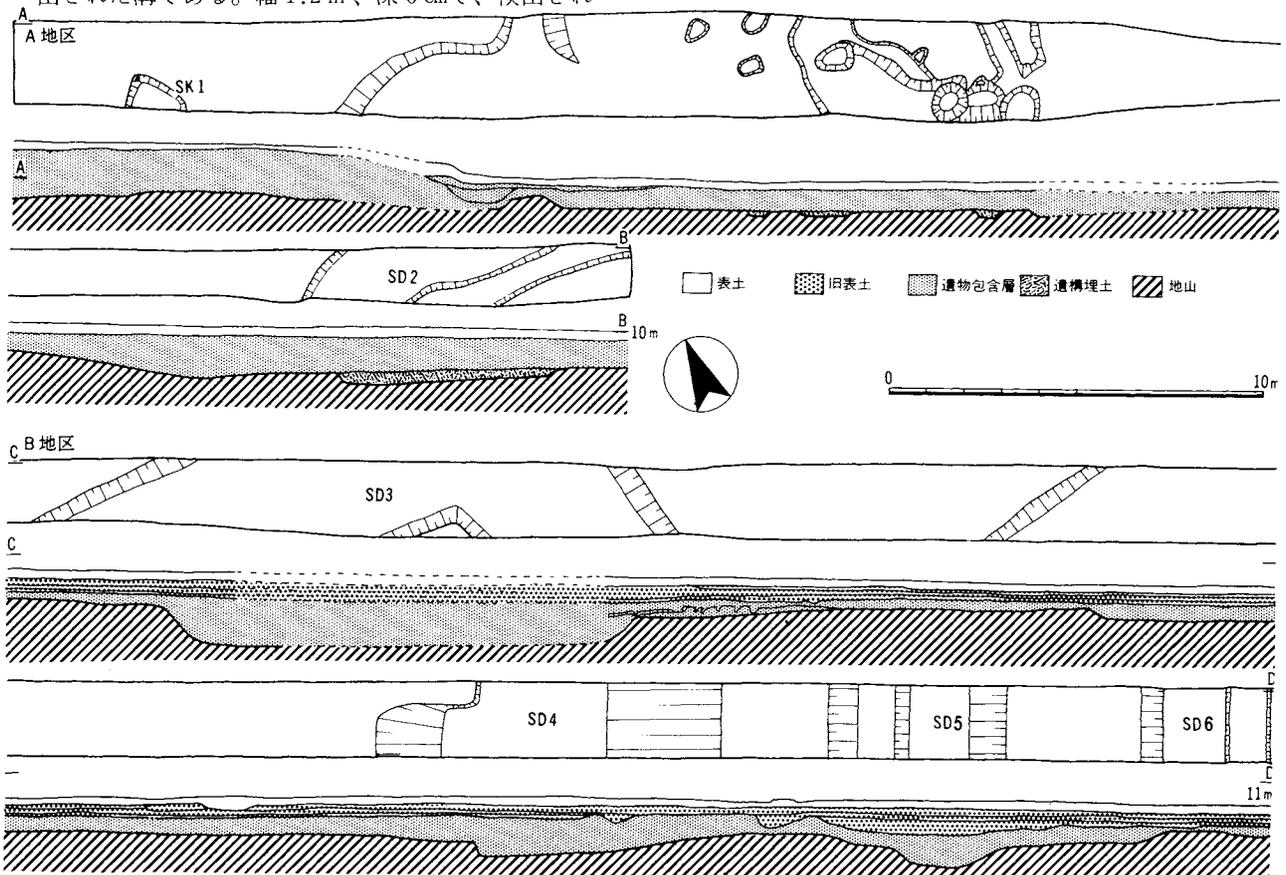
3. Cトレンチ

B地区で検出されたSD 4の西方へののびを確認するために幅2m、長さ10mの細長いトレンチをいれた。その結果SD 4の続きとみられる幅4.5m、深さ40～60cmの大溝が検出された。

層序は第4層までB地区と同じで2層の水田があり、第5層に暗茶褐色粘質土の遺物包含層が続いた。地山は黄褐色砂質土である。溝の埋土は下半がやや粘質が強く、2層に分かれる。軒瓦はないが平瓦・丸瓦が出土した。少量である。

4. Dトレンチ

B地区で検出されたSD 4の南方へののびを確認するために幅2m、長さ8mの細長いトレンチをいれた。層序は同じように4層にわたる水田を確認し、その下層に層厚80cmの遺物包含層を確認したが遺構は認められなかった。



第32図 遺構平面図・土層断面図 (1:200)

3. 遺物

第一次・第二次調査で出土した遺物は、整理箱（60×40×20cm）にしておよそ90箱あり、瓦類・土師器・須恵器のほか灰釉陶器・山茶碗があり、緑釉陶器も数点ある。遺物は、前述したように包含層出土のものが大半であるが、第一次調査の13グリッドで検出した竪穴住居のカマドから出土した遺物（1・2）もある。今回の概要報告では、代表的なものの数例にとどめ、また瓦類については既に報告しているので除外した。

1. 土師器

杯（1） 口径13.1cm、器高4.0cm。口縁部と底部の境は丸味をもち、口縁部は直線的に開き、底部は平底となる。口縁部内外面をヨコナデし、口縁部と底部の境は、面とり風にヘラケズリする。底部内面は、一定方向のナデを施し、外面はオサエによる指頭痕をのこす。細砂をかなり含み淡茶色を呈す。13グリッドの竪穴住居から出土。

皿A（2～4） 口径20cm・器高3cm前後のもので、口縁端部が内側にまきこまれるものを皿Aとした。

(2)は、口径20.6cm・器高2.7cm。(3)は、口径20.2cm・器高3.2cm。(4)は、口径19.4cm・器高3.7cm。(2)は、内面に斜方射状暗文、(3)は正方射状暗文を施すが、(4)は暗文を施さない。ともに、口縁部をヨコナデする。(2・3)は、底部外面をヘラケズリし、(4)は口縁部と底部の境のみをヘラケズリする。(3)は細砂を殆ど含まないが、(2・4)はかなりの細砂を含む。ともに明褐色を呈する。

皿B（5・6） 口径14cm以下で、口縁部が外反するものを皿Bとした。

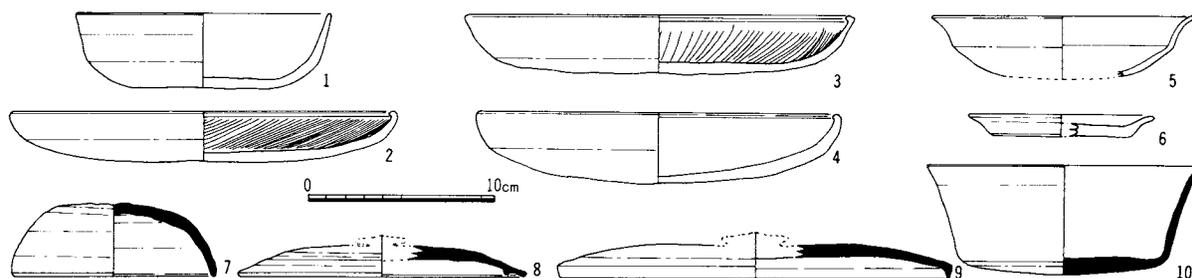
(5)は、口径14.2cm・推定器高3.3cm。口縁部は大きく外反し、口縁部と底部の境に稜をつくる。底部は、丸味をもつものと考えられる。細砂を含み、淡褐色を呈す。(6)は、口径10cm・器高1.1cmの小皿である。口縁部は、ヨコナデされ外反する。底部は、平底で不調整。砂を殆ど含まず、淡褐色を呈す。

2. 須恵器

蓋（7～9） 各種各様のものが出土しており、宝珠つまみをもたないもの（7）、つまみを有し口縁端部内面にかえりをもつもの（8）、つまみを有し口縁端部が垂直に折り返えされるもの（9）に区分できる。

(7)は、口径10.8cm・器高3.8cm。口縁部と天井部の境に稜をもたず、丸く成形される。口縁部内外面をヨコナデし、天井部内面を一定方向にナデる。天井部外面は、ヘラ切りのままである。(8)は、口径15.4cm・推定器高2.2cm。口縁部内面に、短いかえりをもつ。口縁部内外面をヨコナデし、天井部内面を一定方向にナデる。天井部は、ていねいにヘラケズリする。(9)は、口径20.8cmで、口縁端部が垂直に折れる。

杯（10） 口径14.7cm、器高5.8cm。口縁部は、わずかに外反気味に引き出され、底部は平底となる。口縁部内外面をヨコナデし、底部外面をヘラケズリする。



第33図 遺物実測図（1：4）

4. 小 結

堀田遺跡では、第一次調査の結果にもとづき包含層上面以下の部分については現状保存されることになり、今回の発掘調査は、水路部分のみに限定して行ない、大溝の検出や瓦類をはじめとする大量の遺物の出土など意義ある調査であった。

第一次調査では、1～3グリッドで室町時代の遺構・遺物を確認し、9～13グリッドで奈良時代を中心とする遺構・遺物を確認し得た。特に13グリッドでは、奈良時代の竪穴住居を確認し、天花寺廃寺との関連が注目される。なお、第一次調査の概要については、第3表に示した。

第二次調査では、A・Bの二地区を中心に調査を実施した。

A地区は、土師器を中心にした中世の土器類が出土しており、これより北方の平生遺跡との関連が窺われる。

B地区は、大溝4条の検出である。SD3は、南北方向に走る溝が西へ直角に折れ曲がれるコーナー部分の検出である。隣接する天花寺廃寺を囲む外周溝の可能性も想定され、今後の検討にまちたい。

SD4～6は、SD3と位置関係が異なるが、各々並行して検出されている。さほど時期差のないものと考えられるが、遺物が瓦以外極めて少量であり、その性格については不明である。

B地区出土遺物には、6世紀末～8世紀のものがあり、量的には8世紀代のものが多い。

(早川裕己)

グリッド番号	現況高	遺物包含層確認面	遺物包含層厚	遺構	遺物	グリッド番号	現況高	遺物包含層確認面	遺物包含層厚	遺構	遺物
	m	m	cm				m	m	cm		
1	9.78	9.63	45		弥生土器・石斧・土師器・須恵器・山茶碗	8	10.96	—	—		
2	10.18	10.08	20	溝・ピット	土師器・山茶碗	9	10.5	10.23	60	溝	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦
3	10.05	9.95	10	溝	土師器・山茶碗	10	10.46	10.06	90		ク
4	9.48	—	—		須恵器	11	10.55	10.30	35	溝	ク
5	10.33	—	—		土師器	12	10.52	10.27	38		ク
6	10.60	10.40	28	溝	土師器・石錘	13	10.59	10.29	30	竪穴住居・ピット	ク
7	11.23	11.08	65		弥生土器・土師器						

第3表 第一次調査概要

Ⅶ 一志郡嬉野町 じゃがめばし 蛇亀橋遺跡

1. 位置と環境

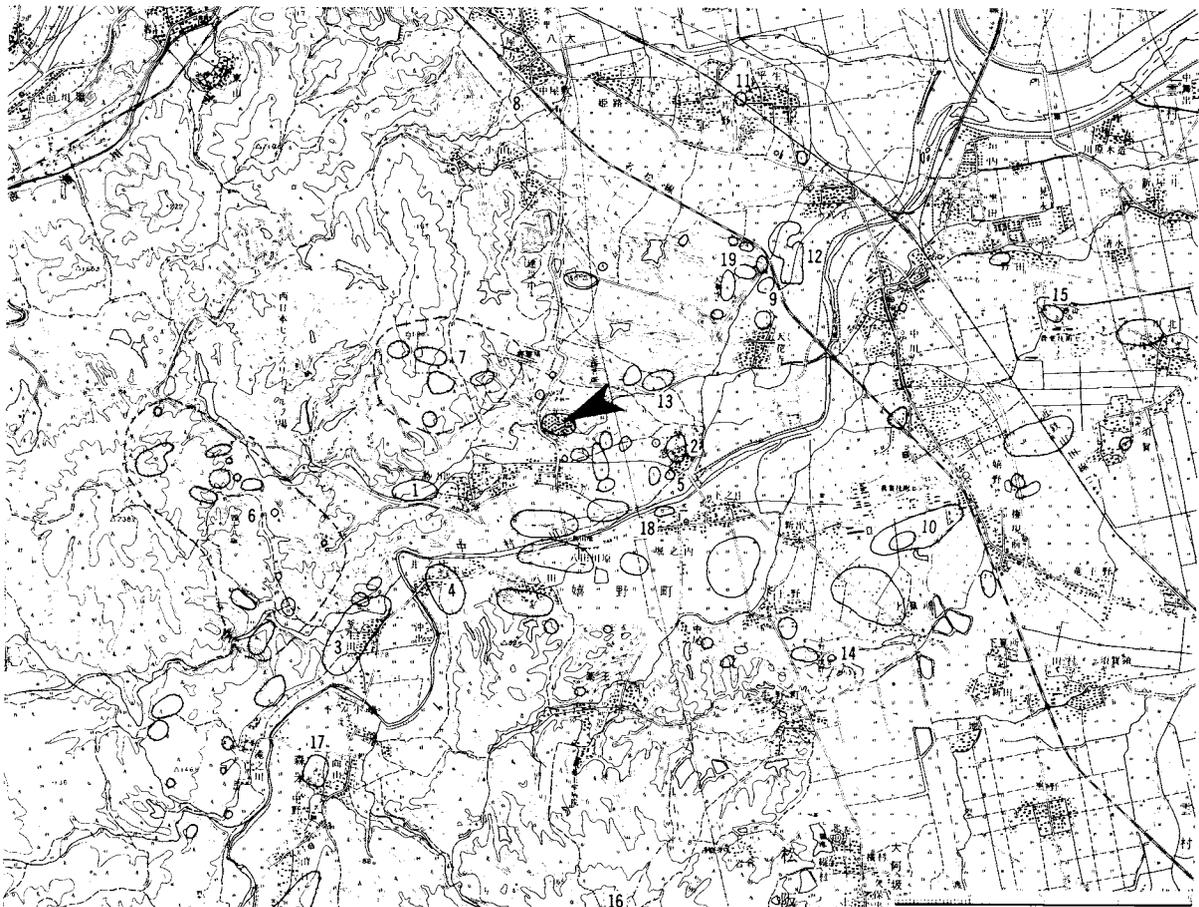
蛇亀橋遺跡（矢印）は行政区画上、一志郡嬉野町島田字焼野に所在する。当遺跡は地形立地的には東西にのびる低丘陵に挟まれた開析谷に位置するが、今回の調査区域（A、B地区）はともに周囲の水田より2～3m高い低台地状を呈し、A地区で標高23m前後、B地区で20m前後である。A、B両地区は独立分断された形を呈しているが、これは河川による自然地形の変化と考えられ、元々は、A、Bが連続した西から東へ傾斜する舌状的な台地（低丘陵）としてあったものと推定できる。

一方、当遺跡の南に隣接する島田の集落とその一帯は、中村川左岸の河岸段丘最上位面に立地し、そ

の周辺の畑地が広がる一帯は遺跡の密集地帯としても知られている。

中村川は標高723mの矢頭山と、松阪市と一志郡の境に位置する標高757mの堀坂山の両山に挟まれた谷をその源とし、兩岸に河岸段丘を形成、近鉄中川駅北東で本流雲出川と合流し、広大な沖積平野を抜けて伊勢湾に注いでいる。この中村川の形成する河岸段丘上、及び、中流から下流にかけてひろがる沖積平野からは数多くの遺跡の存在が確認されている。

主な遺跡を時代順に概観すると、縄文時代としては島田遺跡（1）、薬師寺北裏遺跡（2）等がみられ



第34図 遺跡位置図（1：50000）

るが、先土器時代の遺跡は発見されていない。弥生～古墳時代の遺跡は多く、広大な面積を占める釜生田遺跡（3）をはじめ、閉垣外遺跡（4）、郡一遺跡（5）等、中村川全流域にわたって点在している。群集化する段階の後期古墳は左岸の丘陵上に偏在する傾向をもち、釜生田古墳群（6）、射撃場西古墳群（7）が広域に各ブロックを形成している。

飛鳥・奈良時代になると、白鳳・天平期に比定しうる寺跡（班光寺跡（8）・天華寺跡（9）・嬉野廃寺（10）等）の存在と、畿内の要素の濃厚な良質土師器の出土で知られる平生遺跡（11）、鳥居本遺跡、堀田遺跡（12）等に見られるように特に大和地方との結び付きが強くなることが窺える。このことは、古墳時代前期にすでにその文化的要素の萌芽をみる

ことができ、4世紀後半の築造で、三角縁神獸鏡の出土等、内容的にも県下の他地域より際立つ3基の前方後方墳（筒野（13）・向山（14）・西山古墳（15））が一志郡内に集中して形成されている点にも結びつくものと言えよう。

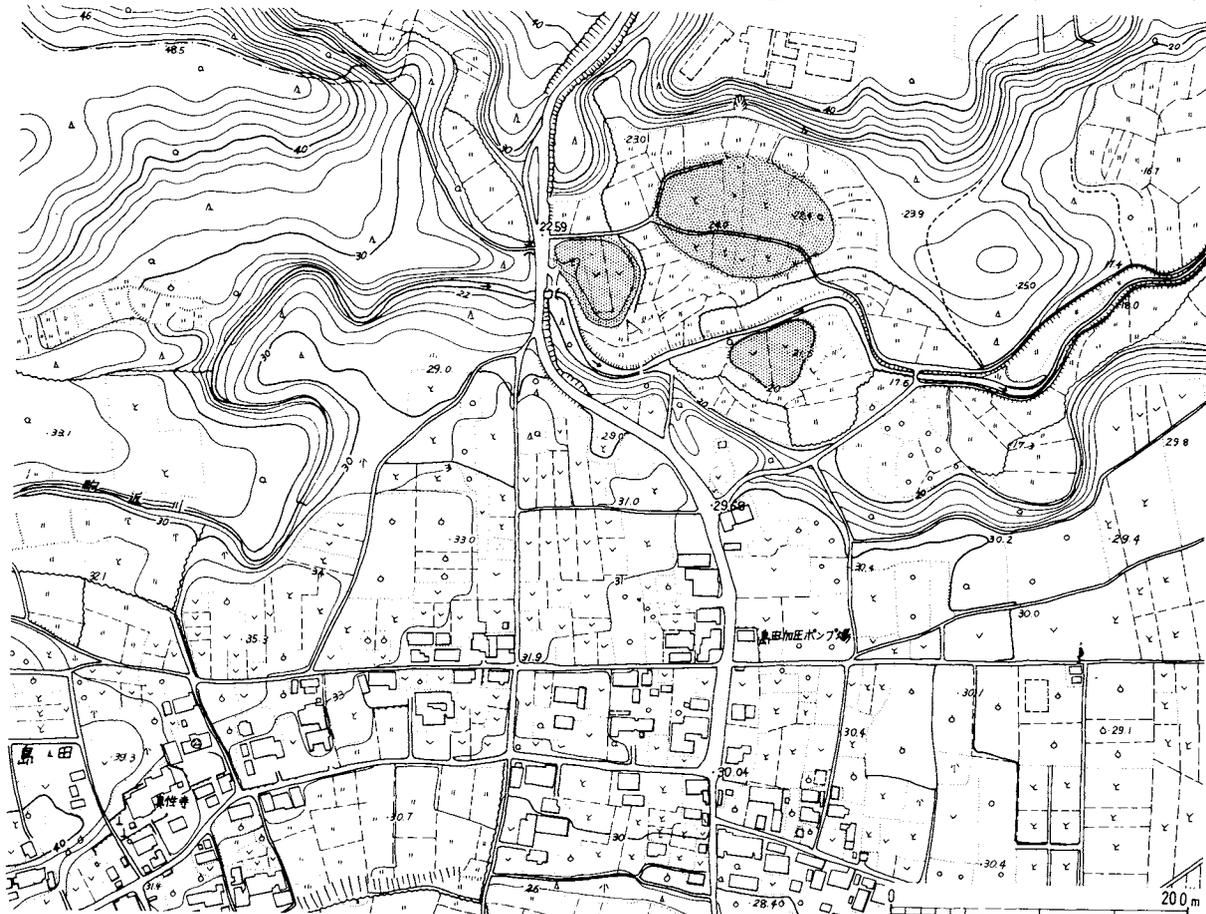
中世に至って南北朝時代以降、この地域は伊勢国司家としての北畠氏の支配下にあったが、おそらくこの期にかかわる本城、各支城の跡も多く発見されており、白米城伝説で有名な阿坂城跡（16）をはじめ、森本城跡（17）、堀ノ内城跡（18）、天華寺城跡（19）等がよく知られている。

以上、大まかではあるが、中村川流域とその周辺の遺跡についての概観と若干の地域性を触れるにとどめておきたい。

2. 遺 構

土層の基本的層序は、第Ⅰ層：茶褐色土（耕作土を兼ねる）、第Ⅱ層：黒色土（いわゆる黒ボク）、第Ⅲ層：砂礫混りの褐黄土（地山）で、A地区では西か

ら東に向って、B地区では東から西に向って地山はさがる。A地区では特に地山の凹凸が大きく、したがって第Ⅱ層は低い部分のみに堆積しており、高い



第35図 遺跡地形図（1：5000）

箇所ではⅡ層の堆積がみられない。第Ⅱ層の黒ボクは無遺物層であるが、発掘区北壁に近い最もⅡ層の堆積の厚い箇所の最下面(地山直上)で縄文時代中期初頭の土器を確認し、層的にこの層が、縄文時代中期初頭直後から晩期中葉頃までの間に堆積した自然堆積層と判断するに至った。遺物包含層は不明確で晩期の土器は第Ⅰ層下面に多くみられた。

遺構はA、B両区ともに第Ⅲ層上面で確認できた。これらは出土土器から縄文時代晩期後半～末に比定される遺構で、A地区では2棟の竪穴住居と、B地区では4基の甕棺墓を検出した。以下、個々に概述してゆきたい。

1. A地区の遺構

SB1

平面形が南北に長い楕円状を呈する竪穴住居と考えられ、南北方向約10m、東西方向約8.2mの規模である。柱穴の並びは内壁に沿った内周型と考えられ、約2～2.5m間隔で7個確認した。焼土や炉などの痕跡はみられなかったが、西へ約13m離れて検出されたSK3(1.4～1.5mの穴)では埋土中に焼土が充満しており、あるいは屋外炉という可能性

もあろう。竪穴埋土は単一層(黒茶褐色土)より成るが、炭が非常に多い。埋土中には縄文土器片を少量含むが、特にP-1には甕の口縁部片(21)が出土した。

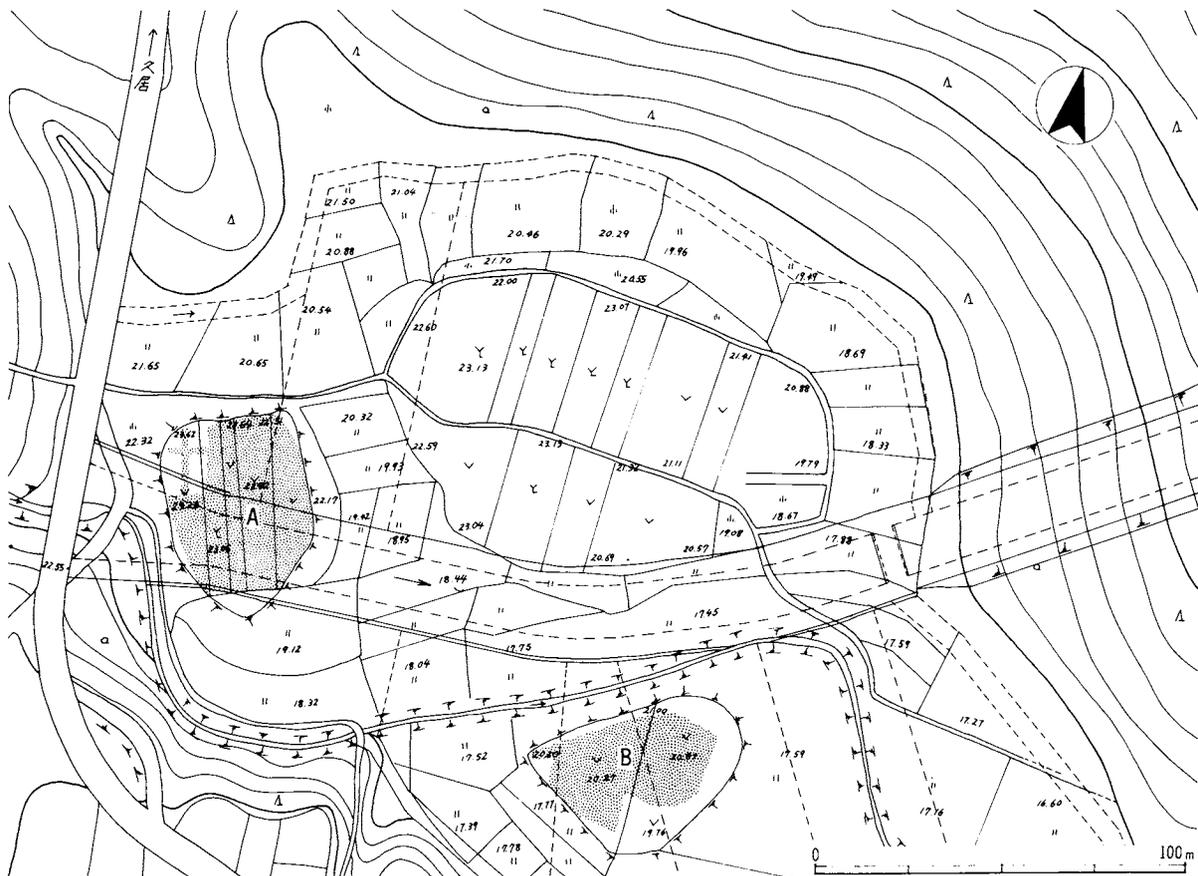
SB2

や、いびつな隅丸方形プランの竪穴住居と考えられ、一辺約4.6m前後である。柱穴の並びはSB1同様に内周型と思われるが、不明である。埋土中からは極少量であるが、SB1と同時期の縄文土器片が検出されている。

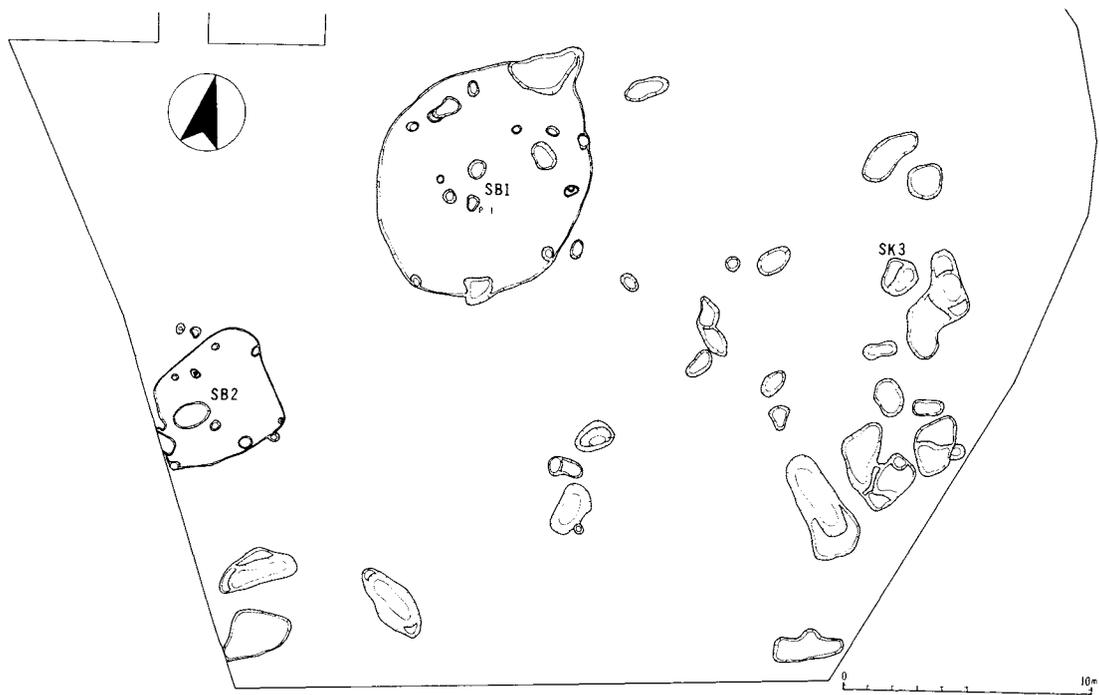
2. B地区の遺構

A地区のSB1の検出地点より約120m東に位置するこの地区では4基の合口甕棺墓(SX1～4)を検出した。SX2の甕の一方は口縁部と体部の小片を残すのみで残りが非常に悪い。SX1、SX4では完形の甕2個体を使用していると考えられるが、SX3の南側の甕は破損した甕を利用して鉢型に固定されていた。

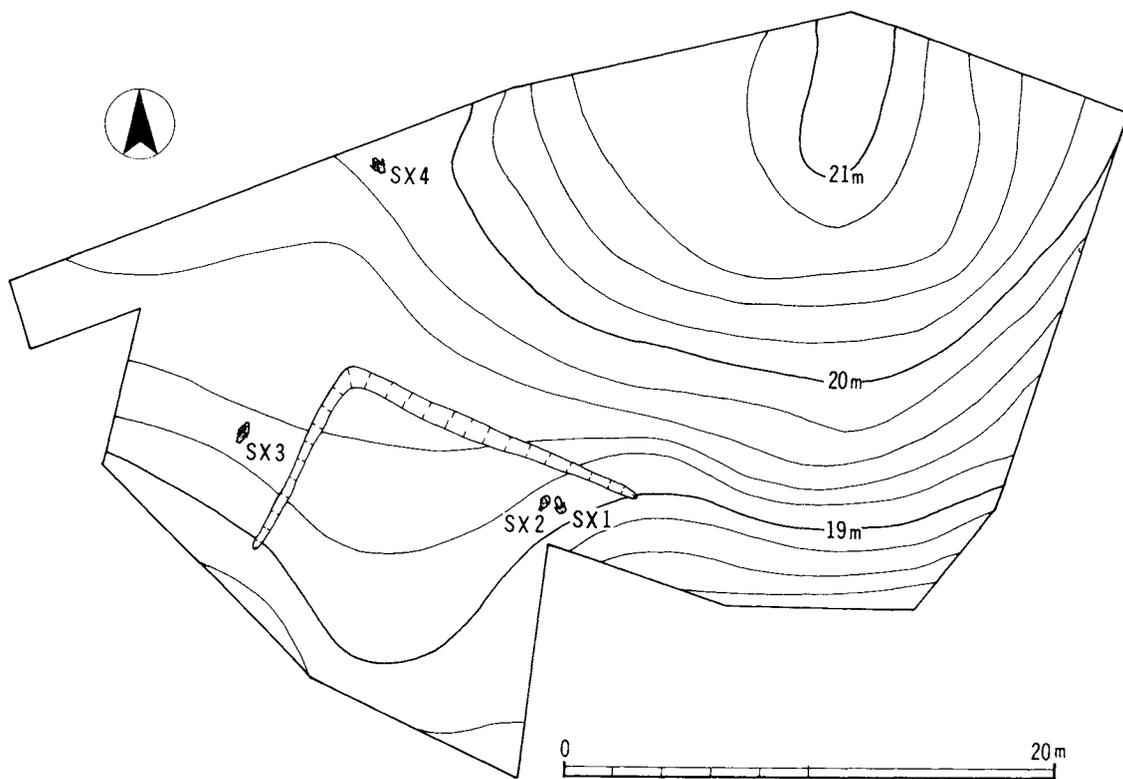
甕をすえるにあたっての掘形は4基ともに同色同質の土での埋土のためか不明であった。また、甕棺内には、酸性の強い土壌であったため、骨片等は検出できなかった。



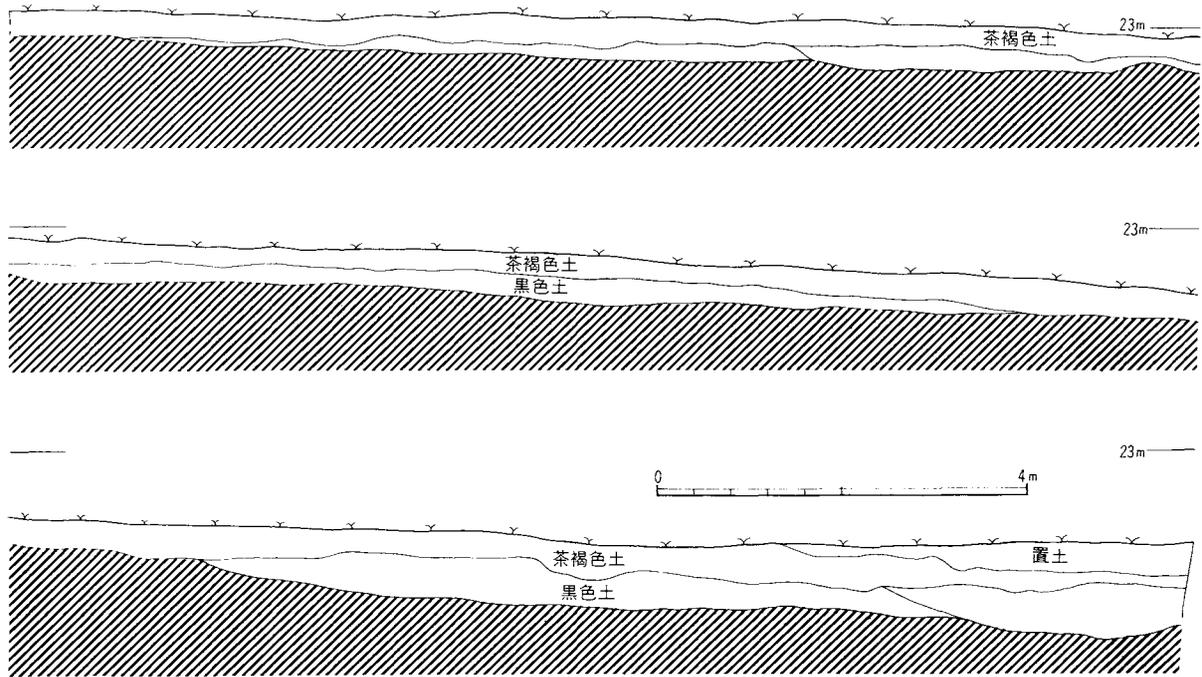
第36図 発掘調査区域図(1:2000)



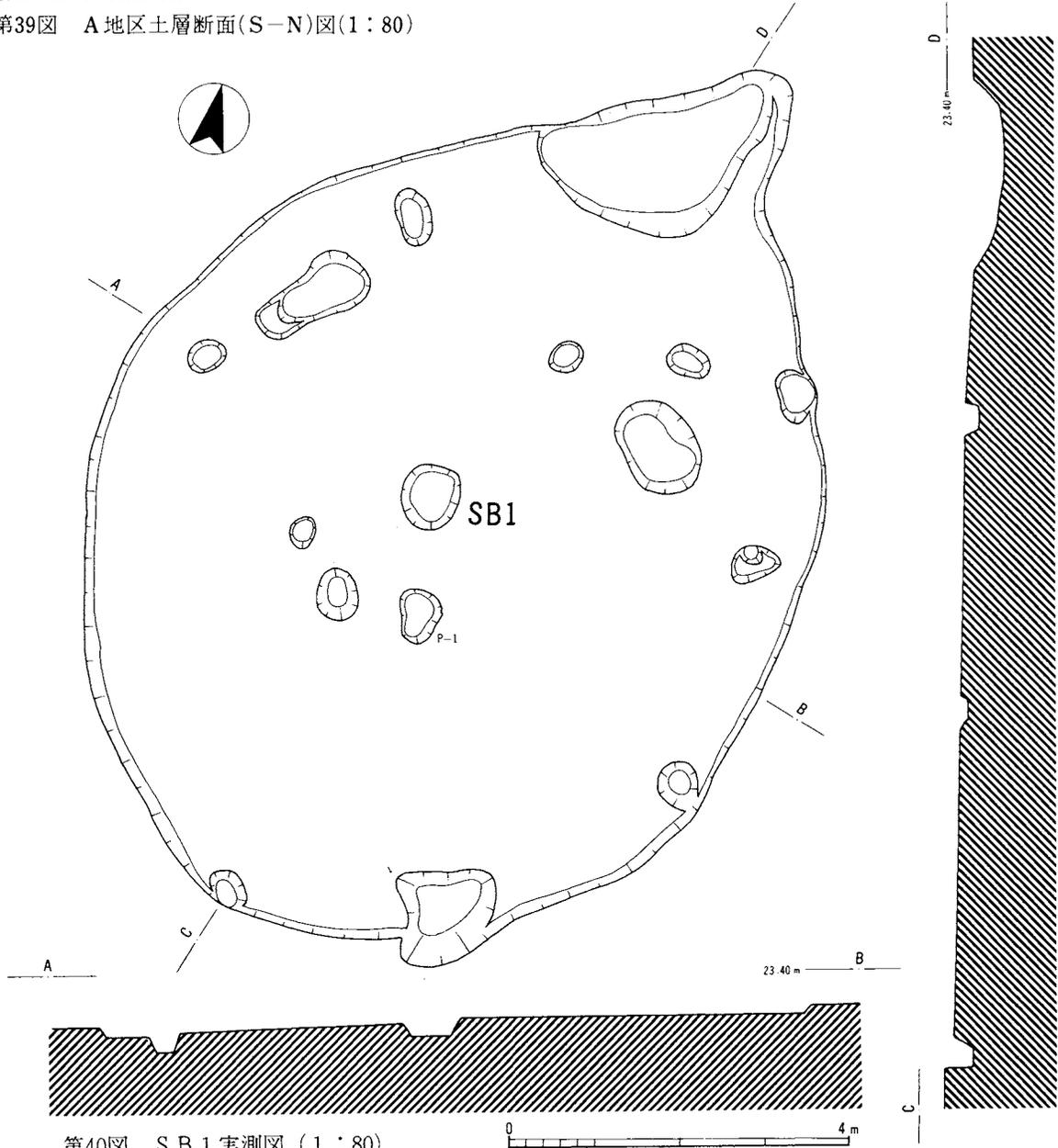
第37図 A地区遺構平面図 (1 : 300)



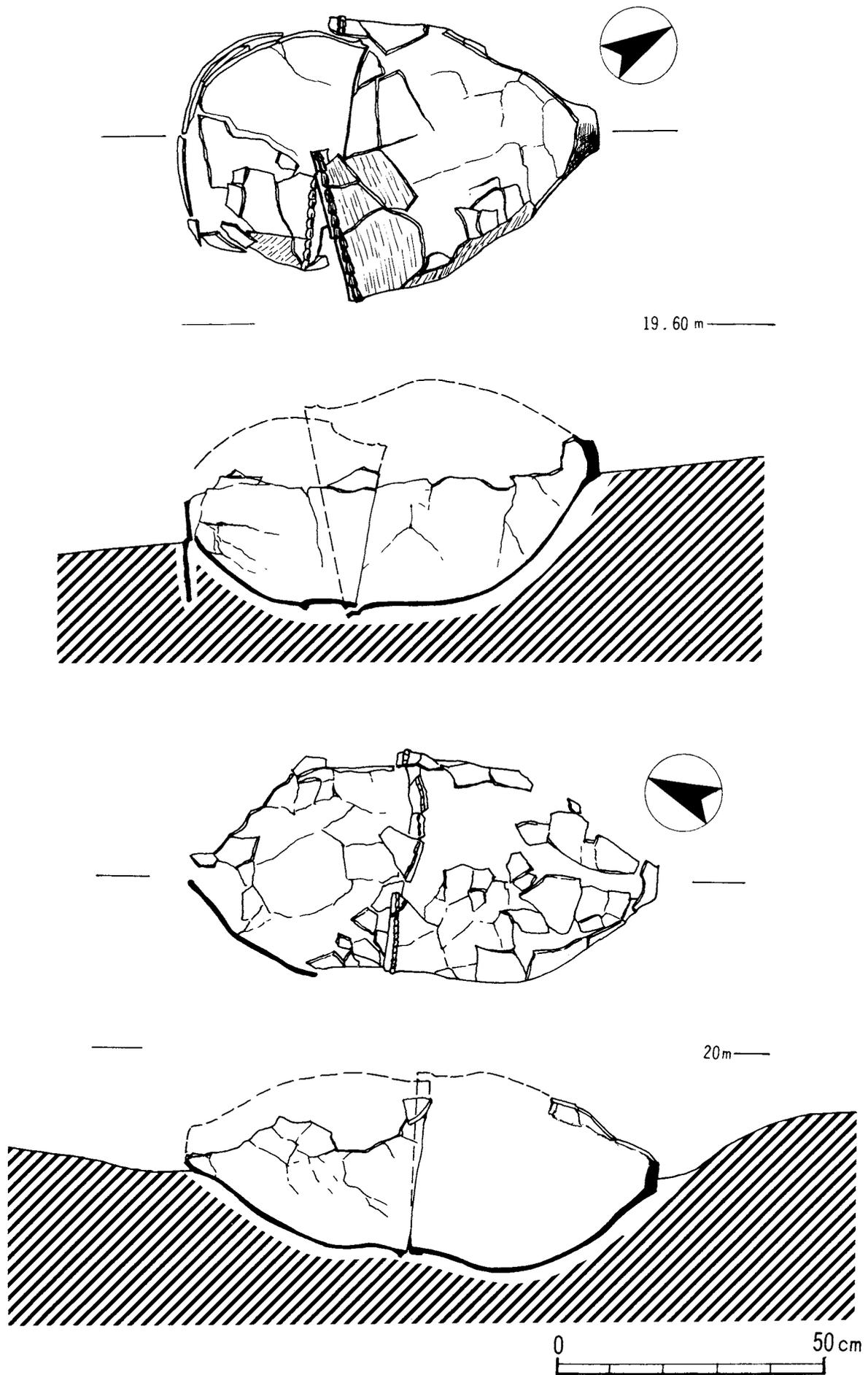
第38図 B地区遺構平面図 (SX1~4 合口甕棺) (1 : 300)



第39图 A地区土层断面(S-N)图(1:80)



第40图 SB1实测图(1:80)



第41図 SX 3(上)・SX 4(下)実測図(1:10)

3. 出土遺物

出土遺物のほとんどは縄文土器と少量の石器であるが、他に耕作土中からの古墳時代後期の土師器（椀）、須恵器片等がある。縄文土器は大別して中期のものと同期のものに分けられ、中期以前と、後期、そして、晩期前半の土器は見られない。ここでは、その一部である縄文土器、石器についてのみ少量ではあるが紹介しておきたい。

1. 縄文時代中期の土器

中期初頭に位置付けられる土器には関東系のものと瀬戸内系のものがみられる。橋状突起をもち、その下から半截竹管による平行線を縦にひき文様区画する(1)は五領ヶ台式にみられ、(2)(3)のように曲線的に発達した隆起文を構成し、それに沿うように竹管による連続刺突文を施す手法は船元I式にみられる。船元式の特徴の一つでもある口縁部内面の縄文も帯状に残っている。

中期前半では勝坂I式併行期にあたる(4)・(5)の土器がみられる。波状口縁の波形部分に沿って竹管による連続刺突文の多用が特徴的である。口縁内面にも縄文地文がのこっている。色調は黄褐色を呈し、砂粒含有度が高い。

(4)は(2)(3)にくらべ色調も異なり、胎土も良好で堅く焼きあげており、搬入品であろう。

2. 縄文時代晩期後半～末の土器

そのほとんどは東海系に属する土器であるが、(6)のように1点、明確に搬入品とわかるものがある。口縁部外面に一定幅の縄文をのこし、その下を浅い沈線と隆線で区画化してゆく手法は関東地方（特に千葉地方）の前浦式にみられるものであり、晩期終末に位置づけられる。色調は褐茶色で、胎土も良く、堅く焼きあげられている。

A. 甕形土器a類 (7・10・11・13・22)

口縁部は直立、あるいはやや外反し、素文突帯をつけるタイプで、いずれも断面三角形の突帯が一条走る。突帯以下の外面は、(11)が縦方向の削痕が残る。他は横方向の条痕がのこっている。(7)はSB1出土で外面に煤が厚く付着している。(10・22)はSX4(

甕棺)出土で、他は包含層出土である。

B. 甕形土器b類 [b-1類 (12・18・24)・b-2類 (25)・b-3類 (20・21・23)]

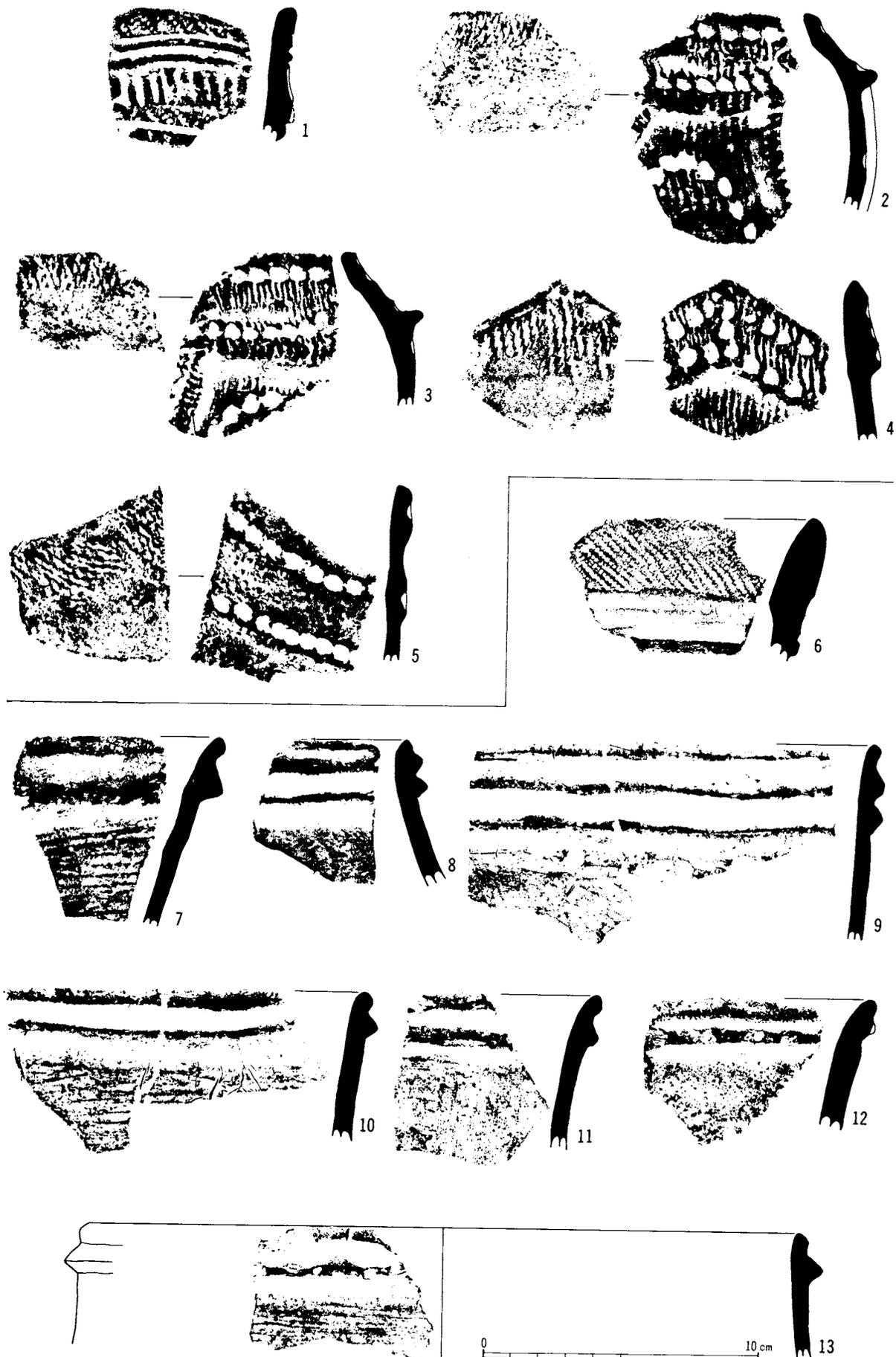
口縁部はほぼ直立し、貝殻によって押圧、押しきした有文突帯を1条つけるタイプで、細分すれば、比較的幅がせまく低い突帯をもつもの(b-1類)、やや幅も広くなる(b-2類)、そして、幅も高さも一段と高くなり、貝による押しき文が明確にのこる(b-3類)に分けられる。(12)は中でも細く繊細な突帯で、(18・24)はほぼ同じ形態の突帯で(12)に比べ、幅広で押しき기가やや明瞭化する。(12)はSX3、(18)はSX2、(24)はSX2出土の甕である。(25)ではさらに突帯の幅が広くなり、押しきの単位も長くなっている。また、口縁部内面に断状の沈線が走るのも特徴的である。(25)の突帯下には横方向の細い貝殻条痕が残る。SX1の甕である(20・21・23)は、より発達した幅広い押しきによる突帯と圧痕がみられるが、中でも(20)は、水平方向とは異なり斜め方向からの一単位が長い扇状の押しきがみられる。これらはいずれも突帯下に横方向の貝殻条痕が明瞭にのこっている。(21)の胴上部には沈線が一条走り、ここを境に屈曲し底部に至るものと考えられる。いずれも胎土中には金雲母片、砂粒を多く含むが、非常に堅く焼かれている。(21)はSB1(P-1)出土、(20・23)は包含層出土である。

C. 甕形土器C類 (9)

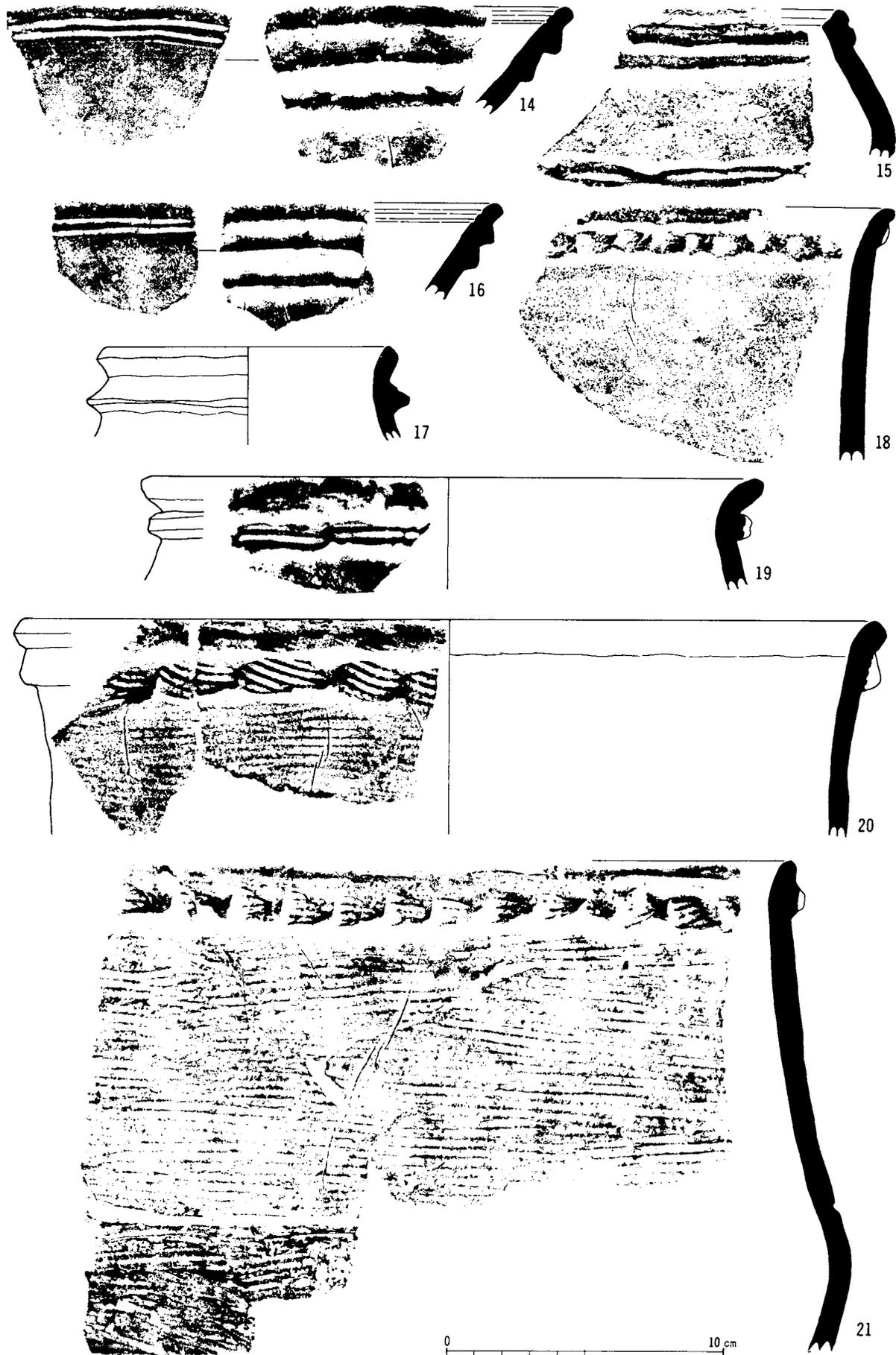
口縁部はわずかに外反して立ち、断面三角形の2条の貼付突帯をもつタイプで、白っぽい黄褐色を呈し、胎土は大粒の砂粒と金雲母片を多く含むものである。鳥羽市答志町大築海貝塚で同類例が、また、津市納所遺跡でも類似したものがみられる。包含層出土。

D. 壺形土器a類 (8・17)

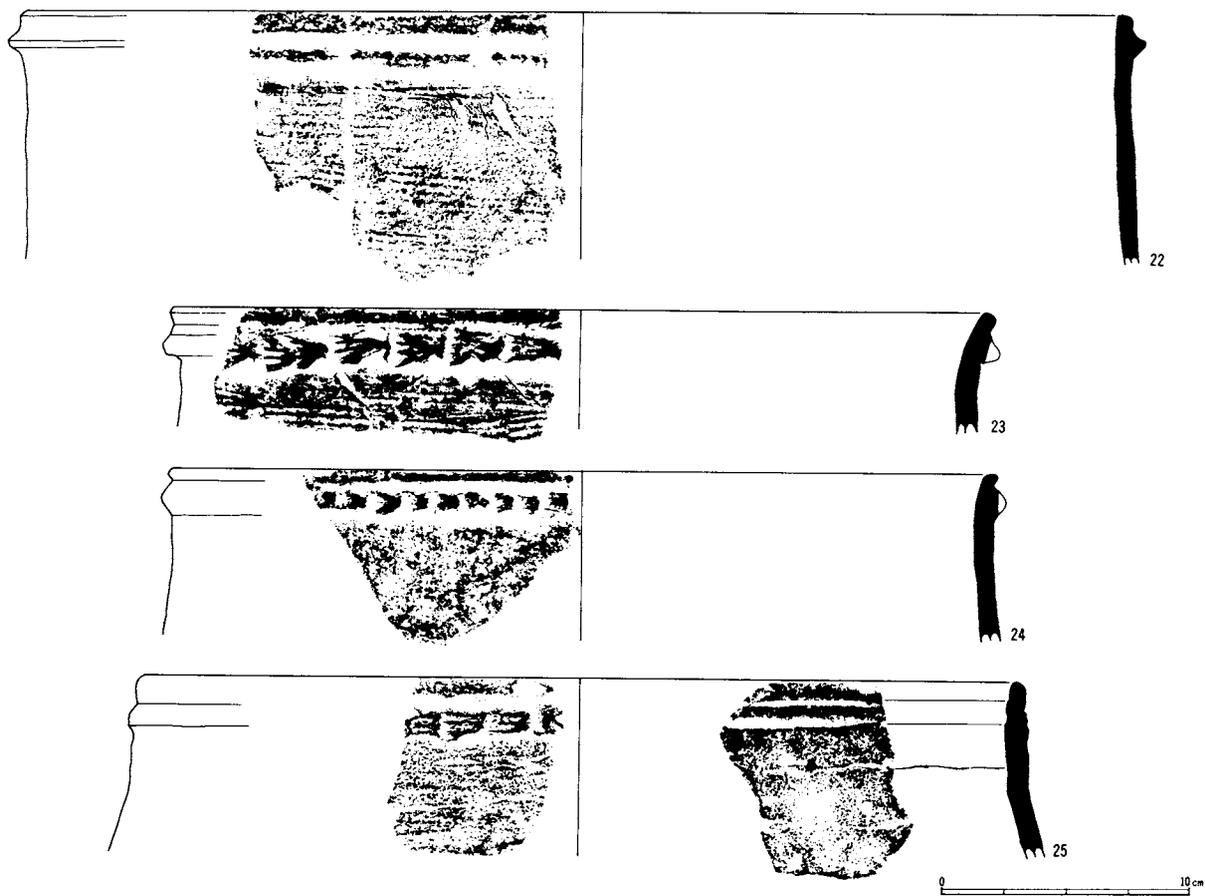
やや赤味を帯びた褐色を呈し、口縁部に一条ないし二条の素文突帯を貼り付けたタイプである。いずれも、砂粒を多く含む胎土である。突帯そのものは、ひずみも多く、雑なつくりである。いずれも包含層出土。



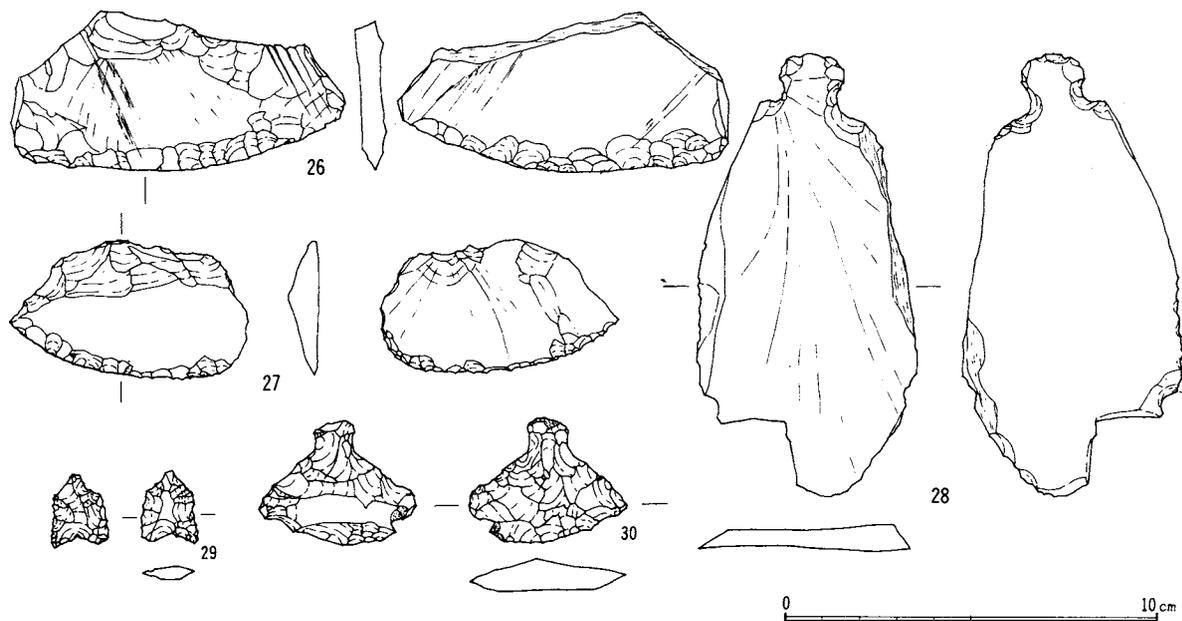
第42図 縄文土器 拓影 (1 : 2)



第43図 繩文土器 拓影 (1 : 2)



第44図 縄文土器 拓影 (1 : 3)



第45図 石器実測図 (1 : 2 29・30は実寸)

E. 壺形土器 b 類 (19)

くの字形に外反する口縁部をもち端部は丸くおさまる。口縁直下に、貝殻による長い押し突帯がみられる。くすんだ淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。包含層出土。

F. 鉢形土器 a 類 (14・16)

器形は不明であるが、かなり大きな口径を呈する鉢状の土器と考えられ、口縁部には断面山形の突帯が二条走る。また、口縁部内面には 2 本単位を原体とする工具による沈線がめぐっている。内外面とも研磨の跡がのこり胎土も良好で丁寧なつくりで、精製土器の部類に入るものと考えられる。包含層出土。

G. 鉢形土器 b 類 (15)

内弯して立つ口縁部は端部で外側に折り返され、幅のせまい縁帯をつくり、外面には一条の沈線が走る。また、体部の屈曲部には工字状の浮線網状文がみられる。研磨の痕跡はみられるものやや不徹底な半精製土器である。色調は白っぽい肌色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。包含層出土。

3. 縄文時代晩期の石器 (26~30)

(26・27)はスクレイパー、(28・30)は石匙であるが、(28)は縦長(長さ11.8cm)で大形である。28は製作途中段階のものか、使用痕は不明瞭である。(29)は凹基式の五角形鏃である。すべてサヌカイト製。

4. 小 結

蛇亀橋遺跡では楕円形プラン、隅丸方形プランの大小 2 種の竪穴住居と、住居から東へ約 80m 離れた発掘区で 4 基の合口甕棺墓を検出した。竪穴住居の晩期検出例は県下初例であり、今後の資料の増加を待つプラン、構造等、検討しなければならぬ点が多い。住居の時期であるが、住居内の P 1 上面から幅広の押圧と押しきによる突帯文をもつ典型的な馬見塚式の甕片が集中して出土している点等から、晩期でも後半~末頃に比定されよう。

次に、合口甕棺墓の時期であるが、使用している甕の種類としては先に分類した甕 a 類 (22・S X 4 使用)、b-1 類 (18・24・S X 2 使用)、b-2 類 (25・S X 1 使用)、b-3 類 (図示していないが S X 3 に使用) のすべてが使用されている。b-3 類の甕を典型的な馬見塚式の甕とすれば、少なくとも合口甕棺 (S X 3) は一応、竪穴住居と同時期の所産と考えることができる。土器編年上の細分ともかわるが、b-3 類に比べ b-1、b-2、また、a 類が時期的に差をもつものなのか否かがここで問題となる。しかし、当遺跡の S X 3 では 2 個体分の甕の中で、b-1 類と b-3 類の両者を使用している。また、S B 1 では竪穴埋土中と Pit 埋土中という出

土状況の差はあるが、前者では b-3 類に入る (21) が、後者では a 類に入る (7) が出土している。こうした点から、ここでは甕 a 類と b 類の差は型式差でなく形態差として捉え、一応、すべて馬見塚式の範疇としておきたい。

当遺跡では集落の中で、住居 (A 地区) と墓地 (B 地区) が完全に分離した形で検出されたわけだが、1 章で若干触れたように、A、B 両地区が当時、連続した地形であったのか否かも問題となってくるが、晩期後半にあつては墓地が住居から完全に隔絶された場所に築かれたことを示す良い例である。

最後に、当遺跡では、1 点も遠賀川系の土器が出土していない点に触れておきたい。津市納所遺跡では、やや厳密な意味で一括資料として扱い難いが自然流水路の最下層 (青灰色粘土層) から弥生前期古・中段階の土器に馬見塚式土器が共存して出土している。また、尾張の西志賀、貝殻山貝塚の最下層では弥生前期中段階の土器 (貝殻山 I 式) に馬見塚式より一型式新しく晩期最終末とされる檜王式が伴って出土しており、前浦遺跡でも檜王式土器に伴って弥生前期中段階の壺が出土している。

したがって土器型式の編年上から言えば、すでに

当遺跡（馬見塚式土器を有する）の縄文人は遠賀川系土器（水稲耕作文化）を持つ弥生人と同時に存在したことになる。この点は同じ三重県下にあつて、低湿地に立地する納所遺跡等、水稲耕作を早く取り得たという意味での先進地と、やゝ山間部に立地する当遺跡における後進性という地形立地面な差としてとらえておきたい。

他に、遺物を詳細にみていくと、これまであまり類例をみない（9）のような2条の貼り付け突帯を

もつ粗製の甕の系列をどこにおくのか、また、一応、馬見塚式の範疇としたが、当遺跡にみられる甕の凸帯の形態差をどう考えるか、そして、(14~16)にみられる半精製土器（特に(15)では体部屈曲部には大洞A式にみられる浮線網状文が施されている）の位置付け等、これから残された研究の課題は多いが、ここではとりあえず、大まかな遺物紹介にとどめておきたい。

（新田 洋）

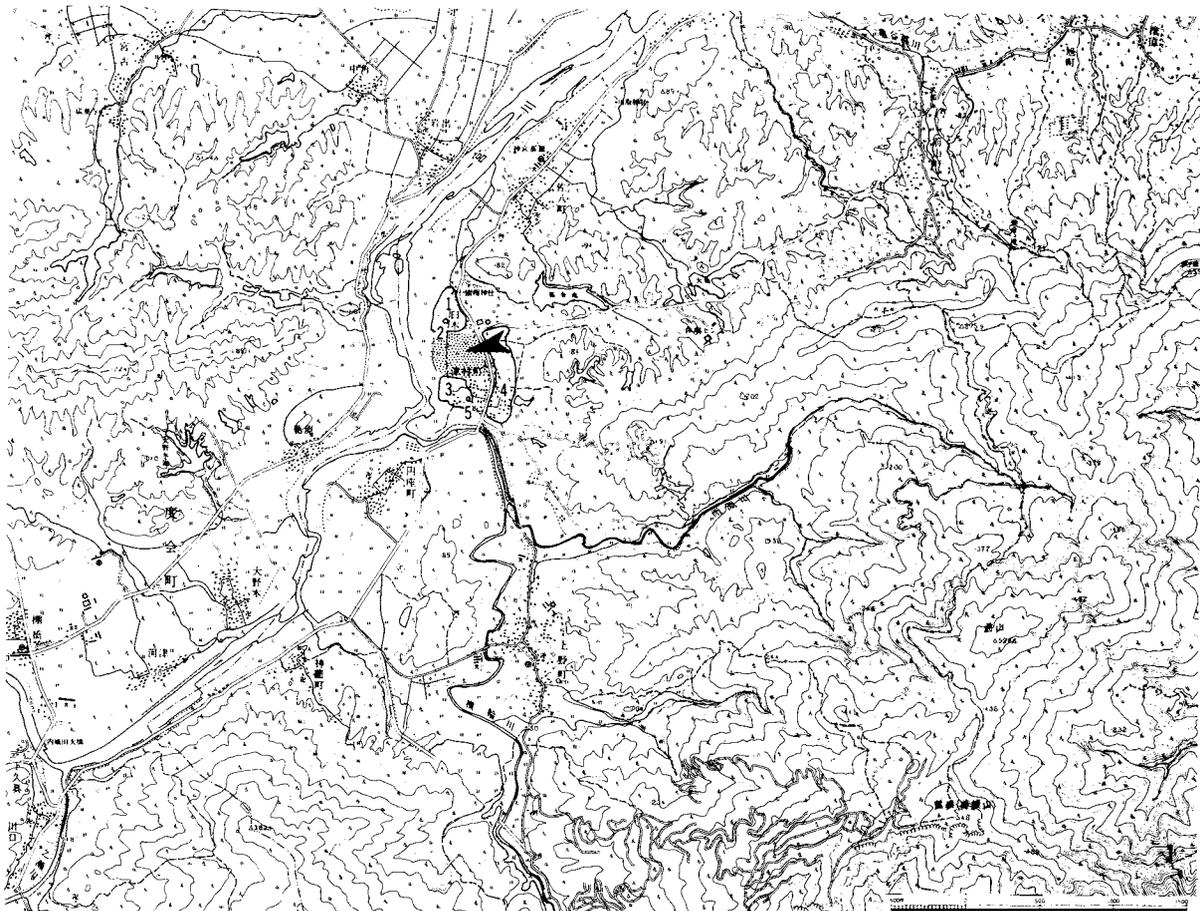
Ⅷ 伊勢市津村町 なかしんでん 中新田遺跡

1. 位置と環境

中新田遺跡（矢印）は現行政区画上、伊勢市津村町白木字中新田に所在する。伊勢市街地より県道伊勢南島線を宮川に沿って約4km南下すると、東側に南北に延びる山々、西側には流路に左右された細長く南北に走る水田と畑地がひらける。この畑地は県下でも有数のタバコ栽培畑として知られている。地形立地としては宮川右岸の河岸段丘の中位面にあたり、標高約18～20mである。

さて、この周辺に所在する遺跡詳細については、昭和55年度に国庫補助金を得て伊勢市教育委員会によって実施された伊勢市遺跡詳細分布調査の結果報告で明確にされており、また、その成果は『三重県伊勢市遺跡分布調査』（昭和56年3月）として刊行

されている。当遺跡に隣接する元新田遺跡（1）からは古墳時代以降から中世に至る土師器、須恵器等の他、縄文土器、石鏃、弥生土器、さらには約1～2万年前と考えられるナイフ形石器、ブレード、スクレーパー等も採集されており、伊勢市内では唯一明確な先土器時代遺跡としてその重要度は高い。また元新田遺跡の範囲内として包括され得るが、元新田古墳（2）の在存も指摘されている。現在は盛土もみられず平坦な茶畑としてあるが、今回の調査前の分布調査で、少量ではあるが円筒埴輪片も採集され、付近に古墳が存在したことが推定される。中世を中心とする集落跡としては、当遺跡を含め、南に隣接する西垣外遺跡（3）、また、県道を隔てて



第46図 遺跡位置図（1：50,000）

戸・土壇等があり、すべて時期的には鎌倉時代後半から室町時代初頭（13～14世紀）に位置付けられるものである。以下、地区別に個々の遺構を概述してゆきたい。

1. A地区の遺構（第48図）

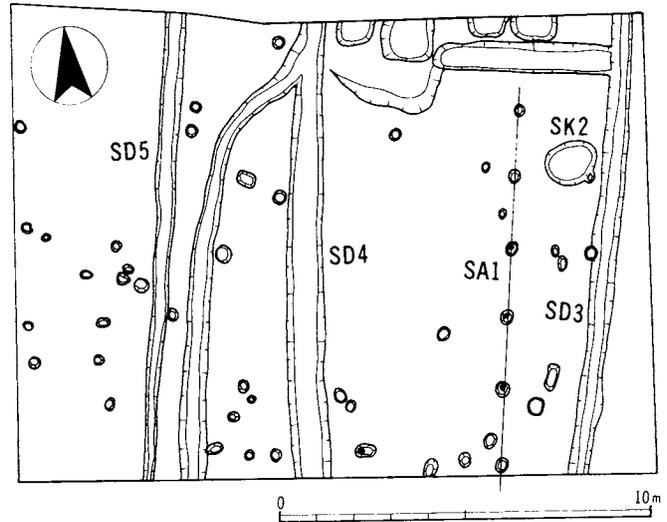
SA1

南北方向（N10°E）に6尺等間に並ぶ6個の柱列である。径30～40cm、深さ30cm内外で柱通りもほぼ一直線に並ぶ。柱穴のうちの2個は底に根石がみられる。

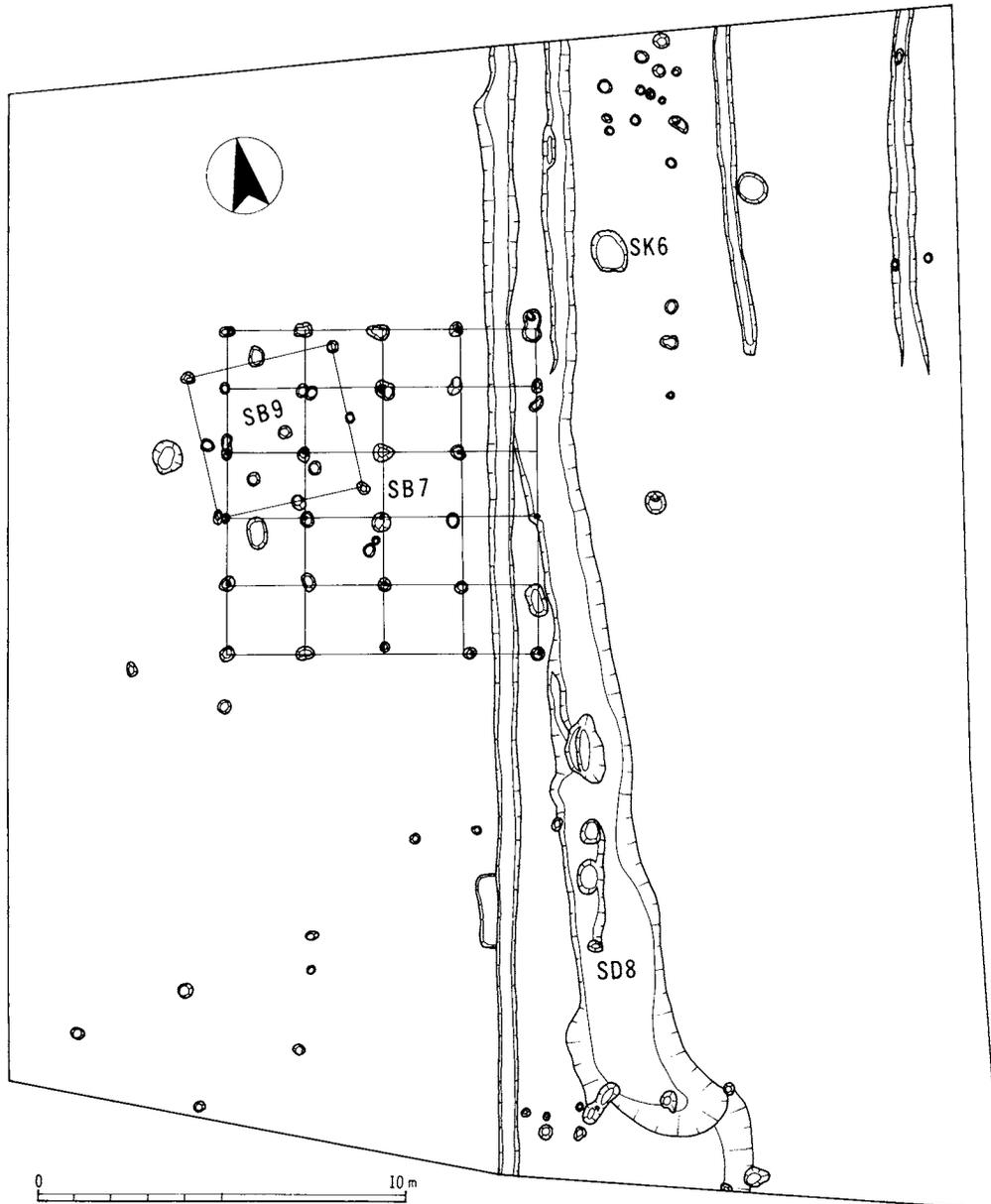
B. 溝

SD3

幅60cm余、深さ20～30cmで底が凹凸をもつ溝で、北に向って緩かに下がる。少量の山茶碗片を含むの



第48図 A地区遺構平面図（1：200）



第49図 B地区遺構平面図（1：200）

みである。SA1の方向にほぼ並行する。

SD4

発掘区の北端より二股に分れるが、西側の溝はB区のSD8と連続するものである。SD4はB区で約9m南へ延びて途切れるが、この発掘区内では幅1m余、深さ40cm内外の底の平坦なしっかりした溝である。溝中央部の埋土内には山茶碗を中心とした土器を一括集中して廃棄した状態がみられた。

SD5

SD4に並行する幅30~60cmの溝で、B区全体にも南北に連続して延びている。深さはSD4に比べて一概に浅く15~20cm程度で遺物の出土も少ない。

C. 土坑

SK2

やや東西に長い円形1.2~1.3m、深さ40cmの底の平坦な土坑である。土師器小皿を中心に出土遺物がみられた。

2. B地区の遺構

A. 掘立柱建物

SB7

桁行4間(8.4m)×梁行5間(8.7m)で、北に廂が付く東西棟の総柱掘立柱建物と考えられ棟方向はN80°Wである。柱掘形は基本的には円形プランであるが、径25cm程度の小さい穴から径50cm内外までのものまでばらつきがある。柱穴底に扁平な川原石を根石にしているものが多い。柱間は桁方向で7尺(2.1m)等間であるが、梁方向では北端の1間分が5尺(1.5m)、残り4間分が6尺等間である。この建物の梁方向はA区のSA1にほぼ並行している。

SB9

桁行2間(4.0m)×梁行2間(4.0m)の正方形の掘立柱建物である。柱掘形は径30~60cmとばらつきをもつ。柱穴底には根石等はみられない。

B. 溝

SD8

A区のSD4、2本のうちの西の溝に連続するもので、発掘区中央から南に向かってしだいに幅広くなり途切れる。埋土中の遺物量は非常に少ない。

C. 土坑

SK6

径1~1.2m、やや南北に長く、深さ20cm前後の平坦な土坑である。埋土内に土師器小皿の他、刀片が出土している。出土遺物を副葬品と考えれば中世墓とも考えられる。

3. C地区の遺構

このC地区では大小の土坑、柱穴が検出されたが、建物等、遺構としてはまとまらない。SK20は1.8m×1.2mの楕円形プランの土坑で底部は凹凸が大きく、いくつかの柱穴の集合体かもしれない。SA21は南北にのびる堀と考えられ、柱間は6尺(1.8m)である。柱穴は20~30cmで円形を呈する。

4. D地区の遺構

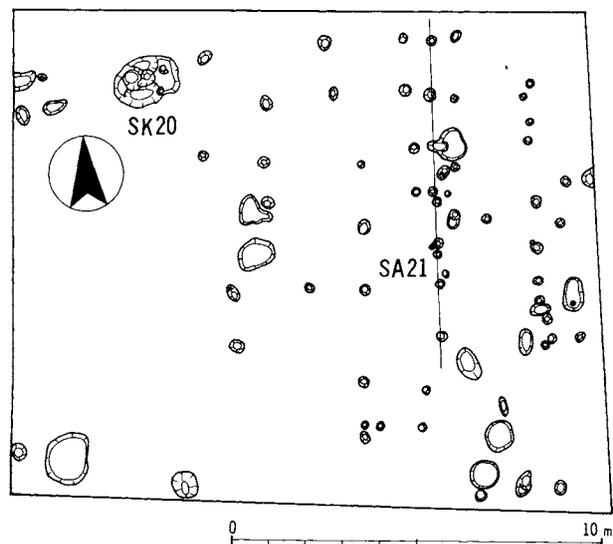
A. 掘立柱建物

SB10

梁行2間で、桁行は1間分のみ検出されたが、北へのびる南北棟の建物と考えられ、棟方向はN°Eである。桁の柱間は5尺(1.5m)、梁は7尺(2.1m)である。柱穴は30~40cmの円形で、底には丸い扁平な根石をもつ。

SB11

鉤形をした建物で、北側を東西棟と考えれば、桁行4間(3.6m)×梁行2間(3.6m)で西半の建物空間より南にさらに2間分(3.6m)の張り出しをもつ総柱の建物と復原されるが、その逆に、南北棟の建物から東へ2間分張り出したものとも考えられる。柱



第50図 C地区遺構平面図(1:200)

穴は径30～50cmの円形を呈し、そのほとんどは底に扁平な丸い川原石を根石としている。

SB12

桁行4間(7.2m)×梁行2間(3.6m)の南北棟の建物で南半の建物空間よりさらに東側に1間分(1.8m)の張り出しをもつ建物と考えられる。柱間は6尺等間である。柱穴は30～50cmの円形で、底に扁平な丸い川原石を根石としてすえている。SB11との新旧関係は柱穴の切り合いから、SB12が新しい。

SB15

桁行、梁行ともに1間分のみ検出された東西棟をもつ建物と考えられる。柱間は桁方向で7尺(2.1m)梁方向で8尺(2.4m)である。

SB18

桁行3間(5.6m)×梁行2間(4m)、南北棟の

建物で棟方向はN2°Eである。柱穴は径25～40cmの円形で深さ20～30cmで、柱間は1.8～2mの不等間である。

SB19

桁行4間(8.0m)×梁行3間(5.0m)、東西棟の建物で、棟方N88°Wである。柱間は桁方向で2m等間であるが、梁方向では北から1.8m、1.6m、1.6mとなる。柱掘形をもち、底に扁平な丸い石を根石としてすえているのもあれば、地上に露出して小礎石と考えてもよいものもあり、半掘立半礎石建物とも言えるだろう。

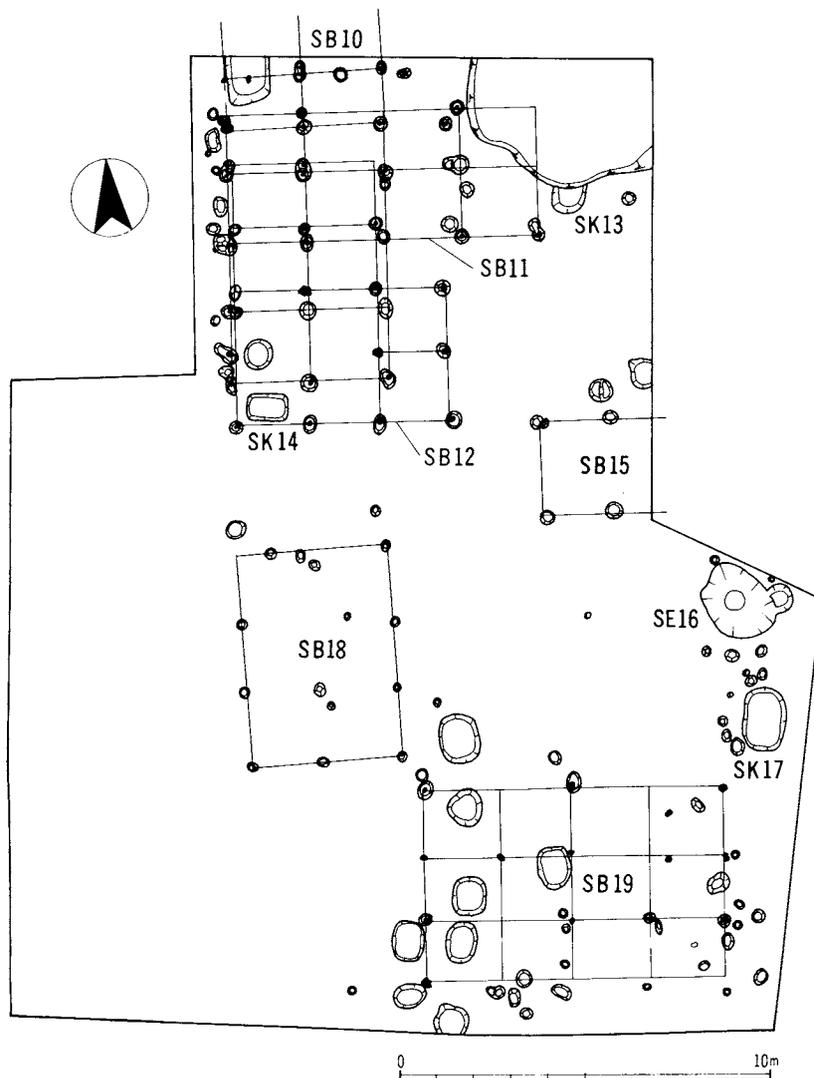
B. 井戸

SE16

南北約2.2m、東西約1.6mの楕円状を呈する素掘りの井戸で、深さ2.2mまで確認した。壁は掘形より大きく外へ膨らみ、掘形の中程より下で急傾斜して底に至る。埋土内の遺物は少なく若干の土師器(鍋・皿)片を出土した。

C. 土坑

現代のゴミ捨て穴に切られたSK13、隅丸長方プランを呈すSK14、SK17等があるが、SK14では青磁片と土師器小皿、SK17では土師器鍋1個体分を検出しており、そのプランからみても中世墓とも考えられる。



第51図 D地区平面図(1:200)

3. 遺物

出土遺物は一点の鉄製品（刀片）の他はすべて土器類である。種類としては土師器（鍋・皿）、山茶碗、山皿、陶器（常滑甕・鉢など）、磁器（青磁・染付碗）があるが、数量的に土師器が非常に多く、次いで山茶碗が占める。磁器、施釉陶器類は極めて少ない。時期的には中世（鎌倉時代後半～末）に属するものである。以下、ここでは、ある程度セットとして出土した主な遺構伴出の土器についてのみ概観しておきたい。

1. SK2出土の土器

土師器小皿A（1～3） 口径7～8cm内外で非常に薄手のつくりで、内面はナデ調整されるが、外面は全体が無調整で、ユビオサエによる凹凸、指頭圧痕がのこるタイプである。口縁端部は尖先となる。色調は白っぽく、淡黄褐色、乳褐色を呈し、胎土は精良である。

土師器小皿B（4・5） 小皿Aにくらべやや厚手で、外面の口縁端部に不徹底なヨコナデがみられるタイプで、以下の調整手法は小皿Aと同じである。色調、胎土もよく似ている。

土師器小皿C（6～8） 口径11～12cm内外で、口縁部は直立、あるいは、やや内弯気味の皿に、端部は尖先となるタイプの皿で、器壁は底部ほど薄手となっている。内面はナデ調整によって平滑に仕上げられているが、外面は全体が無調整で、指頭圧痕の他、やや凹凸が目立つ。色調、胎土は小皿B、Cと同一と考えられる。

土師器鍋A（16・17） 扁平球状の体部より強く外反する口縁部は端部で内側に折り返して凹んだ面をつくる。口縁内外面ともにヨコナデされている。両者とも外面に厚く煤が付着している。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。

土師器鍋B（18） くの字形に強く外反する口頸部をもち、口縁部は受口状となり、内側に狭い面をつくる。口縁部は内外面ともにヨコナデされるが、以下は外面では無調整、内面はヘラケズリされている。淡茶褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。

外面には煤が厚く付着している。体部はもう少し直立するかも知れない。

山茶碗（9・10・12～14） 9を除きいずれも退化した逆三角形の高台をもち、体部は直線状に立ち、内底部と体部との境が明瞭なタイプの子茶碗である。完形のもので口径14～15cm前後、高さ5～6cmである。また、高台には靱殻痕がよく残り、外底部は糸切り痕が明瞭なものである。くすんだ淡灰色を呈し、砂粒をやや多く含む。9は靱殻痕もみられず、つくりも丁寧で、他に比べ古い時期のものと思われる。

山皿（11） 口径8.8cm、高さ2cmの高台のない皿化したタイプで、底部は糸切り痕が明瞭にのこる。淡黄灰色を呈し、胎土には砂粒が多い。内面の一部に煤の付着がみられ、灯明皿として用いられたものかも知れない。

青磁碗（15） 口径16cm内外の青磁碗で、外面には蓮弁文様が肉彫りされている。色調は淡灰緑色を呈し、胎土は灰色で堅緻である。

2. SD4出土の土器

土師器小皿C（25） 口径10.6cm、高さ2.2cmで、口縁部は直立し、端部は尖先となる。内面はナデ調整、外面は無調整である。色調は淡茶褐色で、砂粒を少量含む。

土師器鍋A（19・20） 折り返し口縁部をもつ鍋の口頸部、口縁内側は強くヨコナデされ、凹んだ面をつくる。復元径25～26cmと考えられる。いずれも淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。外面に厚く煤の付着がみられる。

土師器鍋B（33） くの字形に外反する口縁部は外反し、端部はやや内弯気味に立ち上り、内側に面をつくる。内外面ともにヨコナデされている。

山茶碗（28～30） 逆台形の平べたい高台をもち、体部はわずかに内弯しながら立ち上り、28・30の口縁部は外反する。3点とも全体に丁寧なつくりで、高台に靱殻痕はみられず、底部の糸切り痕もナデ消されている。29の内面には釉がかかり淡黄緑灰色を呈すが、外面など他の色調はくすんだ灰色である。

胎土には砂粒を少量含む。

3. S K 13出土の土器

土師器小皿A (21~23) 21はやや深め、22は上げ底で形態的に違いはあるが、すべて、内面はナデ調整され、外面が無調整な皿で、ユビオサエによる凹凸、指頭圧痕をのこすものである。色調は全体に白く、乳褐色を基調とし、胎土は少量の砂粒を含む程度である。23は土師器小皿Cの小型化したものとも考えられる。

土師器小皿B (24) 内面はナデられ、外面の口縁端部のみヨコナデされており、形態・法量としては小皿Cと変わらない。

山茶碗 (31・32) 口径15cm前後、高さ5.8cm内外で退化した逆三角形の小さい高台から体部から口縁にかけて直線的にのび、口縁端部は外側にやや丸みをもつ面をつくる。高台には穀殻痕が多く残り、底部の糸切り痕も明瞭にのこる。32の口縁部内面に

は釉が付着している。色調はくすんだ黄灰色を呈し、砂粒を比較的多く含む。

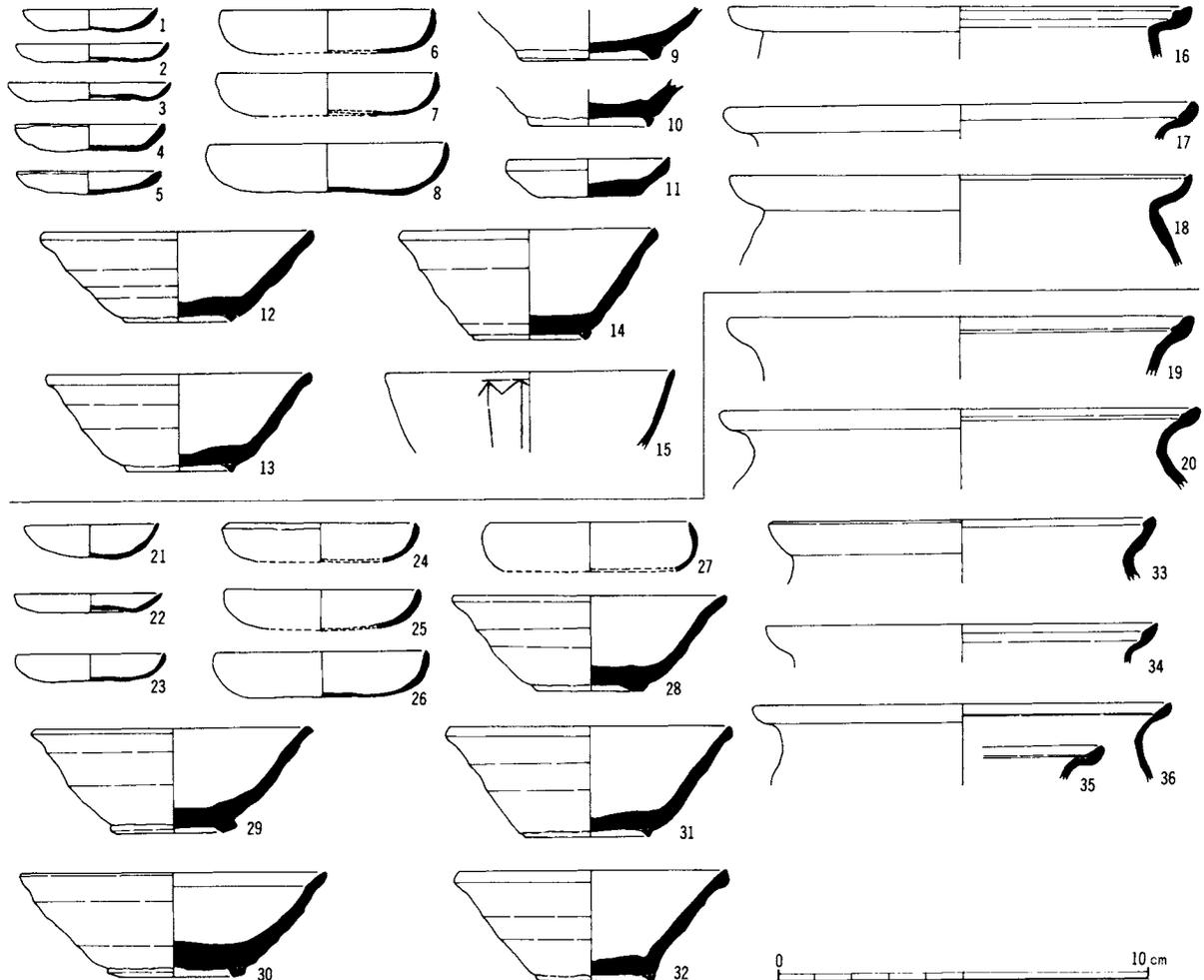
4. S K 17出土の土器

土師器小皿C (26) 口径11cm、高さ2.4cmで、薄手の小皿で、口縁部は直に立ち上り、端部は尖先となる。底部の器壁の厚みは、体部に比べ極めて薄くなっている。白褐色を呈し、砂粒を若干含む程度で胎土は精良な方である。

土師器鍋D (34) 復元径11.2cmで、折り返し口縁部をもつ鍋で、技法的には鍋Aに属するが、口縁端部の内側に2つの面をつくるもので、形態的には鍋Aと分離すべきものと思われる。口縁部は内外面ともにヨコナデされ、外面には煤が付着している。白っぽい淡褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

5. S K 20出土の土器

土師器小皿C (27) 口径10.8cm高さ2.6cmの薄



第52図 土器実測図 (1 : 4)

手の皿で、口縁部は内側に内弯しながら立ち上り、端部は尖先となる。内面は丁寧にナデられるが、外面は無調整で、ユビオサエによる凹凸、指頭圧痕が多くのある。白っぽい黄褐色を呈し、胎土は精良である。

4. 小 結

調査区は4地区にまたがるが、主な遺構としては掘立柱建物8棟をはじめ、D地区では素掘り井戸1基、A・C地区では塀と考えられる南北に走る柱穴の並びを検出した。時期的には出土遺物から、鎌倉時代中葉～後半に位置付けられるが、土器の型式差から、A・B地区はC・D地区よりやや時期的に古いものと考えられる。B地区のSB7は、総柱のかなり大規模な建物で主屋的な存在と考えられるが、周辺に副屋的な付属建物はみられない。この建物は北に1間分の廂のつく身舎部分4間×4間の建物構造を復原したが、四面廂を考えることもできよう。B地区の東約きは旧道下にあり、遺構面がすでに削平されたところが多く、A地区検出のSA1・SD4も、本来はB地区全体にのびていた可能性は考えられる。SA1の南北方向は、SB7の梁方向とほぼ一致し、建物を囲む、あるいは、他との区画(境)を示す塀であったかもしれない。SK6の径1.1～1.3mの円形土壇は、埋土中に焼土、炭が多くみられ、また、今回、図示していないが土師器小皿2枚の完形品と刀片が検出されており、中世墓と判断できる。

D地区ではSB11・SB12のように建て替え(SB12が新しい)が明確にみられる主屋的な建物とともにSB10、SB15、SB19等、それに付属、あるいは、関連建物と考えられる大小の建物を検出した。井戸SE16も建物に挟まれたところにみられ、集落の中での一戸分の居住(生活)空間を示すものと考えられる。SB11、12の建物の平面構造の復原は柱間、柱並びを考えた上で何度も試行を重ねたが、遺構の上からは方、あるいは長方形という基本的復原、

土師器鍋A(35・36) 35は細片で、36は口径22.4cmと復元される折り返し口縁をもつ鍋で、口縁部内外面はヨコナデされている。36の体部内面にはヘラケズリの痕がみられる。淡茶褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含んで粗い。

先入観をこえた鉤形の平面プランと考えざるを得なかった。今後、この時期の建物検出例をも考え合わせ、また、中世民家の例等を加え、再度、検討を要する問題と言えよう。

個別的なこととして、今回、検出された建物の柱穴にはほとんど掘形の底に扁平な丸い川原石を根石として据えていることが特徴的である。こうした建物は、すでにこれまで、阿児町殿畑遺跡、松阪市射原垣内遺跡、度会町寺垣外遺跡等、同時代の建物にみられるもので、礎石建物への過渡的建築技法としても捉えられようが、一概に石の置かれるレベルが不統一な点等、今後、建物を実際に建てる上での構造上の問題なども考え、総合的な検討をしてゆきたい。

出土遺物は土師器(鍋・小皿)、いわゆる日常雑器(煮沸・供膳)の類が量的に多く、それに比して舶来の青磁、あるいは、瀬戸、美濃系の施釉陶器が少ない。こうした出土状況は、この集落の性格を考える上の一つの指標となろう。

以上、簡単にここでは気の付いた点等に触れてきたが、伊勢南部における初めてのの中世集落跡の面的調査として、今後、当時のこの地域の支配関係等、文献的な面からの検討も必要となろう。現在、この遺跡より北へ約500m離れた、昭和58年度の圃場整備事業にかかる佐八町に所在する中ノ垣外遺跡からも同時代の中世集落跡が大がかりに検出されているところであり、この発掘の成果をも加え、さらに将来、宮川左岸段丘上に位置する当地区の中世集落(村落)の在り方、性格等にメスを入れてみたい。

(新田 洋)

IX 上野市蓮池 はすいけだい 蓮池代遺跡

1. 位置と環境

蓮池代遺跡は久米川上流右岸に位置し、標高220m前後を測る。発掘区は幅約80mの舌状台地の先端部に近く、南側は1・2枚の田を下って、久米川となり、北側は少し凹んで、山になる。東側は20～30cmの比高で広い水田が段状に続き、西側はもう少し比高がきつくなると共に、伏流水が噴いてくる地形となっている。発掘区は3枚の畑と2枚の水田であ

る。最高所は畑で、219.15mを測り、低所は水田218.26mを測る。畑部分を中心に、「ショウゴンジ」の伝承が残っているが、その内容は、こういう名の寺があったというだけである。低所の水田には、湧水の激しさに対して、竹による暗梁排水を設けてある。

2. 第1次調査

分布調査で、須恵器、土師器、瓦器の広範な散布を確認した遺跡である。地元には「ショウゴンジ」という伝承も残っていた。事業で削平される遺跡部

分に限り、2×4mのグリッドを13箇所に入れ、全体で108㎡の面積を調査した。期間は昭和56年6月2日から同月4日までである。



第53図 遺跡地形図(1:5000)

調査結果は第3表の如く、すべてのグリッドからは多くの須恵器、土師器、瓦器が主に出土しており、

遺構もNo.1、13を除きしっかり検出され、浅い所では地表より20~30cm下で遺構が確認された。

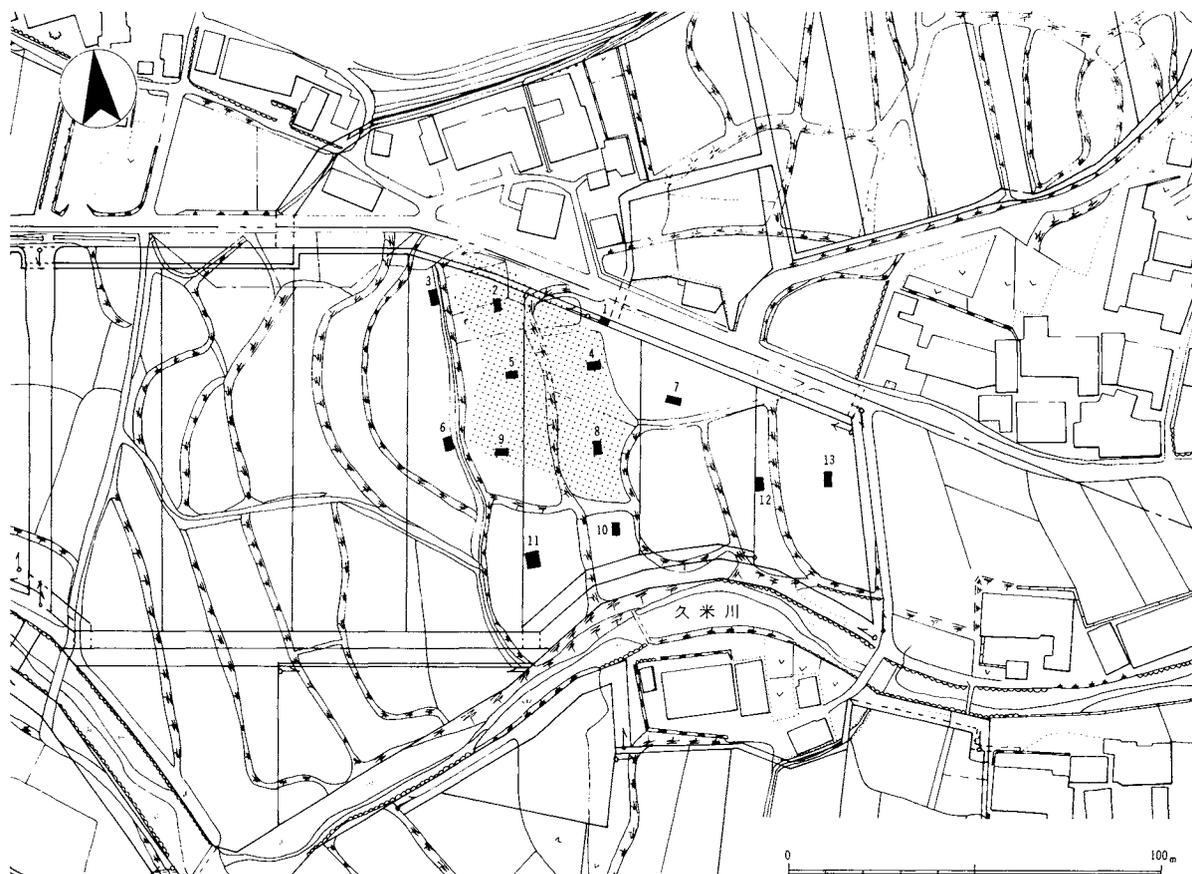
3. 第2次調査

調査は昭和56年9月14日より昭和57年1月15日まで、約2,700㎡について実施した。

調査の結果、奈良~平安時代にかけての掘立柱建物14棟、竪穴住居10棟を検出した。遺構では、他に方形の石組井戸、溝、池状遺構、柵、土壇などが検出された。遺物は、奈良時代~平安時代の土師器、須恵器が圧倒的に多く、墨書のあるものは、土師器の皿、盤の外底部に「上」と判読できるものが3点、須恵器の破片に「大」、「万」と判読できるもの各1点である。他に須恵器の相輪鈕付蓋の鈕部2個体、土師質の円面硯や獣脚、土馬、緑釉、瓦器、青白磁、製塩土器、陶磁器などが出土した。

No	規模m	遺構	遺物			
			須恵器	土師器	瓦器	その他
1	2×2			○	○	陶器
2	2×4	小穴		○		陶磁器
3	2×4	竪穴住居(?)		○		〃
4	2×4	竪穴住居	○多	○多		
5	2×4	土壇	○多	○多		製塩土器、陶器 天目茶碗
6	4×2	〃	○	○		製塩土器、陶器
7	2×4	小穴	○	○		陶器
8	4×2	溝	○	○	○	製塩土器、陶器
9	2×4	小穴	○多	○		〃
10	4×2	竪穴住居(?)	○多	○多		陶器
11	4×4	ある	○	○	○多	〃
12	4×2	竪穴住居(?)	○	○	○	〃
13	4×2			○少		陶器(少)

第4表 蓮池代遺跡第1次調査結果一覧表



第54図 遺跡地形図 (1:2000)



第55図 遺構平面図 (1 : 300)

4. 遺 構

1. 掘立柱建物

14棟の建物を第4表のとおり検出した。表の棟方向は、心心距離の長い方を桁行と判断して、これを軸に磁北との角度を示したものである。このうちS B 2・22・23について、説明する。

S B 2 2間×2間の総柱倉庫である。南北の柱間は等間で2.1mであるが、東西の柱間は東で1.8m西で2.4mである。掘形は一辺70~80cmの方形で、深さ50cmが大半である。他の建物よりは主軸が西へ大きくふくれている。

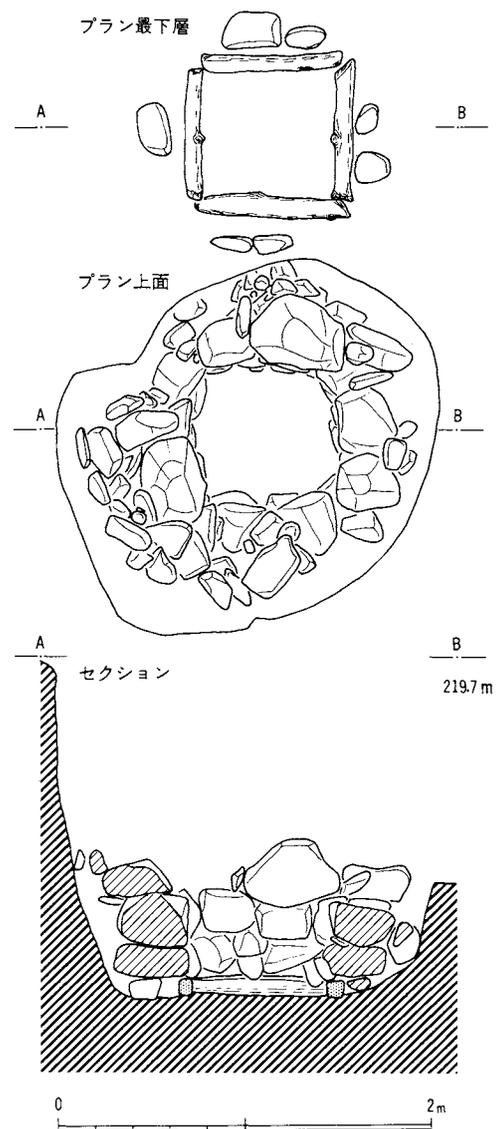
S B 22 3間×3間の建物である。桁行の柱間は東から2.1m+2.1m+2.4mである。梁行東の側柱の検出柱間は1.6m+3.8mであり、西の側柱の柱間は北から2.1m+1.4m+1.9mである。柱穴掘形は桁行北の側柱が一辺50cm程の方形をしており、他は方形の崩れた円形を呈する。深さは17~48cmと様々である。建物隅の柱穴は特別である。北東隅の柱穴には、径20cmの石2個とこれより小さめの石を少々用いて、根石としている。北西隅の柱穴は、建物内側の掘形と径20cmの石を3個用いて、柱を周囲から固定している。南西隅の柱穴も、用いる石は6石であるが、同様の構造である。南東隅の柱穴は、他の3隅とは異なり、石は残存しないが、柱穴は径25cm、深さ41cmである。4隅以外に残る3つの柱穴

は10cmと小さい。このS B 22と棟方向を同じにするのは、S B 2・3・4・23・60の5棟である。

S B 51 3間×2間の建物である。柱間は南西隅から北に向って、2.8m+2.7m、2.75m+2.8m+2.75m、2.8m+2.7m、2.8m+2.7m+2.8mである。梁行の柱間は斜向い毎で等しく、桁行は北の側柱で短+長+短、南の側柱で長+短+長となっている。柱穴方向は一辺0.8~1m方形で、深さ40~60cmと様々で、柱穴の底には根石が組まれている。10の柱穴のうち、半数に柱根が遺存している。柱の固定方法はS B 22と同様である。梁行の東側柱

No	間	心心距離m	棟方向	備考
2	2×2	4.2×4.2	N88°34'W	倉庫、方形掘方
3	(3)×(1)	7.6×2.4	N78°34'W	側柱、〃〃
4	(3)×(2)	8.1×5.2	〃	〃、〃〃
22	3×3	6.6×5.4	〃	〃、〃〃
23	4×4	5.5×5.5	〃	〃、円形掘方
24	(3)×(1)	6.1×2.3	N43°4'W	〃、〃〃
27	2×2	4.6×4.2	N75°34'W	倉庫(?) 〃〃
28	2×2	6.6×4.1	N65°4'W	側柱、〃〃
29	(2)×(1)	4.5×2.7	N48°34'W	〃、〃〃
51	3×2	8.3×5.5	N75°34'W	〃、方形掘方
52	3×3	5.6×3.9	N71°34'W	〃、円形掘方
60	3×3	7.2×6.4	N78°34'W	〃、方形掘方
62	3×3	6.3×6.3	N75°34'W	〃、〃〃
65	(2)×(1)	3.9×2.2	N68°34'W	〃、円形掘方

第5表 掘立柱建物一覧表



第56図 S E 56実測図

の中の柱穴には、径40cm、長さ30cmの柱根が現存していた。柱根は周囲を径20～30cmの石で固定されており、柱根の下には10×40×1cmの礎板が使用されており、この下は根石となっている。SB51と棟方向を同じにするのはSB27・62である。

2. 竪穴住居

SB1・7～12・21・26・64の隅丸方形の10棟を検出した。住居の遺存状態は悪く、床面の深さ15cmを測るものはSB1・7を除くと、1棟もなく、これらも殆んどは、プラン全体が不明である。カマドを北壁に残すのは6棟である。このうちSB1・7を取り上げる。

SB1 検出した住居の最大のもので、約57㎡（8.6×6.6m）の広さである。カマドは住居の東辺に煙道も含めて幅1.7m、長さ3.8mのものがあり、北辺には径1mの焼土がある。周溝は幅40～60cmと広く、深さ12cmを測る。埋土には多くの礫と土器が包含されていた。出土遺物は奈良時代から平安時代

にかけての須恵器、土師器で、整理箱で数箱をこえる量である。中には「上」の墨書のある土器片もある。

SB7 約37㎡（6.3×5.9m）、深さ20cm足らずの住居である。カマド焼土の下から、SB27の柱穴が確認されている。

3. その他の遺構

井戸1基、柵列1列、池状遺構2基、溝、土壇などがある。

SE56（第56図）

発掘区上段西側の法面に一部かかって、SB1の西約2mで検出された石組の隅丸方形の井戸である。

井戸は径1.9mの円形掘形に、径40cm位の石を主に内法で70cm方形に組んだものである。基底は12×80×10cm前後の角材を方形井桁に配置しただけのものである。この上に組まれた石が2～3段遺存しており、底部から最上端の石まで0.8mを測る。湧水は著しく、出土遺物には、おろし皿、黒色土器、土師器、須恵器の破片がある。

5. 遺物

1. 奈良時代の土器

須恵器

鉢（1） 推定口径33.1cm、器高7.6cmである。内面をロクロナデし、口縁端部に水平な面を持ち、体部外面を刷毛ナデしている。器面にヒダスキが見られ、 $\frac{1}{5}$ ぐらいの残存である。SB1出土である。

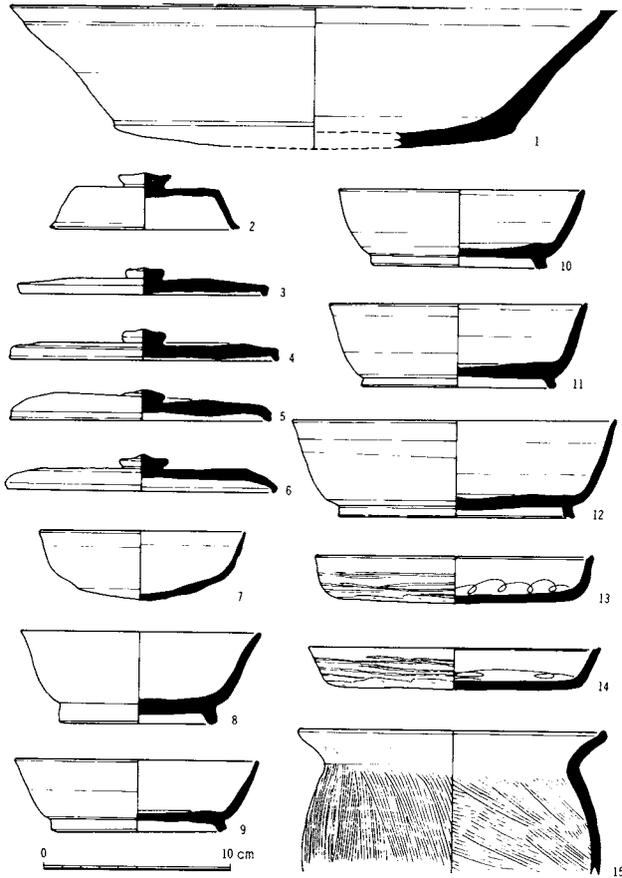
蓋（2） 口径9.4cm、器高3cmである。天井部はほぼ水平で、外面には順方向のロクロケズリが施され、体部との接点で明瞭な稜を持つ。体部は直線的に外傾し、ロクロナデが施されている。口縁端部は面に納め、内面は仕上げナデを施し、灰かぶりとなっている。

杯蓋（3～6） ほぼ平らな天井部は順方向のロクロケズリが施され、周縁で下方へ折れる短い縁部が口縁部となり、ロクロナデが施され、つまみがつくものである。口径13.2～14.2cm、器高1.5～2.0cmである。胎土には2・3mm程度の長石を含み、色

調は白灰色である。ただし（3）は暗青灰色である。（3）～（5）はSB1出土である。（6）はpit出土である。

杯身A（7） 口径11cm、器高3.7cmの高台のない杯身である。体部、口縁部とも方向不明のロクロナデが施され、内底部は一方方向ナデ、外底部に指圧痕がみられる。外面にヒダスキが認められる。完形で、pit出土である。

杯身B（8～12） 平らな底部に、直線的に外傾する体部がたらなる。外底部はロクロケズリされ、一部はさらにその上をロクロナデされている。内面及び体部外面はロクロナデされ、内傾した高台は体部の近くに貼り付き、高台下部に面を持つ。（8）の体部は曲線的に外傾しながら、口縁部近くで外反する。口径12.8cm、高台径7.8cm、器高4.9cmである。SB27の出土である。9～11は口径約13cm、高台径7.0～10.3cm、器高3.9～4.6cmである。（12）は口径17.2cm、高台径12.6cm、器高5.3cmで、高台底部に



第57図 土器実測図

は段を持つ。(9)~(12)はSB1出土である。

土師器

杯 (13・14) 内底部は不調整であるが、ラセン状の暗文を施し、体部器面はヨコナデされ、その上に体部外面の下から $\frac{2}{3}$ 位にヘラミガキが施される。外底部はヘラケズリされ、口縁端部内側に沈線を持つ。胎土は金雲母微粒、赤色粒を含み、色調は茶褐色系である。(13)は口径14.7cm、器高2.6cmである。(14)は口径15.5cm、器高2.3cmである。外底部にはヘラケズリ前の指頭によるオサエ痕が残る。暗文は二重ラセンである。(13)・(14)共にpit出土である。

甕 (15) 口縁部が $\frac{1}{3}$ 残存し、推定口径16.1cmである。口縁部はヨコナデされ、口縁端部は内側に丸く肥厚する。体部内外面及び口縁部外面の一部には刷毛目が1cmで4本数えるものが、びっしり施こされる。SX20出土である。

6. 小 結

検出した建物14棟のうち、全体の規模が判明しているのは、SB2・22・23・27・51・52・60・62の8棟である。SB51とSB27・62はN75°34'Wで、SB22とSB23・60はN78°34'Wで方位が揃っている。現在、出土遺物の整理、編年作業が殆んど着手されていないので、遺物による各建物及び集落の存続時期の決定は正報告を待たねばならない。これに

基づいて、掘立柱建物を中心とする当集落の実態へのアプローチがなされるであろう。

ただ予想される本遺跡の性格は、平安時代も含むが、奈良時代を中心とした、公的性格の強いものと思われる。それは、10点以上の墨書土器、円面硯、緑釉陶器、などの出土遺物や、検出された掘立柱建物群の一部の計画的配置によって、首肯される。

(森前稔)

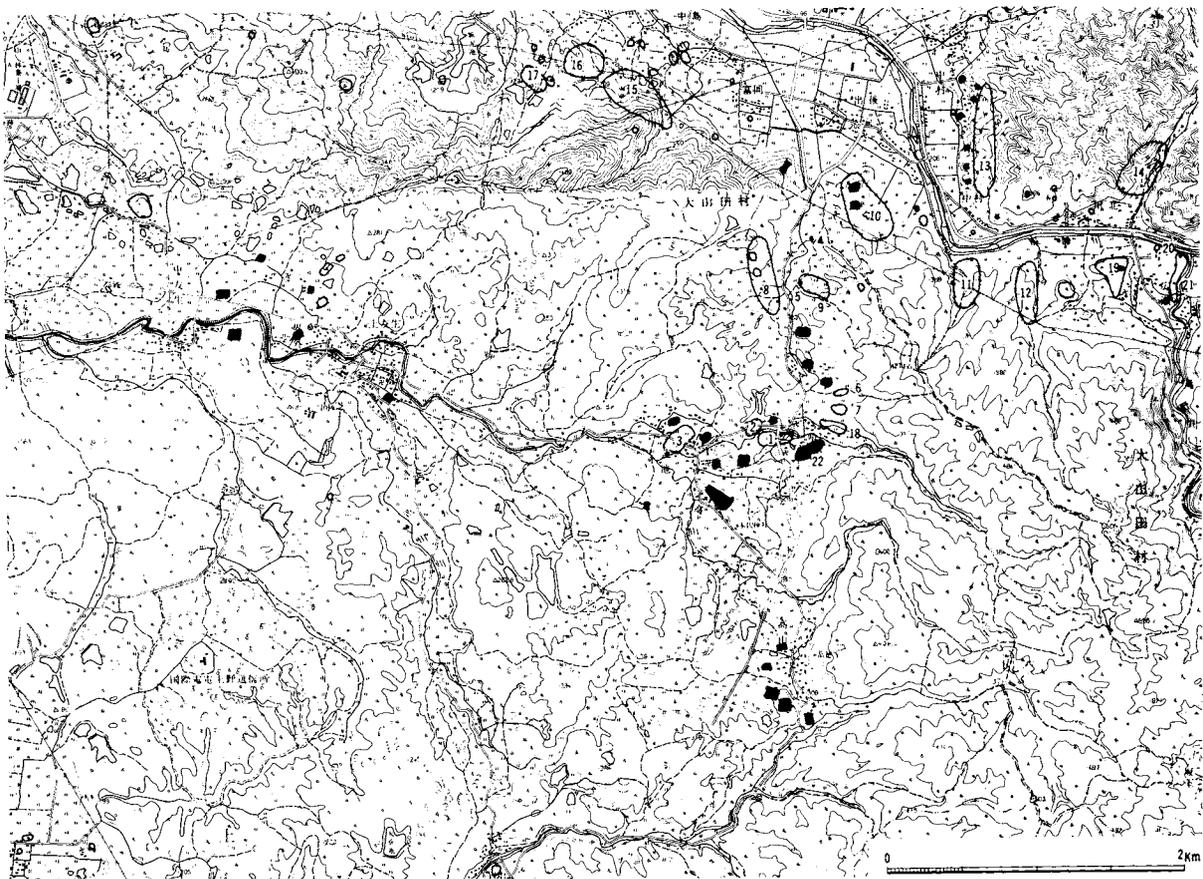
X 上野市喰代 ^{ばば}馬場遺跡

1. 位置と環境

上野盆地は、東西約15km、南北約25kmの小盆地であるが、服部川流域の山田盆地、木津川本支流の阿保、友生、比自岐などの盆中盆地をいくつか持つ。喰代、蓮池地区も、極めて小さい盆中盆地のひとつである。形状は一辺1.5kmの正三角形に底辺の両端に幅200~300mの帯がついたものである。西はこの形の頂点にあたり、標高210mを測り、狭い谷を下って、友生盆地に至る。久米川は北辺にやや近い所を流れ、高山川は南辺側を流れ、頂点より400m手前で合流している。底辺の東方は山裾にあたり、

標高280m前後を測る。南端はさらに高所の高山地区へ棚田が続く。北端には分水嶺があり、以北は服部川支流の中野川が北流して山田盆地に至る。

馬場遺跡は(1)は行政的には上野市喰代字馬場964-2他に属する。地形的には、久米川最上流左岸の標高243~248mの段丘上の何枚かの水田に位置する。和田遺跡(2)は行政的には上野市喰代字和田773他に属する。地形的には、久米川最上流右岸に位置し標高240m前後を測る。両遺跡とも、所によって、比高差2m前後もある棚田に立地し、同一レ



第58図 遺跡位置図 (1:50000)

ベルで最も広い田は600㎡位である。蓮池代遺跡(3)は行政的には上野市蓮池字蓮池代2179-1他に属する。地形的には久米川上流右岸の標高218m前後の舌状に伸びた台地中央部の水田、畑に立地し、耕地一筆ごとの比高は1m以内である。

喰代、蓮池地区は古くから開発された地区である。高猿6号墳(4)は前年度の県営圃場整備事業に伴ない発掘調査された。一辺20mの方墳で、主体部は5基あり、5世紀後半から6世紀初頭に造営、埋葬された。高猿1号墳(5)は明治年間に蛤入りの杯が出土したことで著名である。喰代の北方2kmには喰代の人々が開発の為に後へ出たので、「出後」と

いう地名がついた集落がある。出後は山田盆地でも服部川左岸の上流にあたり、南側の山及び右岸の中村の山裾等で6世紀後半以降の後期古墳(6~17)が100基近くも群在している。集落跡では中ノ切遺跡(18)が古墳時代から鎌倉時代まで営れた。前年度発掘の西沖遺跡(19)からは古墳後期~奈良時代の竪穴住居、平安時代末~鎌倉時代の掘立柱建物が多数検出された。田中遺跡(20)、沢遺跡(21)では弥生時代から近世までの遺物が出ている。この地区は中世城館跡の多い所でもある。百地氏堡(22)を初めとして、この地区で11もある。

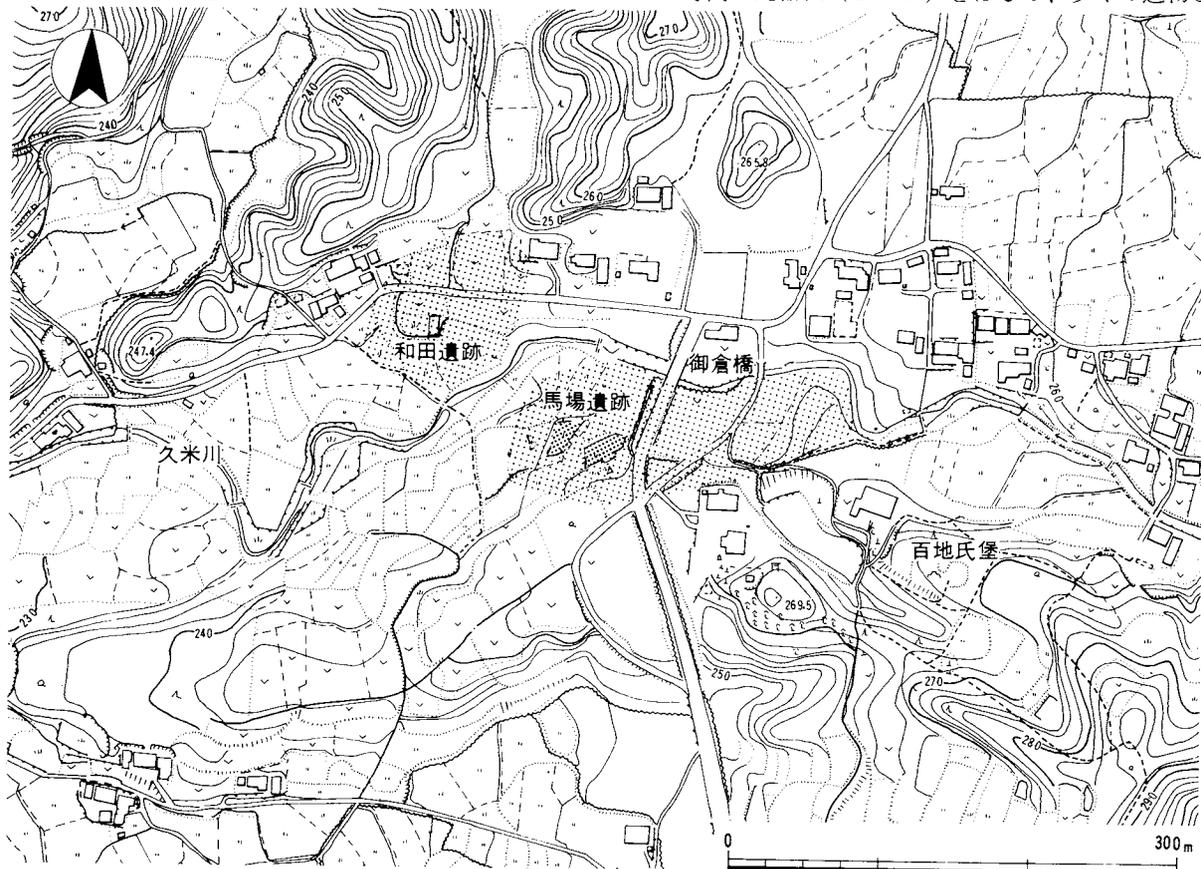
2. 第1次調査

分布調査に基づき、遺跡とした範囲で削平される部分に限って、2×4mグリッドを標準に都合20ヶ所139㎡について、第一次調査を昭和56年5月26日より同月29日まで実施した。

グリッド1~6を馬場遺跡A、7~11を馬場遺跡B、16~24を和田遺跡と称する。尚、12~15は第二

次調査において、追加実施したものである。

第5表が調査結果である。Aでは遺物の出土のわりには遺構が少ない状況である。Bでは瓦器を中心に遺物が多く出土しており、住居跡の一部と考えられるものを検出した。和田遺跡では、伊賀では新しい時代の瓦器碗(1~3)をはじめ、多くの遺物と



第59図 遺跡地形図(1:5000)

遺構を地表下数10cmまでのところで確認した。3地

区とも古代から近世以降にわたる遺跡である。

3. 第2次調査

第一次調査で馬場遺跡Bとした地区のうち、5枚の田について、昭和56年8月3日より9月10日まで発掘調査を実施した。

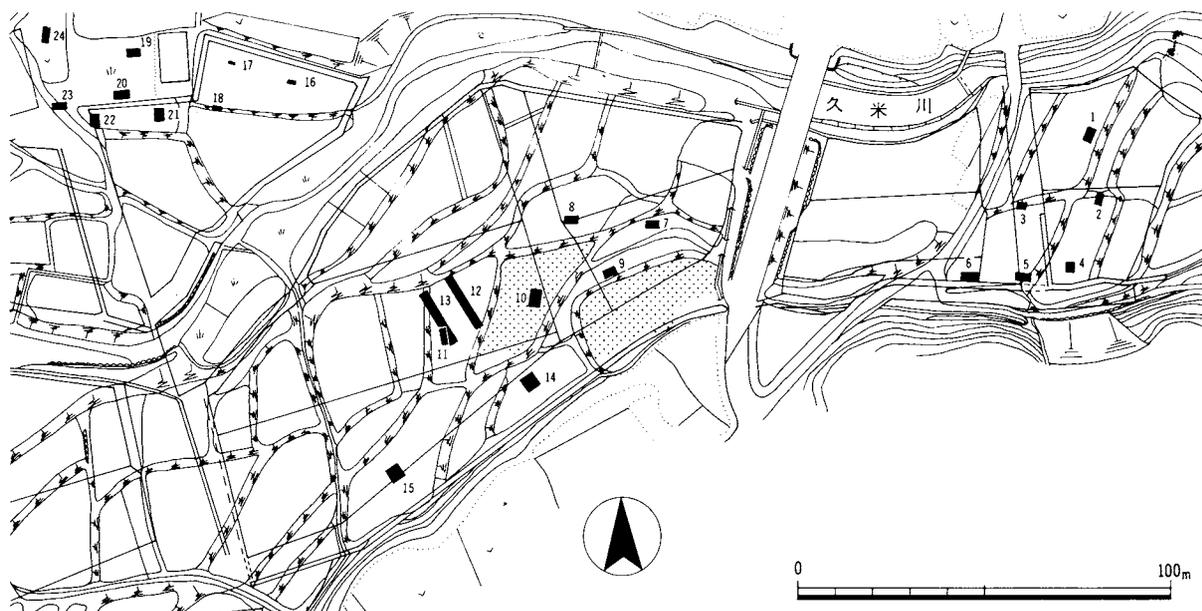
最高所の水田を馬場遺跡A区と称する。A区は標高約249mを測り、面積580㎡である。3間×4間の掘立柱建物1棟、溝1条、土壇6基の遺構を検出した。遺物は整理箱1箱にも満たないが、瓦器(椀、皿)、土師器(皿、壺、甕)、須恵器(杯、甕)、天目茶椀、青白磁、行基焼(ねり鉢)、陶磁器(播鉢)などである。

馬場遺跡B区は標高約246mを測り、面積360㎡である。2間×3間の掘立柱建物1棟、1間×1間以上の建物1棟、柱穴と思われる小穴多数を検出した。遺物は整理箱で数箱を数え、A区と異なる遺物では、砥石、奈良時代の暗文のある土師器の蓋、須恵器の高台のつく杯がある。

グリッド12~15は、第一次調査の補充として設定した。12、13はB区西下の水田で、標高約245mを測る。規模は各々2×16mで、12では遺構はないが、土師器・瓦器が少量出土しており、13では遺物はなく、小穴が数ヶ所で検出された。14、15は4×4mの規模で調査した。共に土師器・瓦器を少量出土

No.	規模m	遺構	遺物			
			須恵器	土師器	瓦器	その他
1	4×2			○		天目茶椀 陶磁器
2	4×2	小穴	○	○		陶磁器(播鉢)
3	1×1					陶磁器
4	2×2		○	○	○	
5	2×4			○		陶磁器
6	2×4					〃
7	2×4	溝		○	○	〃
8	2×4	竪穴住居、焼土	○	○	○	
9	2×4		○		○	
10	4×4	溝		○	○	陶磁器
11	4×2	竪穴住居(?)	○	○	○多	〃
16	1×2		○	○		〃
17	1×2			○	○	〃
18	1×2			○多	○	〃
19	2×4	小石、礎石(?)				
20	2×4	小石、礎石(?)		○		陶磁器(播鉢)
21	4×2	焼土、石組		○皿	○椀皿	
22	4×2	溝		○	○	陶器
23	2×4		○	○		〃
24	4×2	溝		○		陶器(播鉢)

第6表 馬場遺跡第1次調査結果一覧表



第60図 発掘区平面図 (1:2000)

している。14では小穴を認めたが、15では未確認で

ある。標高は14で約247m、15で245.5mを測る。

4. 遺 構

1. A区の遺構 (第61図)

SB4

発掘区の中程で検出した。3間×4間の総柱の掘立柱建物である。桁行8.1m(1.95m+2.1m+2.1m+1.95m)×梁行6.8m(2.6m+2m+2.2m)を測る。柱穴の掘形は径40cm程度である。深さは、側柱では10~20cmで東柱では20~30cmである。

SD1

発掘区の検出遺構では最も東に位置し、幅0.7m全長8.5m、深さ20~30cmを測る溝である。溝は南から北へ、土地の傾きに沿って流れる。SD2で、南端の一部が切られている。

SD2

SD1とSB4の間で、南から北へ流れる幅4.5m、全長10m、深さ40~60cmの溝である。SD1、SB4、SD2も鎌倉時代の遺構であり、とりわけSB4との関連も考えられるが、今回の調査では推測の域にとどまる。

SD6

SB4の南辺で検出された近世の溝である。幅0.9m、長さ8.3m、深さ13cmを測る。

SD9

発掘区西辺で検出された時期不明の溝である。幅0.3m、長さ約6m、深さ10cmを測る。

SK3

SB4の北東隅で検出された土壇である。隅丸の長方形をしており、大きさ0.6×1.6m、深さ7cmを測る。

SK5

SB4の南の側柱の中程で検出した土壇である。幅0.4~0.6m、長さ2.2mの細長い形を呈し、深さ4~8cmを測る。

SK7

発掘区西側の一段と下っていく斜面で検出された土壇である。大きさ0.5×1.5m、深さ20cmを測る。

SK8

SK7の2m程西で検出された土壇である。大きさ0.8×1.6m、深さ20cmを測る。

SK10

発掘区南西隅で検出された土壇である。幅0.3m長さ1.7mの細長い形をしており、深さ10cmを測る。

2. B区の遺構 (第62図)

SB1

発掘区西辺で検出した総柱の2間×3間の掘立柱建物である。桁行7.2m(2.6m+2.0m+2.6m)、梁行4.2m(2.0m+2.2m)を測る。柱穴の掘形は小さく径30cm少々で、深さは北西隅で12cm、他は16cmである。

SB2

発掘区南辺南側で検出した1間×1間以上の掘立柱建物である。柱間は共に2.1mであり、柱穴の掘形は0.3~0.4mで、深さは北西隅で12cm、他は16.7cmである。

SK3

SB1の北西隅あたりで検出した土壇である。1.6×1.3×0.6×2.3mの四辺形をしており、深さ10cmを測る。

その他、多くの小穴があるが、建物としてはまともでないものである。

5. 遺 物

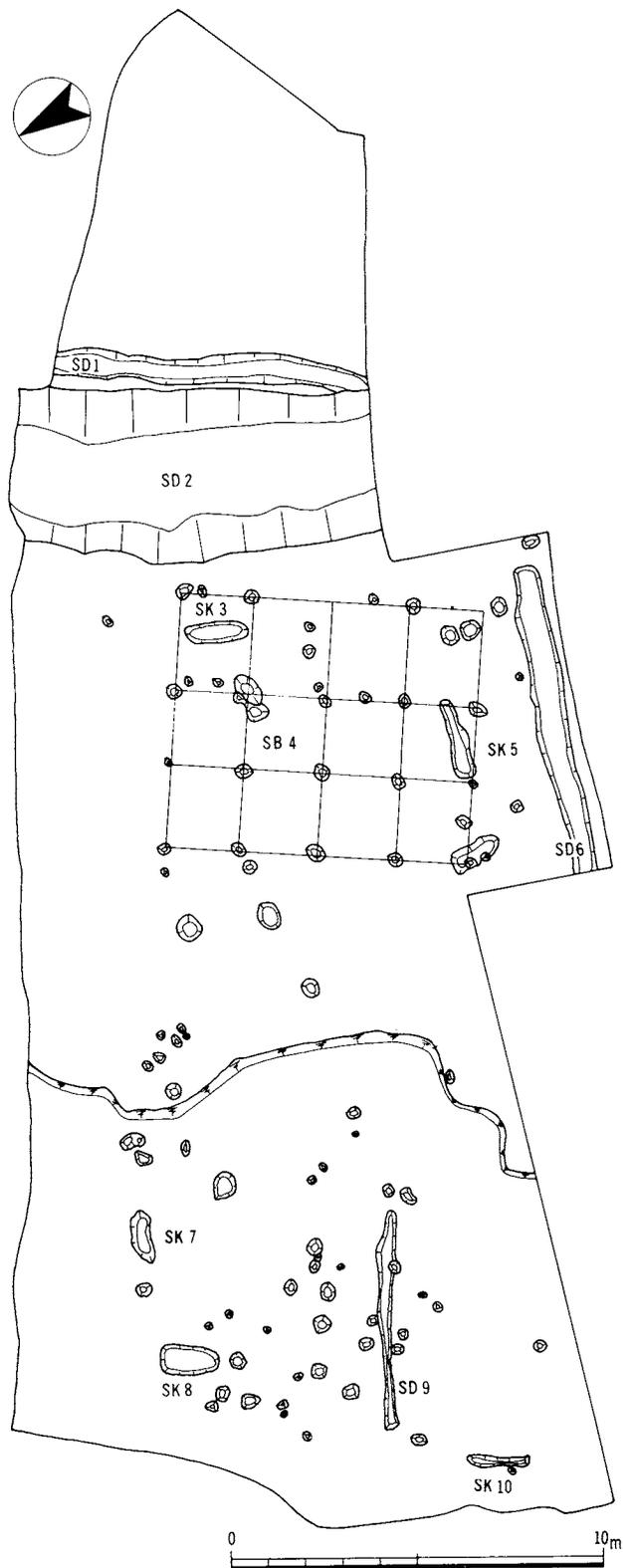
出土遺物は、サヌカイトやチャートの剥片から近世陶器にまで及ぶが、数量的には中世の土器が中心を占める。ただし、A、B区は瓦器を中心とするが、

C区は奈良時代の土器も目立つ。

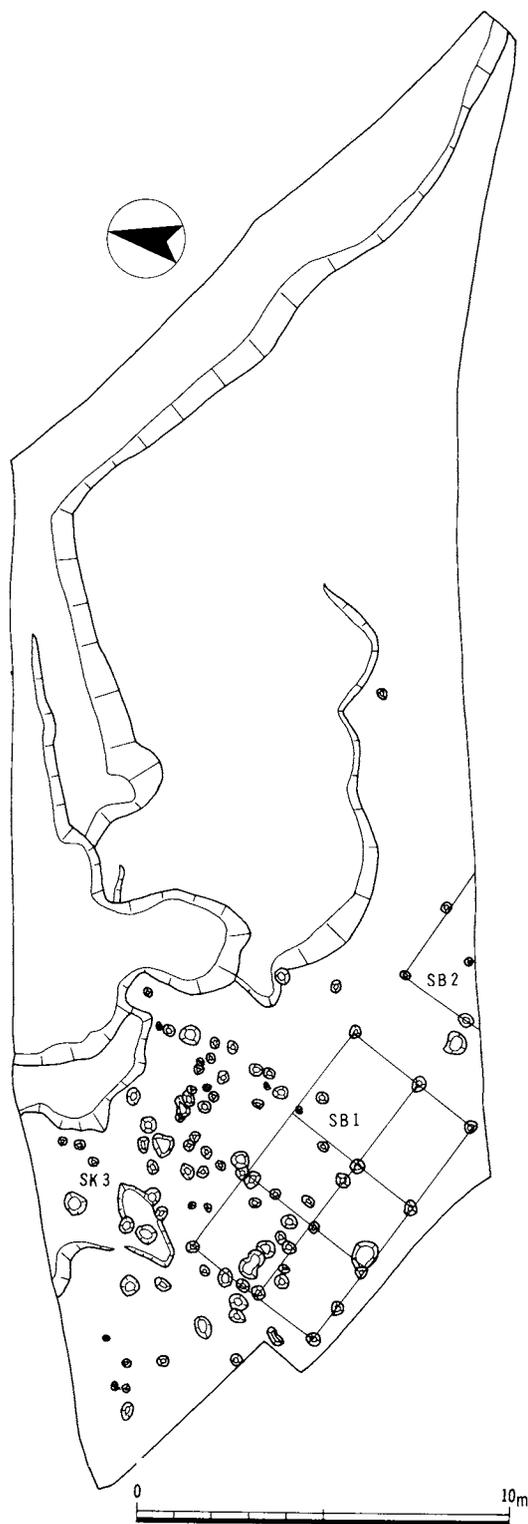
図示(第5図)した瓦器は、1~3は久米川北岸、和田遺跡第一次調査の出土であり、4は馬場遺跡第

二次調査の出土である。これらは、口径13.6~11.4 cm、器高3.1~3.4cmを測り、口縁端の沈線は無い。しかし、高台は一般に付くようである。体部外面には指圧痕が目立ち、口縁部外面にヨコナデを施す。

内面のヘラミガキは幅約2mmと広く、体部と底部とは別に施す。底部内面のヘラミガキは、ラセン状であり、「*l*」字を1~2字書いた具合である。胎土は全体的に精良であるが、細砂を含む例もある。



第61図 A区遺構平面図 (1 : 200)



第62図 B区遺構平面図 (1 : 200)

6. 小 結

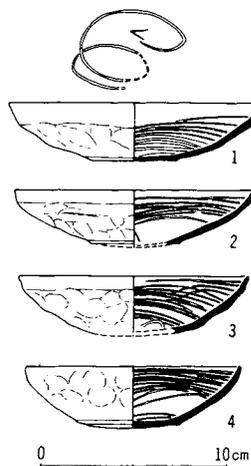
検出遺構のうちA区のSD1、SD2、SB4、B区のSB1、SB2は、鎌倉時代に比定される。

SB4では、梁行柱間が東から2.6m、2m、2.2mとなっており、中央が狭いのは棟木等を支えるための構造であろうか。SB4の西方の柱穴群は建物としてはまとまらないが、それらを含めてSD1・2・6に囲まれた平面が居住区域と想定される。

B区のSB1においても、桁行の中央柱間が狭いが、中世の一般建物の屋根や壁体構造について将来の検討をまちたい。

出土土器類についてはその破片数を、A地区に限りて簡単に検討してみた。(第6表)。

これらの土器は長期間に累積した資料で、特定の時代に限定できず、破片数即ち個体数でもない等の問題点はあるが、一応の傾向は知り得よう。まず、焼成の質を見ると、瓦器と行基焼との比率は772：8と圧倒的に瓦器が多く、長野峠以東に分布する行基焼は、貿易陶磁よりも少ない。なお、貿易陶磁は全体の中で1%強に過ぎない。次に瓦質土器は2片と少く、一般的でない事も知られる。そこで、瓦質土器を除外して、瓦器：土師器：無釉陶器：施釉陶器：貿易陶磁を比較すると、ほぼ50：30：4：4：1である。圧倒的多数を占める前二者は、破損度が高いものの、貯蔵器や奢侈品である後者よりも食器が多い事に起因しよう。おそらく前二者は地元産、中二者は移入品、後者は輸入品であろう。次に、機能別に見ると、狭義の食器である椀や皿と、調理具である練鉢や播鉢及び炊飯具である鍋や羽釜の比率は約10：1である。前者に瓦器の全てと各種の鉢類と鍋や羽釜及び瓦質土器を含めた。この比率は、1回の料理に対する狭義の食器の数を推定す



第63図 出土土器(1：4)の参考となろう。また、

材料を度外視して器種毎の、椀：皿：羽釜：鍋：鉢：甕の比率は、518：96：28：14：33：1となる。これは前二者が狭義の食器、中二者は炊飯具、次は調理具、最後者は貯蔵器である。要するに、僅少な貯蔵器と、ほぼ同数の調理具と炊飯具、及びこの二者の10倍程の食器による構成である。さらに、椀と皿の比率は、ほぼ5：1である。ただ、不明とした瓦器片262の大部分は椀の可能性が高く、椀数点に対し1点の皿を用いた食生活が想定される。また、全調理器は約80点である。損耗率を考慮しても、調理器1点に対し椀は数点となる。したがって、消費の単位は数人であろう。

(森前 稔・山田 猛)

材質	計	器種	数量
瓦器	772	椀	493
		皿	17
		不明	262
土師器	466	椀	1
		皿	78
		羽釜	28
		鍋	14
		不明	345
瓦質土器	2	鍋 ?	2
無釉陶器	60	行基焼	山茶椀 4 練鉢 4
		信楽	播鉢 10
		渥美?	甕 1
			不明 41
施釉陶器	57		天目茶椀 7
		瀬戸	播鉢 6 灰釉鉢 1
		美濃	播鉢 12
			不明 31
貿易陶磁	15	青磁	椀 13 皿 1
		白磁	椀 1
合計	1,372		

第7表 A区出土の中世土器破片数

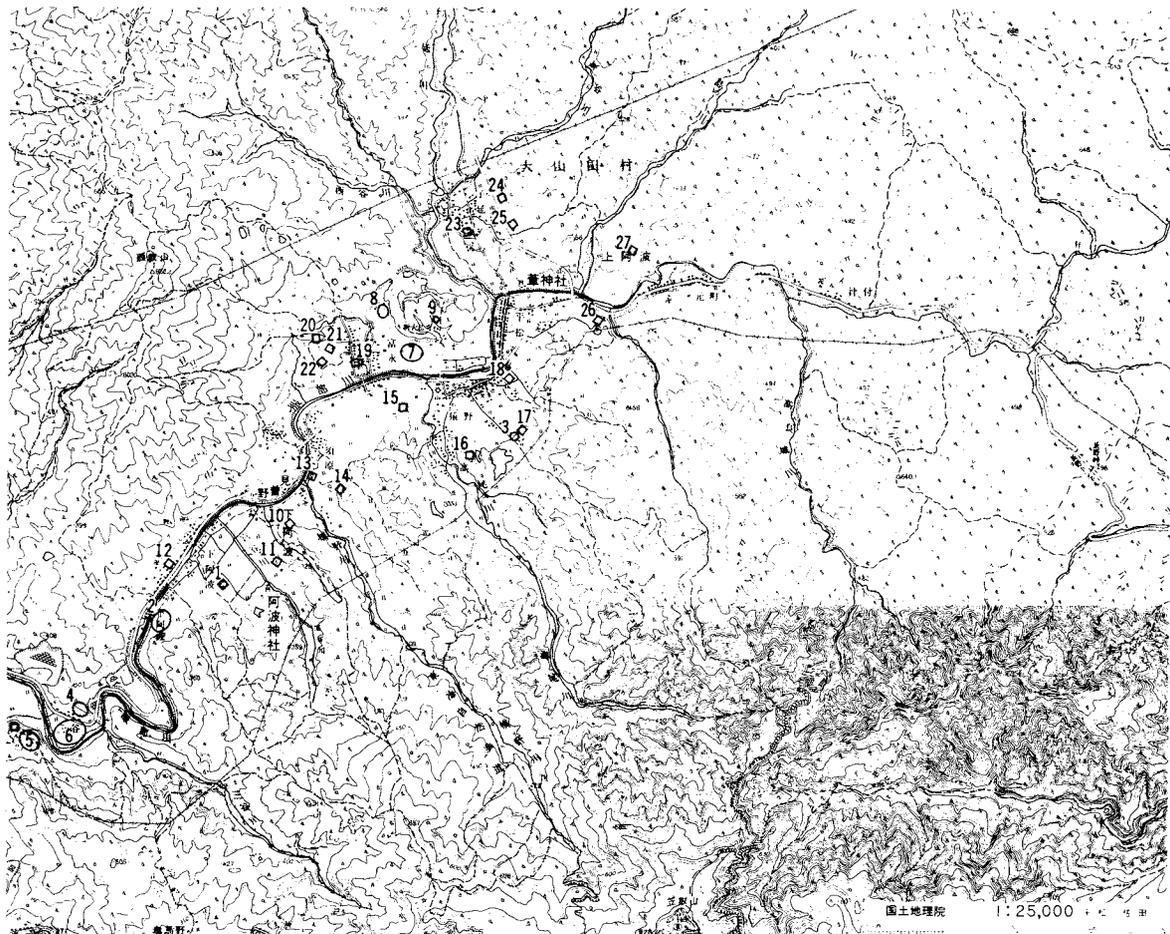
XI 阿山郡大山田村 の なかじょう 野中城跡

1. 位置と環境

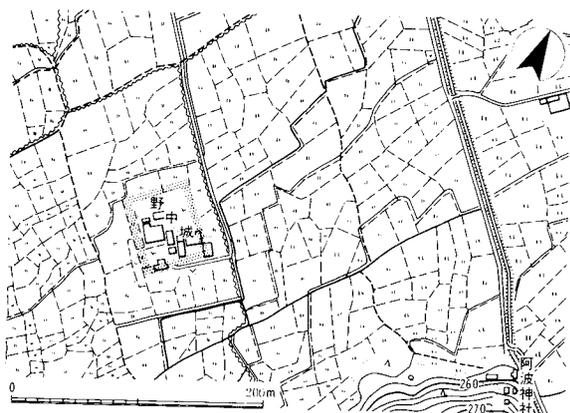
野中城跡(1)は、阿山郡大山田村下阿波字野中に所在する中世城館である。沖積平野に立地しており、「城」というよりも「館」と推定されるが、当地は「ジョウ」とも呼ばれており、小字は野中である点も考え併せ、「野中城」と命名した。

野中城の立地する阿波は、服部川上流の狭小な盆地である。山間の耕地は、服部川の蛇行によって更

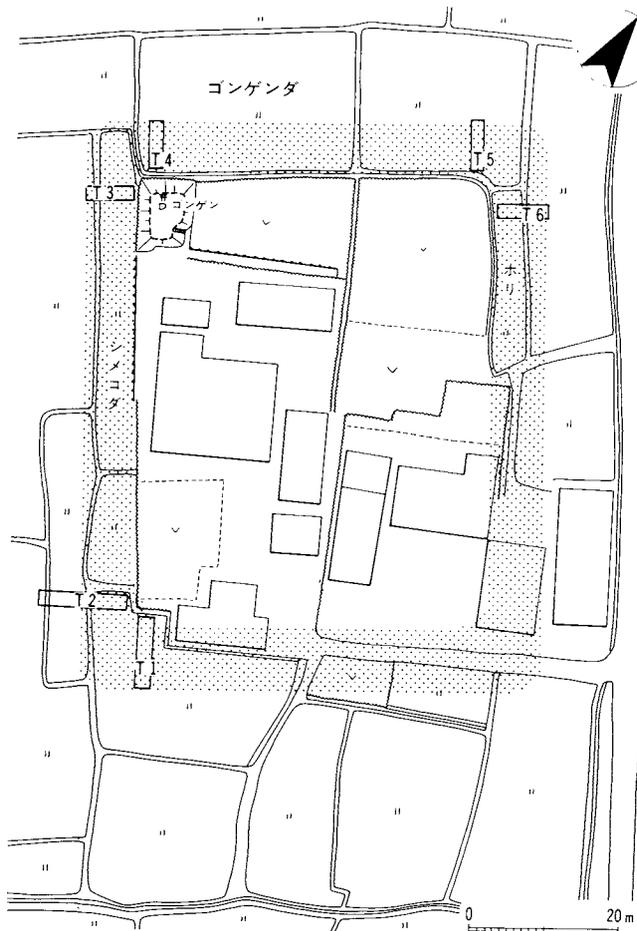
に小さく分割されており、近世以来4箇村からなる。上阿波と下阿波には式内社が鎮座し、上阿波と富永、猿野は葦神社を、下阿波は須原も含めて阿波社を祀る。一方、阿波社の前方にひろがる「天神沖」と須原の「平し野沖」には条里地割が認められる^①。陌線は服部川に沿い、北で東に50度程振れる。阡線も北^②で西に40度程であり、斜行条里とする意見もあるが、



第64図 遺跡位置図 (1 : 50000)



第65図 遺跡地形図 (1 : 6000)



第66図 発掘区平面図 (1 : 1000)

方格の地割と考えるとよからう。

阿波の地を考古学的に通観すると、中世城館跡以外はほとんど不明といわざるを得ない。

川久保遺跡(2)では、別章で報告するように、縄文時代後期や古墳時代の土器が出土した。さらに、11世紀以降の土器や柱穴等も確認された。このほかには、大森遺跡(3)が弥生時代から古墳時代の遺跡として知られるのみである。阿波では古墳は未確認であるが、下流の広瀬には三谷古墳群(4)や山ノ神古墳群(5)等が分布する。さらに、奈良、平安時代の集落跡である三谷遺跡(6)も存在する。

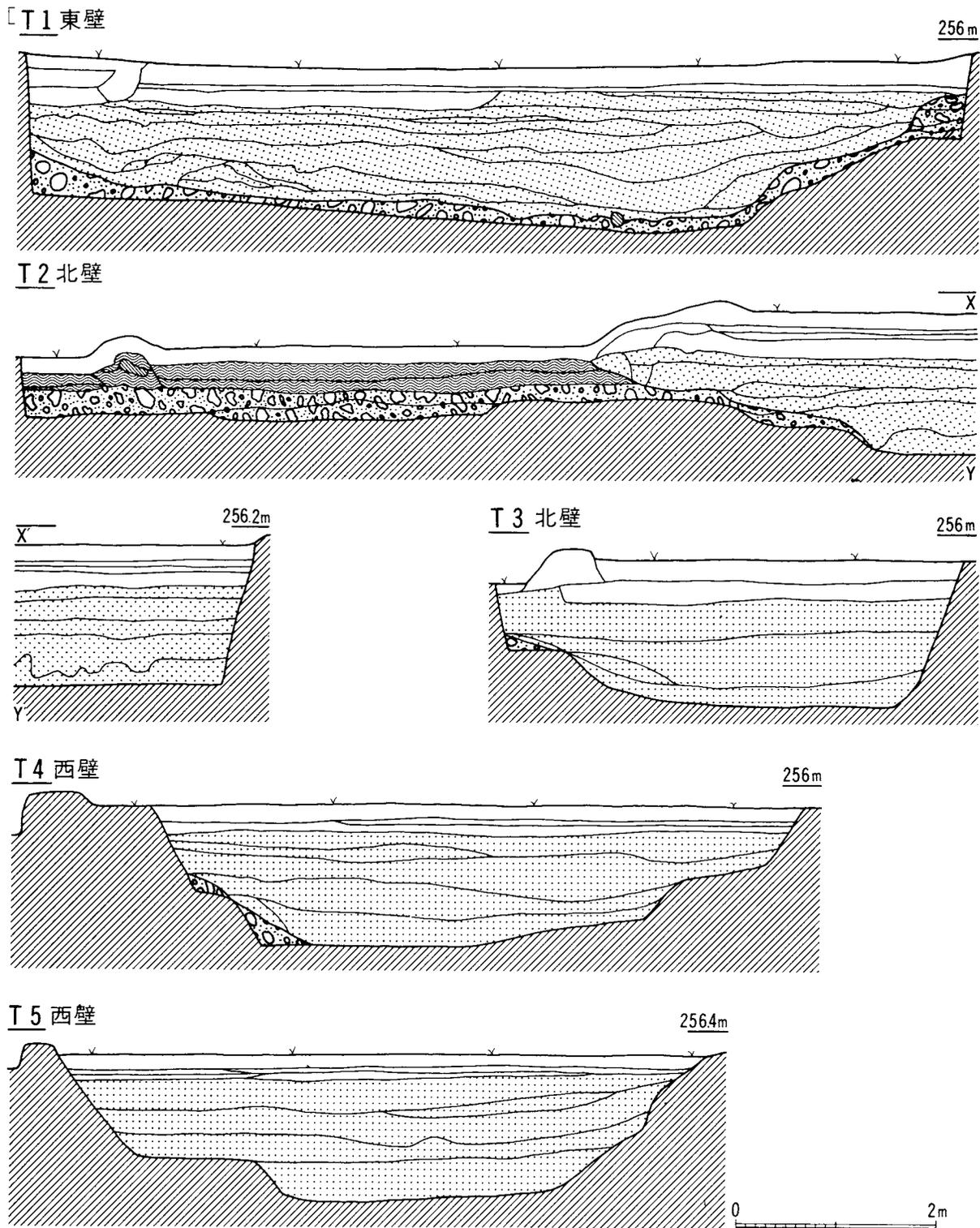
しかし、古代末には川久保遺跡以外にも道の下遺跡(7)や葦平屋敷遺跡(8)等が知られる。また、新大仏寺裏山には経塚が存在し、経筒銅片や陶片、古銭が出土したという。

中世には、阿波には中世城跡が野中城も含めて19箇所確認されている。『宗国誌』や『伊乱記』に見える土豪名は、19をはるかに上回り、今後も館跡や城跡等が発見される可能性がある。

なお文献によれば、阿波には古代以来東大寺領が知られる。さらに『神鳳鈔』によれば、伊勢神宮の「阿波御厨」も存在したという。この所在地は下阿波と推定されているが、明確な根拠はない。ところで、服部川が下阿波で大きく南に蛇行した所に「見曾野」という小字があり、興味深い。ただしこの地名は、明治20年の「地誌取調上申書」には見えるが、元禄12(1699)年の「田方内検帳」には見られない。

2. 遺 構

野中城の現状は(第66図)、北西隅に土塁の一部と考えられる、高さ1.2 m程の土壇が残り、堀の内側は2軒の民家の宅地である。北西隅の土壇上には「ゴンゲン」が祀られ、これに北接する水田(T4設定)は「ゴンゲンド」と呼ばれている。また、西側の堀跡は「シメコダ」と呼ばれる細長い水田として、良くその面影をとどめている。東側の堀跡北半部の水田(T6設定)も、良くその旧状を推測せしめ「ホリ」と呼ばれている。

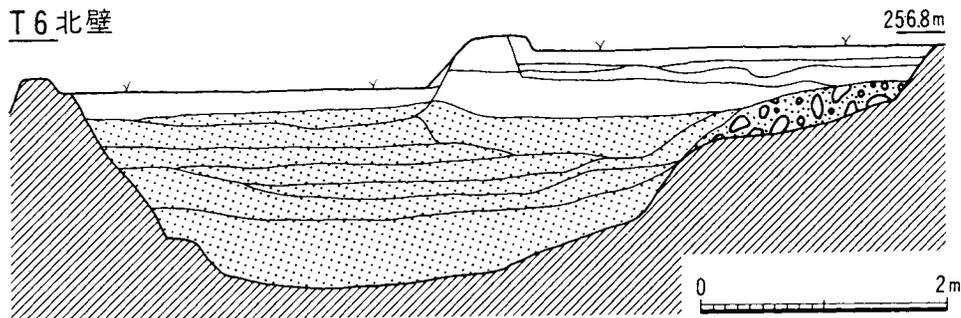


第67図 T1～5断面図（1：60）

圃場整備事業は、東側を除く三方の堀跡の水田にまで及ぶ予定であり、事業施行後は堀跡が水田の形状から窺い得なくなると判断された。そこで、現状の平板測量と併せて、南東隅を除く三隅に試掘坑を2本ずつL字に設定して城館の規模推定に努めた。なお試掘坑の名称は、南西隅から時計廻りにT1か

らT6と呼称した。

各試掘坑の基本的な層序は、まず暗灰色砂礫層上に地山である暗灰色粘土が広がり、これらを掘り下げた堀の埋土は、下層が黒灰色粘土、上層が礫混入淡青灰色粘質土である。



第68図 T 6 断面図 (1 : 60)

T 1 (第67図)

南面する堀の西端推定地に、南北に設けたものである(第3図)。堀の南肩は確認できたが、北側即ち内側の肩は宅地に及び確認できなかった。堀の規模は、幅9.2m以上、推定幅約10mであり、深さは現況で約1.3mを測る。

T 2 (第67図)

西面する堀の南端推定地に、東西に設けた試掘坑である。「シメコダ」と呼ばれる水田が堀跡と考えられたが、この西に接する水田も細長く、堀の幅を確認するために、この2筆の水田に及ぶ試掘坑を設定した。その結果、堀の内側肩は宅地に及び、外側肩は「シメコダ」の畦畔にほぼ一致した。堀の規模は幅6.2m以上、深さは現況で1mである。

なお試掘坑西半部では、現水田下に全く重複して畦畔と耕土らしい土層(第67図波状部)が認められた。この土層の下部は瓦器を少量包含する暗灰色粘質土であり、上部は黒灰色粘土である。この土層は、城館の堀構築時に掘削されており、城館構築前の堆積土である事が知られる。出土した瓦器は小片が微量であるが、12世紀代の皿と13世紀かと推定される碗片がある。

T 3 (第67図)

西面する堀の北端推定地に、東西に設けた試掘坑である。T 2の層序と基本的には変わらず、「シメコダ」よりもやや幅広の堀が推定された。堀の規模は、現況では深さ1.1m、幅4.5m以上である。試掘坑は残存土塁に西接しており、堀の幅は6m前後あったものと推定される。

T 4 (第67図)

北面する堀の西端推定地である「ゴンゲンダ」に、残存土塁に北接して南北に設けた試掘坑である。堀

の内側の肩は確認できなかったが、外側の肩は検出できた。堀の規模は、現況で深さ約1.1m、幅6.2m以上である。この部分の堀の幅は、残存土塁との位置関係から約8mと推定される。

T 5 (第67図)

北面する堀の東端推定地に設けた、南北の試掘坑である。試掘坑の南側は、畦畔と水路を挟んで、宅地の裏庭に続く。この裏庭の畑地は、土塁の削平された跡と推定される。堀の規模は、現況で深さ約1.2m、幅約6mを測る。畑地と堀の外側肩から堀の幅を推定すれば、7m程になる。

T 6 (第68図)

東面する堀の北方にあたと推定され、「ホリ」と呼ばれる、南北に長い水田の北端に設定した、東西の試掘坑である。堀の幅は、「ホリ」と呼ばれる水田よりもやや幅広いが、平面的にはほぼ一致し、この水田が「ホリ」と呼ばれる事の正しさを確認することとなった。堀の規模は、現況で深さ約1.4m、幅約5.1m以上を測る。試掘坑に西接する、土塁削平跡と思われる畑の東端を参考にして堀の幅を推定すると、約6mとなる。

小結

堀の幅は北面が7~8m、東面や西面は6m程であるが、南面は10m程とやや幅広い。また、堀底の絶対高は254.3~254.8mであり、堀の埋土上面は255.4~256.4mである。両者の高さは、現地形と同様に北西隅が最も低く、南東隅が高い。おそらく堀は区画されることなく、同一水面を保っていたものであろう。一方、堀の埋土上層は等しく数cmの礫が混入した粘質土である。この層位からはほとんど遺物の出土は見ず、付近の土層との比較から、掘削時の暗灰色砂礫層等を土塁として利用したが、後世に堀の

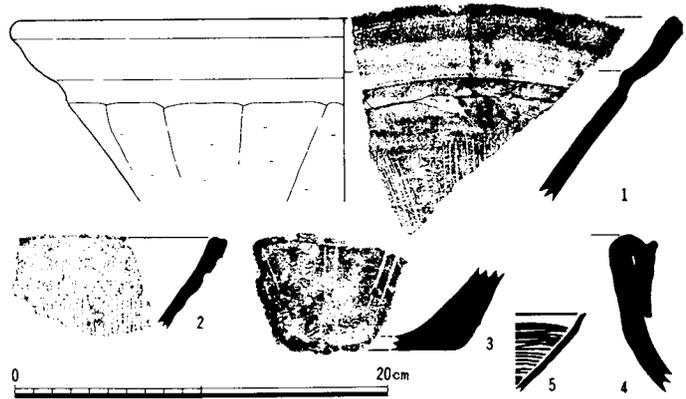
埋土として再利用されたものと推測される。なお、堀の形態は箱薬研堀であり、構築方法は掻揚形式である。

3. 遺物

出土遺物は、中世から近世に及ぶ陶器類が、整理箱で1箱程出土したのみである。これらの遺物は、出土層位により3大別される。すなわち、城館構築以前のもの、存続期のもの、廃絶以降のものである。

城館構築以前のものは、T2試掘坑西半部（第66図波状部）出土の瓦器片（5）がある。既述のとおり、同層は城館構築以前の水田耕土と考えられ、12世紀に属す瓦器皿1片と、小数の瓦器碗片がある。この瓦器碗片は全て同一型式に属すらしく、5に見るように、口縁端部に沈線があり、丸味の消失した体部を持つ。口縁部はヨコナデするが、体部外面には指圧痕を残す。体部内面には、やや幅広のヘラミガキを疎らに配す。底部には低い高台が付き、ラセン文のヘラミガキを持つと考えられる。胎土は精良で灰白色を呈し、燻焼は内外の全面に及ぶ。口径は14cm程と推定される。

城館存続期の遺物と考えられるもの（1～4）は、各地点から少量ずつ出土した。しかし、その大部分は堀埋没後の堆積土層中からの出土（1～2、4）



第69図 土器実測図（1：4）

であり、堀埋土中出土品（3）は少ない。播鉢には3種類ある。1は美濃産と考えられ、12本以上の目を持つ櫛状工具で播目を立て、体部外面はヘラケズリを施す。内外全面に茶褐色の釉を施す。2は瀬戸産と考えられ、密な播目の上から、内外全面シソ色の釉を施す。3は信楽産の播鉢底部片である。3本の目を持つ櫛状工具で疎らに播目を施す。淡黄灰色を呈し、軟質である。おそらく15世紀に属するものであろう。4は常滑産の大甕口縁部である。折り返した口縁部は、幅約4cmと広い。これらは共に15～16世紀の所産であろう。

廃絶後の遺物は、水田床土等から施釉陶器を中心に出土したものが多いが、明確な廃絶期決定資料はない。今回の調査結果からは、近世末以前に廃絶したとのみ指摘し得るにとどまる。

4. 小 結

規模と形態

南東を除く三隅を調査した結果、野中城跡の堀の位置と規模を推定するに至った。堀の幅は、前記のとおり南面が約10m、西面が6～8m、北面が7～8m、東面が6m程である。したがって城館全体の規模は、堀の外法が東西60～62m、南北が74～75mである。堀の内法は東西が約48m、南北が約57mである。さらに、北西隅の土壇は土塁の残存部と考えられるが、この土壇は南東が入隅になっており、あるいは土塁本来の入隅部を残しているものかと考えられる。そこで、この入隅部を測点として土塁の幅を推測すると、東西、南北共約7mになる。また土

壇の現存高は、土塁が削平されたと考えられる東隣の畑からは約1.2mであり、付近の堀埋土上面からは約2.4mである。いずれにせよ、土塁本来の高さをとどめているとは考え難い。ともかく、土塁の幅が推定された事から、土塁内の規模は東西約34m、南北約43mと考えられる。ところで、堀の幅は既述のとおり南面は約10mと他よりも2～4m程幅広い。これは、正面観を意識したものかとも理解できる。現存の民家と同様に、南を入口にしたと想定すれば、南方の条里坪界に相当する東西の農道から、野中城に通ずる南北のやや幅広の畦畔は、野中城の南面中央か若干西寄りに取り付き、これが大手道かと思わ

れる。なお、条里地割と野中城の位置関係は方角も一致しており、両者は意識的に配置された可能性が高い。野中城の堀外郭は、四面共に坪界から一定の距離を保っている。これはおそらく、一種の緩衝地帯を形成していたものであろう。この緩衝地帯は、南北と東は坪界まで、西は「シメコダ」の南西に接する細長い水田の西面畦畔、あるいは坪界までであろうか。

再度要約すると、野中城跡は掻揚形式の箱葉研堀をもつ、単郭環濠式の館跡であり、土塁内法規模は東西約34m、南北約43mを測る。

存続期

構築期に関しては、T2西部の瓦器を出土した旧水田が堀以前のものである事から、堀は少なくとも13世紀以降に掘削されたと理解される。また、堀出土遺物は15世紀から16世紀に及ぶ。したがって、15世紀に構築された可能性が最も高く、16世紀にまで存続していたものであろう。

廃絶期も不明確であるが、堀出土品には17世紀以降の遺物が無い事から、16世紀末頃には廃絶した可能性がある。なお、堀の埋土上層は礫混入土である事から、土塁を崩して埋戻されたと推定された。この礫混入土中から、微量ながら近世末かと思われる陶器片が出土しており、土塁は中世末の城館廃絶後も、近世末まで存続した可能性がある。しかし、近世末まで土塁が残り、堀も埋められていなかったならば、当然『三国地誌』編纂時（1763年完成）には城館跡と認識、記録されていたと考えられる。さらに、堀の埋土出土品に中世末以降の遺物が確認されていない事実も考え併せれば、城館の廃絶と堀の埋戻しには大きな時期差は認め難い。したがって『三国地誌』編纂時には、忘れ去られていた城跡のひとつと理解しておきたい。

野中城と歴史的背景

ところで、『三国地誌』に記載されている下阿波の城館跡は、「植田氏堡」のほか「広田氏宅址」、「阿波氏堡」の比定についてはほぼ問題なく、「奥山氏堡」と「奥氏宅址」は明治20年の「地誌取調上申書」では既に所在地不明となっている。

ところで、『三国地誌』に伝える「天正年間、兵乱の時、評定衆と称する十二人」のひとりであった

「植田氏堡」は、その所在地比定に若干の問題を残す。すなわち、現在「植田氏堡」に比定されている遺跡（10）は、小字「樋詰」の尾根上にある。しかし、上記の「地誌取調上申書」には「村ノ中央字天神」とある。また、現況は「田」と記されているが、当遺跡は尾根上に立地する。特定の「氏」に比定する事の困難さを示す例のひとつといえよう。

一方、この「植田氏堡」とされる(10)と阿波神社の中間の尾根上にも、西に入口を持つ城跡（11）が存在する。小字が「小山田」であるため、仮に「小山田城跡」としておく。この城跡には「小山田コンゴウ」の城という伝承も残り、『三国地誌』に記載しながら所在地不明の「奥山氏堡」などとの関係も考慮すべきであろうか。なお、この城跡の北方には現在民家が2軒並ぶが、この付近は館跡の可能性も皆無としない。

ともかく、『三国地誌』では「阿波氏堡」も記されているが、これは「阿波氏上城」（14）であろう。しかし、居館である「阿波氏下城」（13）は記載されていない。これと同様に、植田氏も「堡」は記されているが、居館は不明である。伊賀国で12人選出された評定衆の居城としては、山頂の詰域的な「堡」は、常住の城としては貧弱に過ぎよう。そこで、「植田氏堡」比定の問題はともかくとして、植田氏の居館は『三国地誌』には記載されなかった可能性が高い。一方、式内社である阿波神社の前方に広がる「天神沖」は、当時の阿波においては最も広く良好な水田地帯であったと思われるが、この「天神沖」の中央には野中城が所在する。現在野中城跡に存在する2軒の民家は、共に植田姓ではないが、評定衆に類する伝承も残っており、野中城が植田氏の居館である可能性も否定しきれない。

なお、野中城跡北西隅の土塁の残存部と考えられる土壇上には「ゴンゲン」が祀られている。年1回の祭日には、近年まで付近に存在した家々（現在の姓は異なる）が集い、「ゴンゲンダ」の収穫物を祭事に充るといふ。この祭祀が中世にまで遡るといふ確証はないが、例えば阿波氏下城でもやはり北西隅の土壇上に小社を祀る。また、類例は伊賀の中世城館にしばしば見られる。これは、近隣の家々が祭祀構成員となっており、あるいは中世以来の「家の子

郎党」全体の祭祀形態をとどめるものかとも想像される。ここにおいては、擬制的関係も含んだであろう広義の「家」という精神的紐帯が、共有すると観念された神の前における共飲共食儀礼を通じて確認強化されたであろう。この社会集団は、一族（あるいは植田氏か）の惣領を中心とする「同名中」に比定すべきものと考えられる。

神前における共飲共食儀礼を通じて「一味同心」するという形態は、より広域の社会集団にも存在したであろう。下阿波に関しては、当然式内社である阿波神社が当地域の精神的紐帯であったと考えられる。この祭祀の主要構成員は、植田氏や阿波氏を始めとする城館を構え、苗字帯刀を公認された「侍」層であろう。仮に彼らが阿波社を紐帯として結合していたならば、これは下阿波という領域を持つ政治的、軍事的集団でもあったと考えられる。同様な結合がより広域に展開した場合、「郡中惣」、さらに「惣国一揆」と呼ばれるものとなる。

ところで彼ら城館主は、何故より広域への連合を実現したのであろうか。その理由は、政治、軍治的外圧という要因もさる事ながら、彼ら自身の歴史的な性格に求める必要がある。この中世城館主の歴史的な性格を明らかにする事によって、始めて彼らの土塁や堀は基本的に誰に対して構築されたものかが明らかになるであろう。この問題を考古学的に解明する事は困難である。しかし、伊賀における中世城館跡の分布状況を見ると、各集落に少数ながら複数認められる場合が一般的である。したがって、彼らは基本的に敵対関係ではなく、むしろ水利等を通じて協調関係にあったものと考えられる。一方、伊賀における中世城館の成立期は、発掘調査されてその報告が公刊された例に関して、信楽焼摺鉢を中心とする出土遺物の編年観に拠って検討すると、その多くは15世紀代と考えられる。これは中世末に構築された詰城の類を除いて、居館跡を中心にみた場合である。したがって、各集落において15世紀以降、異なる社会層あるいは同一社会層の他集団に対して武装化する必要が生じたものといえよう。しかし文献を中心とする研究から明らかのように、彼らは上記のとおり漸次広域に結合しており、基本的な敵対関係はないと考えられ、やはり各集落内の異なる社会層に対

して敵対していたものと理解したい。ところで、彼ら城館に居住した社会層は、当然各集落における最有力層であろう。したがって文献史学の成果を採用すれば、「在地領主層」と呼ばれる社会層が城館主に比定されよう。彼ら在地領主層は、単に経済的な加地子集積者というにとどまらず、伝統的な「職」や「侍」身分を背景としていたと考えられ、百姓上層とは区別されるべきものである。家父長的隷属関係を基礎にして被官を組織した彼らは、また、「地侍」とも呼ばれる。守護に体现された国家権力の動揺崩壊後、加地子集得権を自ら保障してゆくため、伝統的「侍」身分の彼ら在地領主層は軍事的に武装し、一揆即ち地域的連合を拡大、強化していったものと理解される。したがって中世城館の堀や土塁は、本質的には、直接生産者層に対して構築されたものであろう。

(山田 猛)

(註)

- ① 谷岡武雄、福永正三「伊賀国の条里制」
(『伊勢湾岸地域の古代条里制』1979)
- ② 大山田村『大山田村史 上巻』1982
- ③ 注2に同じ
- ④ 三重県教育委員会『三重の中世城館』1976
福井健二『三重の城』1979
湯澤典子「中世後期在地領主層の動向」(『歴史学研究』
No.497 1981)等を参考とした。

XII 阿山郡大山田村 やま で 山出遺跡

1. 位置と環境

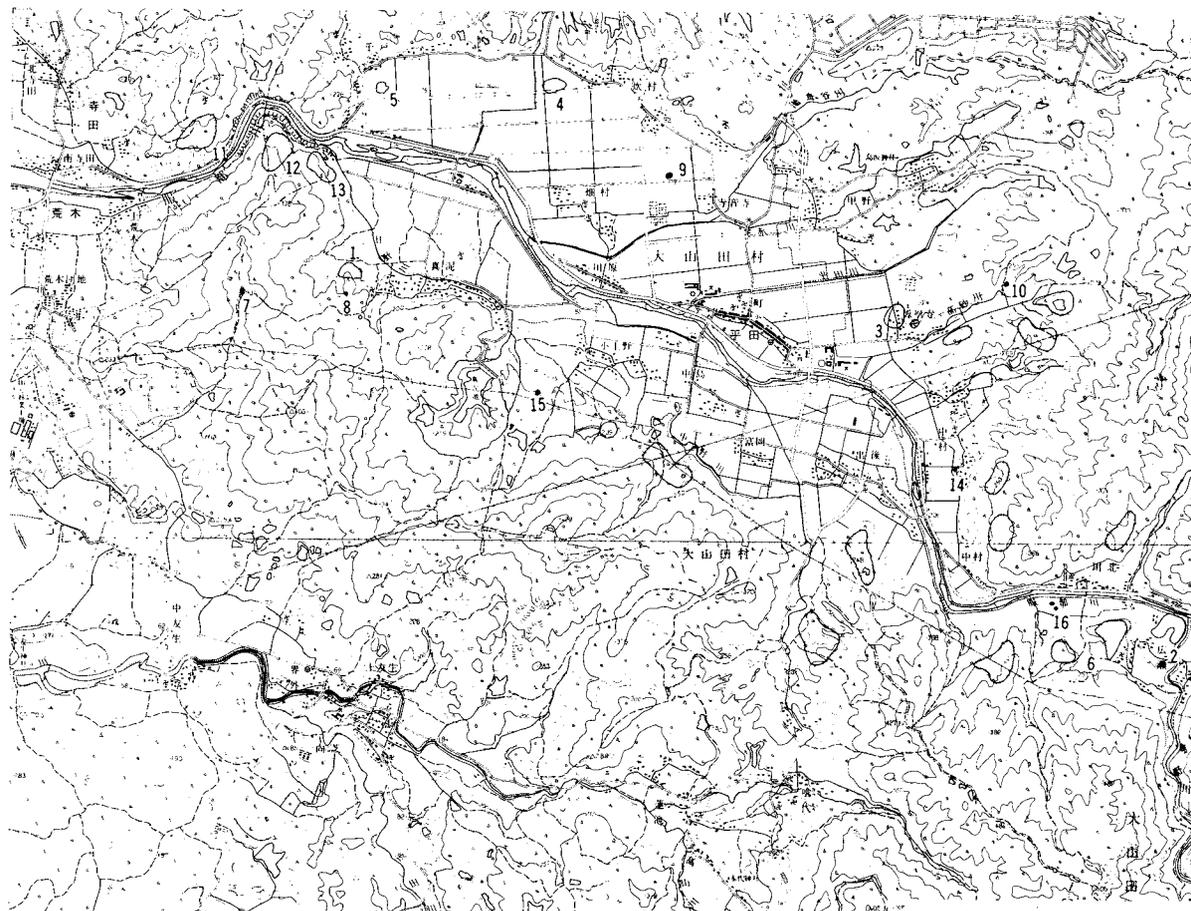
山出遺跡（1）は大山田盆地の南西端に位置し、標高 185 m 前後の半島状丘陵先端部に営まれた古代・中世の集落跡である。行政上は、阿山郡大山田村真泥字山出に属する。

大山田村と上野市の境には、標高 340～350 m の丘陵が広がり、大山田盆地と上野盆地を画している。この丘陵地は、大山田村の中央部を西流する服部川に浸蝕され、盆地西端で小規模な溪谷を形成している^①。

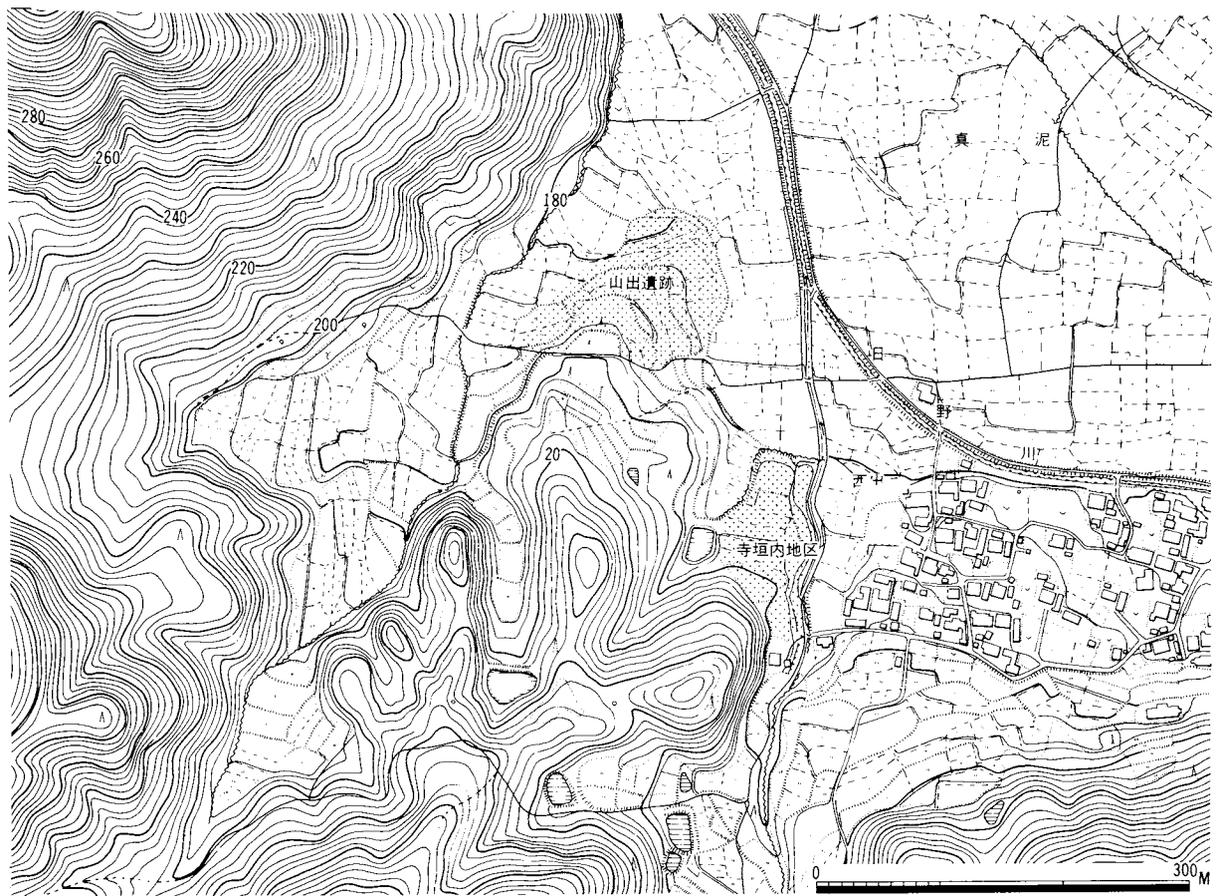
大山田村の古代集落については不明な点が多く、沢遺跡（2）・轟遺跡（3）・炊遺跡（4）・里の垣内遺跡（5）等の遺物散布地が知られているのみである。昭和55年大字広瀬の西沖遺跡（6）が発掘

調査され古墳時代～室町・江戸時代にわたるまとまった遺構、遺物が検出された。

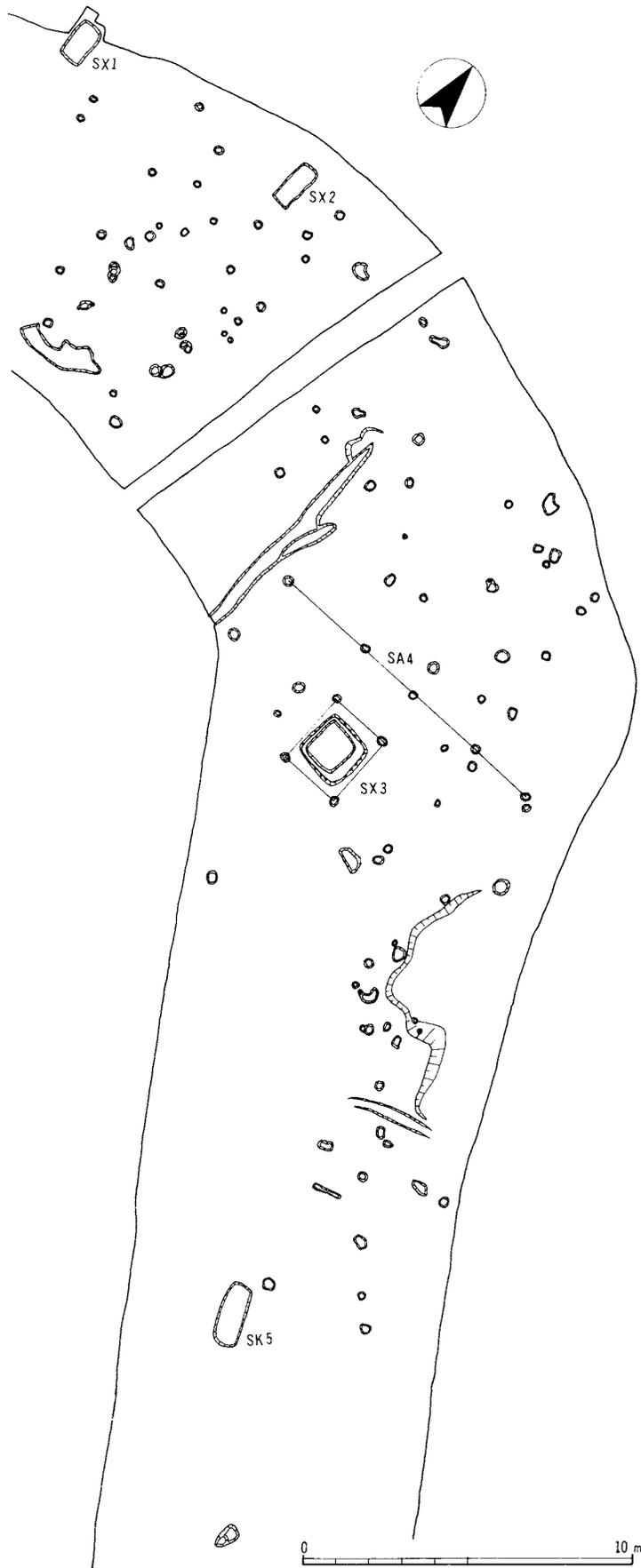
ところで服部川により分けられた南北丘陵には多くの古墳が築かれている。山出遺跡の西方 0.8km の標高 334 m の丘陵頂部には、伊賀でも最古の部類に属する前方後円墳である荒木車塚古墳（7）がある。また、本遺跡の南には寺垣内古墳（8）が築かれている。この古墳はすでに削平されその規模等は不明であるが、出土した円筒埴輪片から前期古墳と推定されるものである。また、服部川をはさんで北方に寺音寺古墳（9）・鳴塚古墳（10）が築かれている。群集墳としては、前塚古墳群（11）・中ノ瀬古墳群（12）・下山古墳群（13）等がある。いずれも横穴



第70図 遺跡位置図（1：50000）



上: 第71図 遺跡地形図 (1: 6000) 下: 第72図 発掘区平面図 (1: 2000)



第73図 遺構平面図 (1: 200)

式石室を内部主体としている。発掘調査された古墳には、辻堂古墳 (14)・平林1号墳 (15)・横枕古墳群^②(16)がある。

山出遺跡は、昭和54年度の調査で、古式土師器を出土する竪穴住居が確認されている。今年度の調査は、丘陵部高所の削平部2000m²について発掘調査を実施した。

2. 遺 構

SX1・2 いずれも火葬穴である。側壁は1~2cmの厚さで焼けしまっている。埋土はほとんど炭がつまっており、粉状になった骨片が少量検出された。遺物は全く伴わない。SX1は東西0.8m、南北1.3mで、深さは20cm、SX2は、東西0.6m、南北1.4m、深さは25cmである。両者とも長軸はほぼ南北方向を示す。

SX3 東西・南北とも1.2m前後の正方形土壇で、深さは10cm弱である。底部付近より羽釜形土器(6)が出土した。側壁は焼けていないが、埋葬遺構の一つと考える。土壇のまわりには一間四方で、東西1.9m、南北2.3mの柱間をもつ柱穴が検出されており、この土壇に伴う建物と考えられる。南北の柱列の方向はN4°Eを示す。

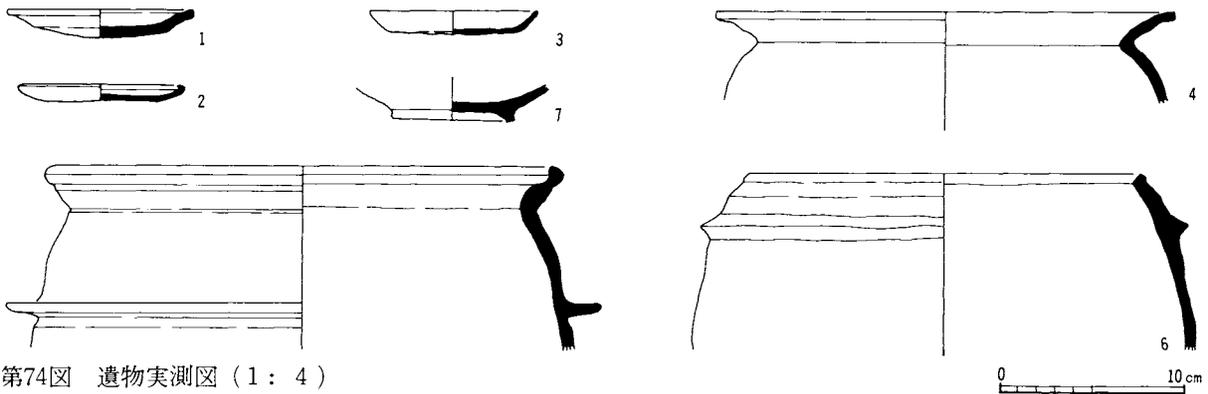
SA4 SX3付属建物から北へ1.7m離れ、これと直交する形で東西に4間分検出された柵列である。柵の間は等間ではなく、2m~3.2mある。柱穴の大きさは径30cm、深さ20~30cm。

SK5 東西0.8m、南北1.9m、深さ25cmの土壇である。出土遺物は全くない。

3. 遺 物

土師器

皿(1~3) 1は径10~10.5cm。口縁部が外反し、端部が肥厚する。口縁内側に段がつく。2は器壁が薄く、口縁端部に外傾する面をもつ小皿で、底部以外はヨコナデ



第74図 遺物実測図 (1: 4)

される。口径8.2cm、器高1cm。3は無調整の底部からゆるやかにたちあがる小皿である。

甕 (4) 推定口径22.6cm、口縁部は強く「く」の字に外反する。口縁部は内外面ともヨコナデされるが他は不明である。胎土は砂粒を含みざらつく。

羽釜形土器 (5・6) 5は短く外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。端部内側は強くおさえられ凹面となる。口縁端部下7.2cmで、わずかに上向いた羽部がとりつけられる。羽下部から口縁部内

面まではヨコナデされる。胎土は金雲母、砂粒を含みざらつく。明るい褐色である。6はSX3に伴うもので、断面三角形の短い羽部のついた羽釜形土器である。器面はヨコナデされ、口縁端部は内傾する面を有する。胎土は砂粒を含み、暗褐色、赤褐色を呈する。

瓦器碗 (7) 外へふんばった方形高台の碗である。いぶしの状態が悪く内面は黒色にならない。器面の保存が良好でないためミガキ、暗文は不明である。

4. 小 結

54年度調査で確認された竪穴住居を含む台地縁辺部は協議により盛土保存されることになったため、今年度は削平部の調査であった。出土遺物は調査面積2000㎡の割に少なく、テンバコに数箱で細片が多く、土器の保存状態も悪い。弥生後期から室町時代にわたる遺物が出土したが、古墳時代後期から平安時代中期の土器は全く無い。全体を調査していないため集落のあり方とか時代による遺跡の変遷については詳しく触れることができないが、54年度調査結果も含めて簡単な概観をしておきたい。

54年度調査^③では、「北から東にかけての各グリッドでは遺物包含層が厚く、出土遺物も多い」と報告されている。グリッド番号でいえば1～10にあたる。特に丘陵縁辺部の遺物包含層が厚いと指摘している。竪穴住居は4Gで確認されており、北に張り出した丘陵縁辺部が古墳時代前期の集落と考えられる。今年度の調査では、平安時代末から室町時代の遺物が多く、集落を示す遺構は確認されなかった。SX3出土の羽釜形土器(6)が唯一まとまりのある遺構

出土の遺物であり、SX3とSX1・2をその示す方向の類似から同時期と考え、室町期には一種の墓地として利用されていたものと推定される。また、墓塚の外に四か所の柱穴を有する例は鈴鹿市東庄内B遺跡^④で検出されているが、東庄内例では方形に区画された溝で囲まれている点や火葬である点など、本遺跡と異なっている。

山出遺跡は、まず丘陵縁辺部に古墳時代前期の集落が営まれ、その後空白期間或は人との関わりが稀薄な期間があり、室町期に至り集落と離れて墓地が形成されたものであろう。(山下雅春)

(註)

- ① 「大山田村史」大山田村史編纂室 1982
- ② 中森英夫「阿山郡大山田村 横枕1・2号墳」『昭和54年度県営圃場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980
- ③ 駒田利治「阿山郡大山田村 山出遺跡」同上
- ④ 小玉道明・下村登良男・山沢義貴・谷本鋭次「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会 1970

版 圖



全 景 (西から)



SK4 (南から)



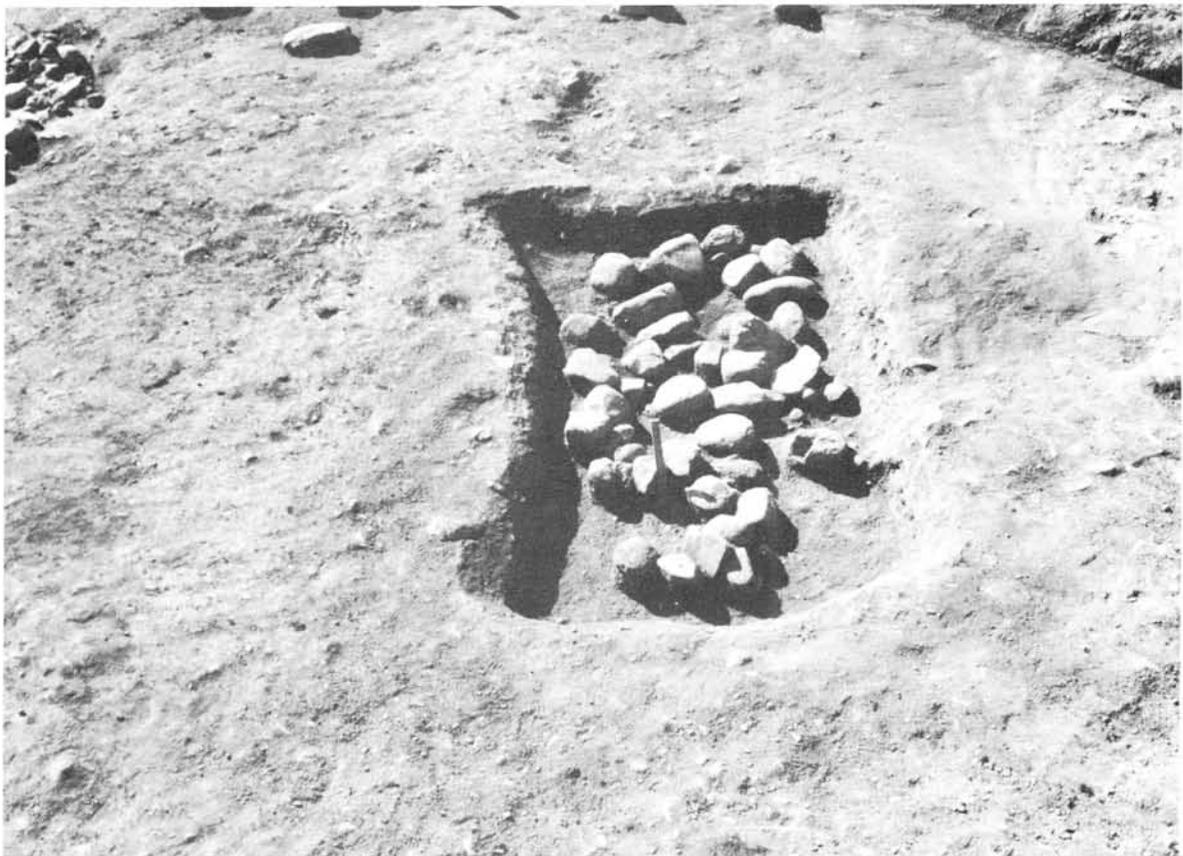
全 景 (南から)



SD4・SD6・SD7 (西から)



SX13・SK14 (北西から)



SX12 (東から)



SE 9 (北から)



SE 9 (南から)



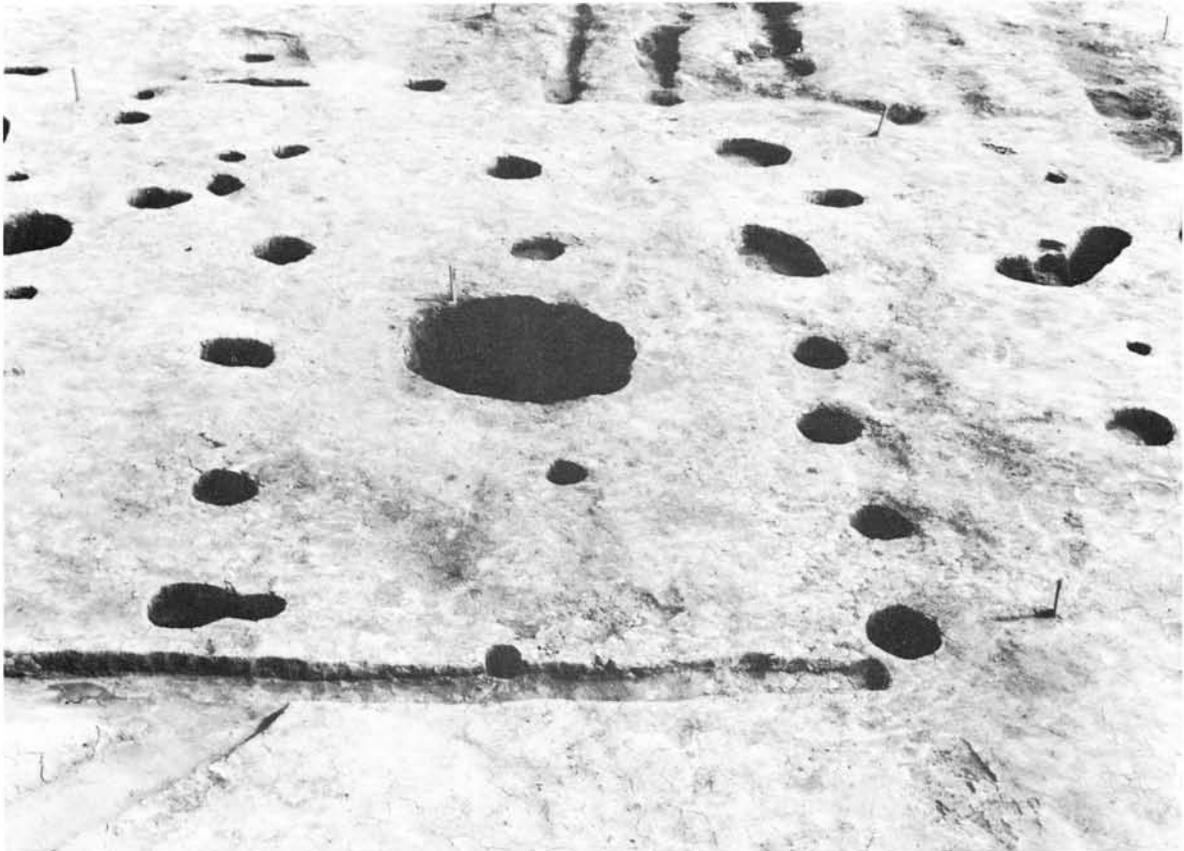
遠 景（南から）



A地区 全 景



B地区 全 景（北から）



B地区 SB18・SE19（西から）



B地区 SE7・SD8 (北から)



B地区 SE7 (西から)



C地区 全 景 (西から)



C地区 SD2・4 (西から)



航空写真



調査前 遠 景（南から）

PL10

堀田遺跡



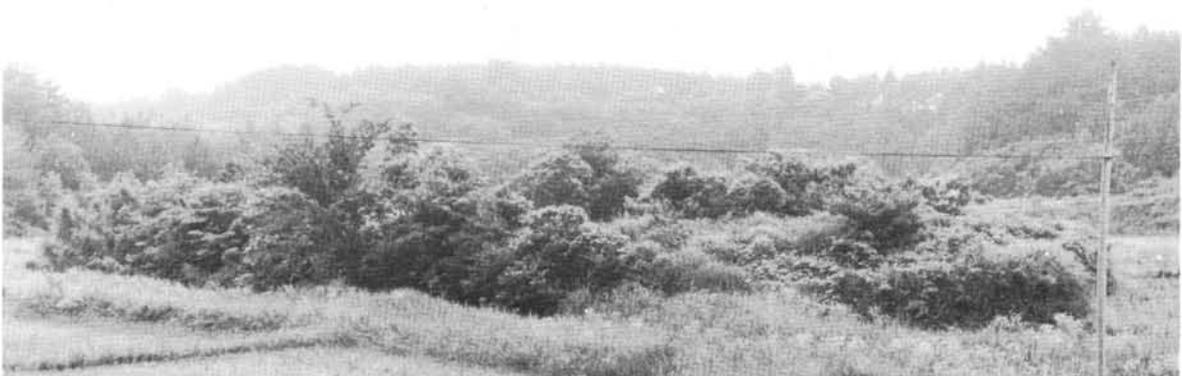
全 景 (東から)



全 景 (西から)



A地区 調査前遠景（東から）



B地区 調査前遠景（北西から）



航空写真



A地区 全景（北西から）



B地区 全景（南から）



SB1 (南から)



SB2 (南から)



SX 3 (合口甕棺)



SX 4 (合口甕棺)



遠景（東から）



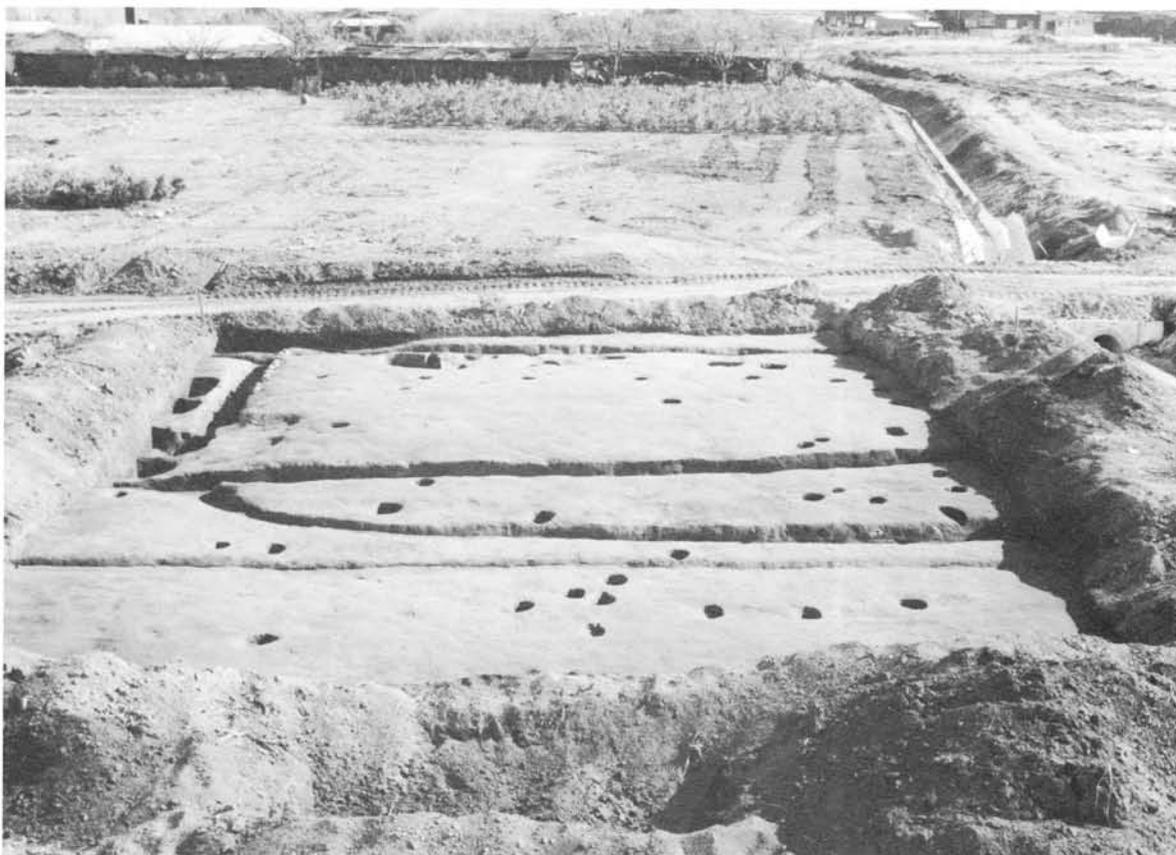
調査前遠景（南東から）



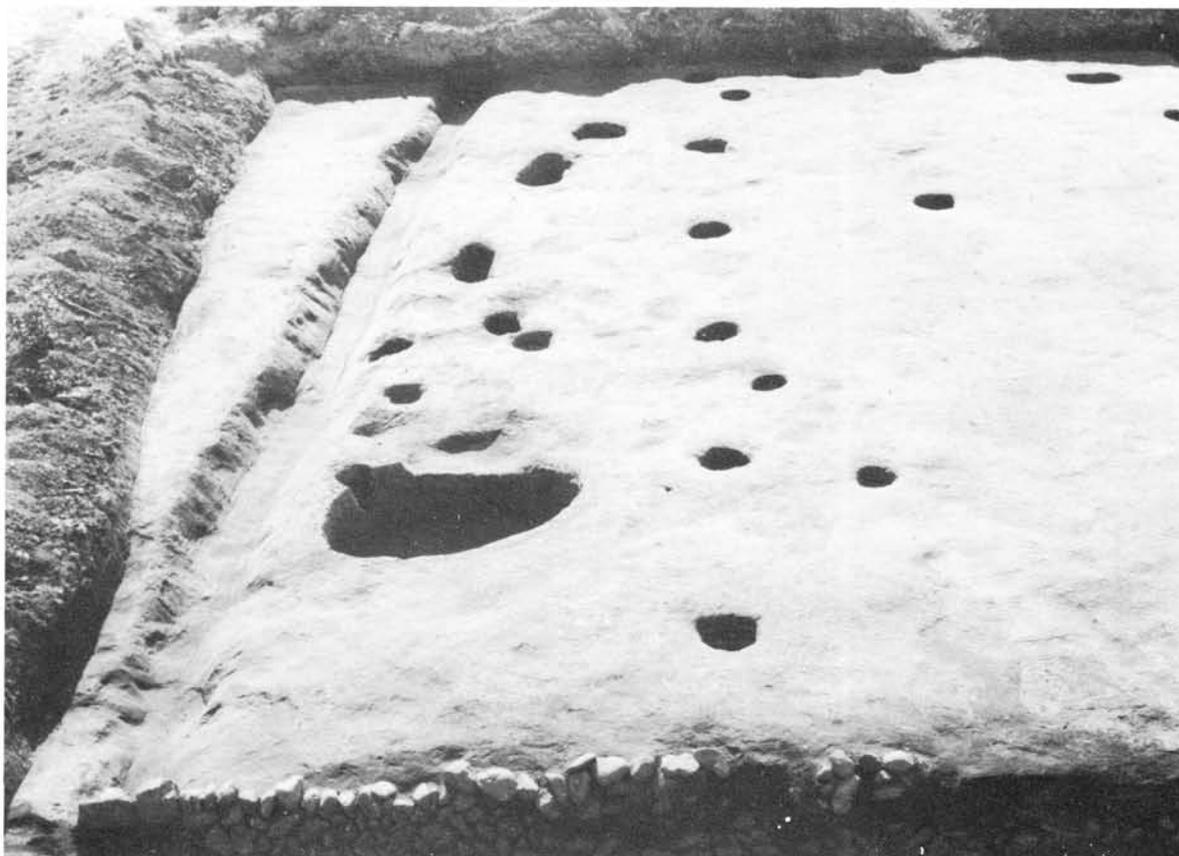
SD4 (山茶碗出土状況)



A・B地区 全景(北から)



A地区 全景 (西から)



SA1・SK2・SD3 (北から)



SB7 (北から)



SD8 (北から)



C地区 西半部（北から）



D地区 SB10~12（東から）



SB19 (西から)



SE16 (東から)



航空写真（上：馬場遺跡、下：蓮池代遺跡）



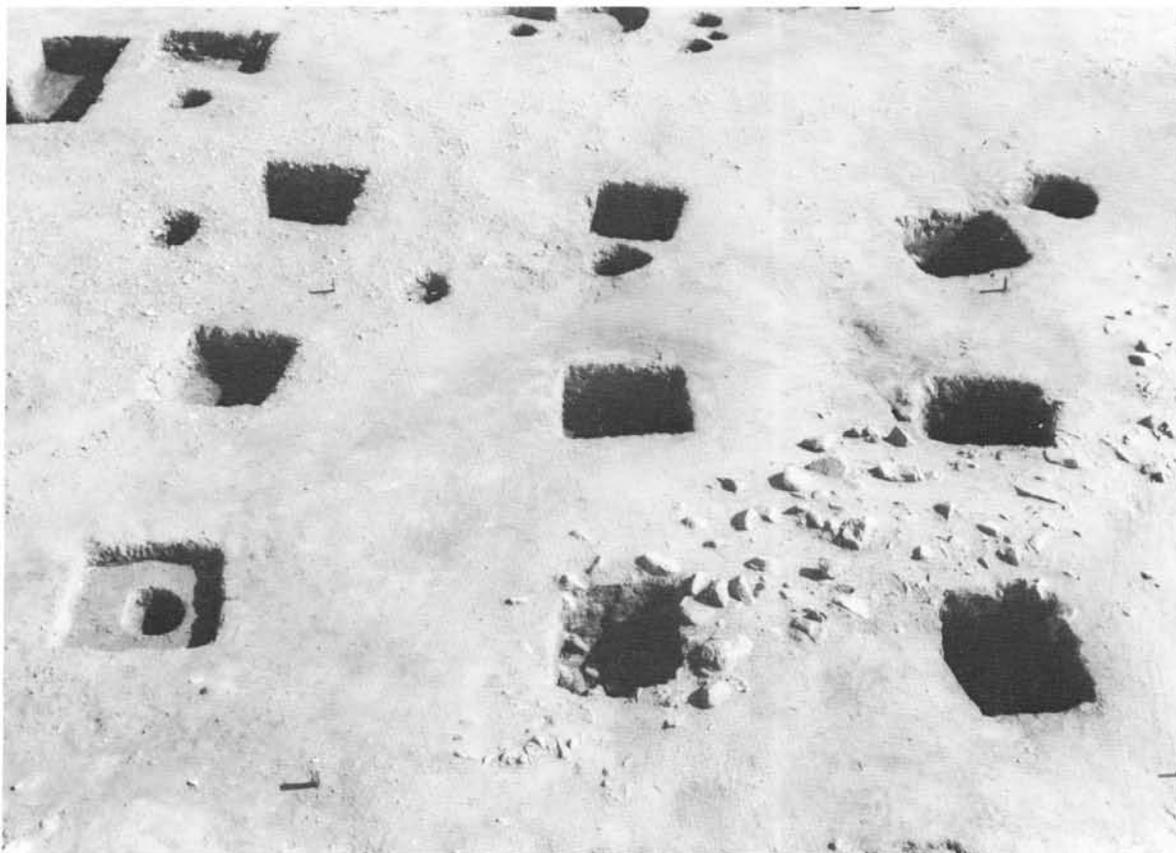
全 景（東から）



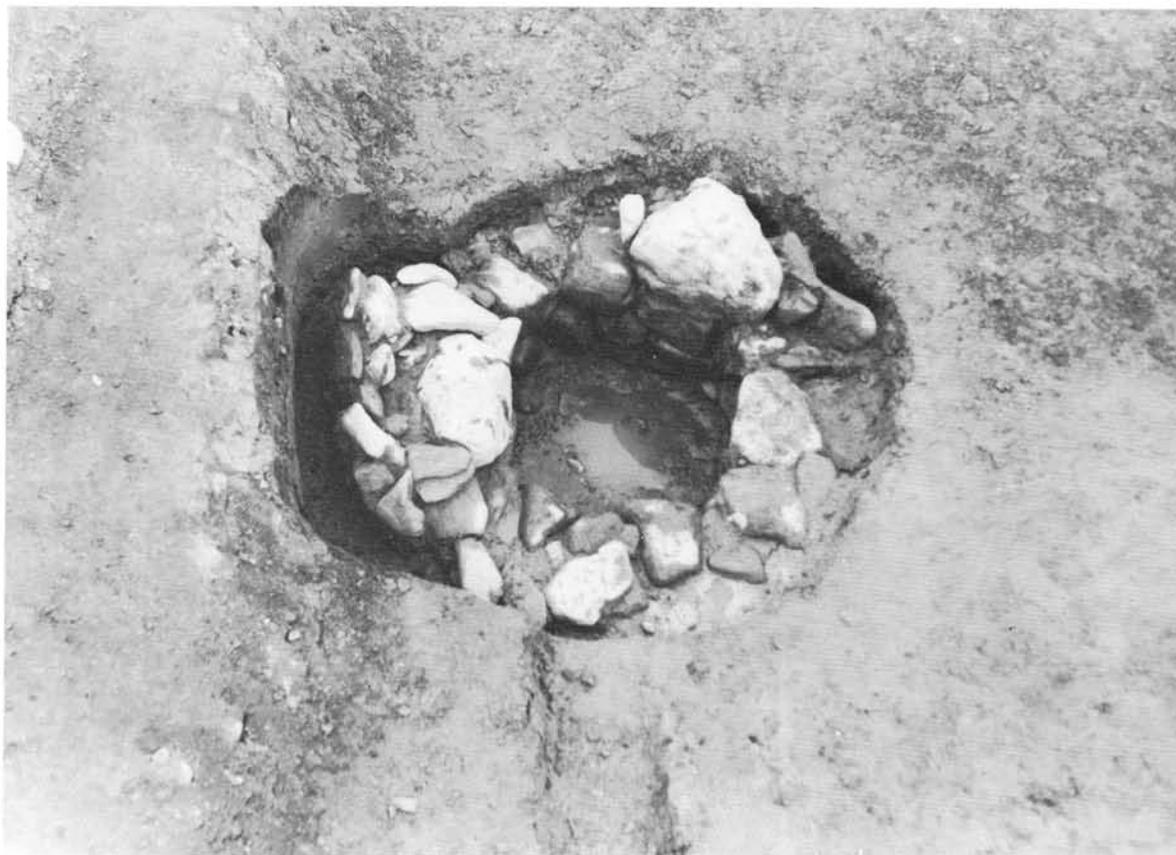
全 景 (南から)



SB26・21 (西から)



SB2 (西から)



SE56 (北から)



A区 全景（西から）



SB4（東から）



B区 全景（東から）



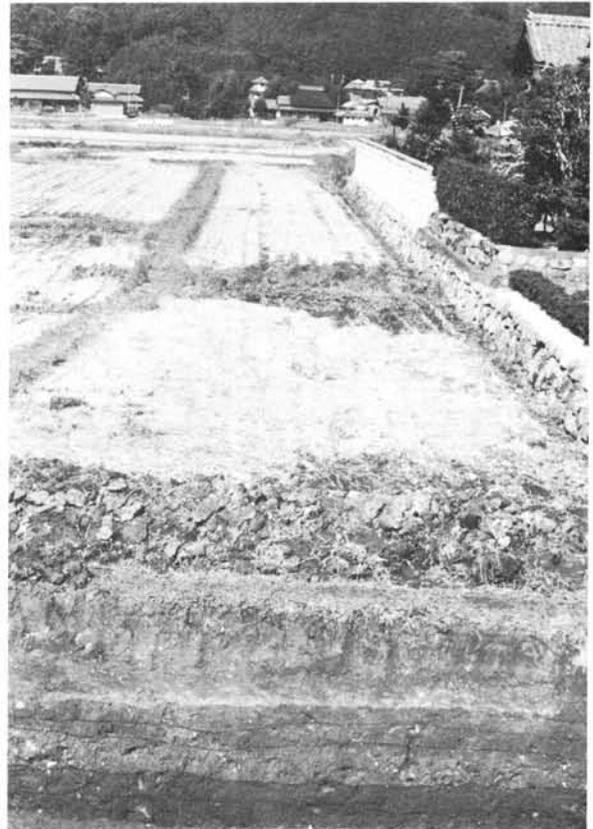
SB1（北から）



航空写真



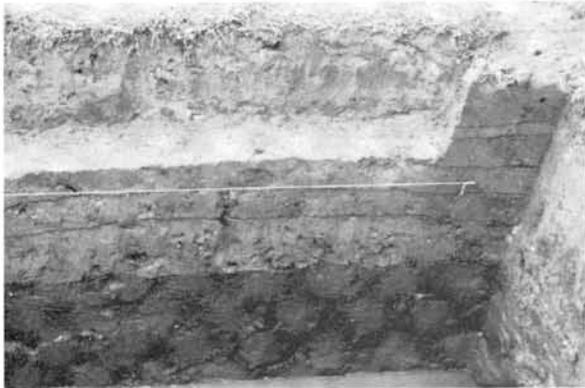
遠景



T2 北壁東半部から「シメコダ」を望む



T1 東壁南半部



T 2 北壁東部



T 4 南壁



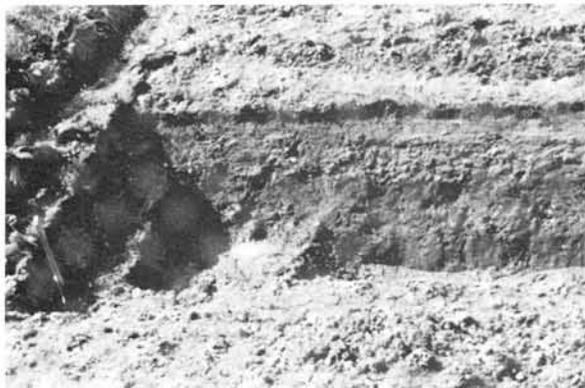
T 3 北壁



T 4 西壁南部



T 4 西壁北部



T 5 西壁南部



T 5 西壁北部



T 6



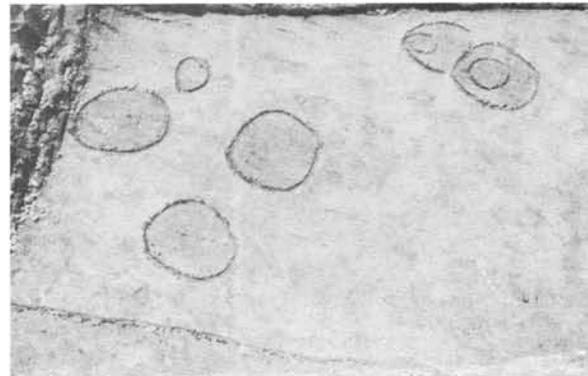
T 6



発掘作業風景



G 5 (南西から)



G 6 (南東から)



G 8 (南東から)



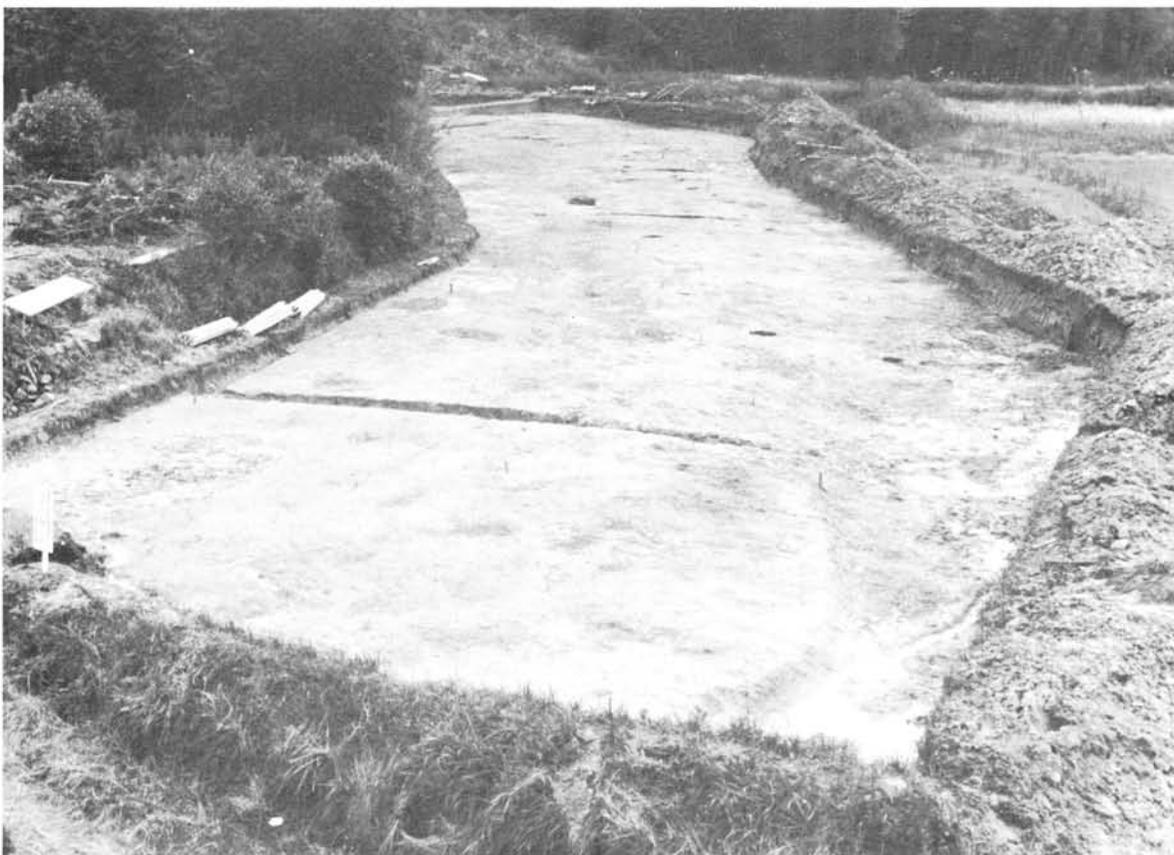
G 9 (北西から)



遠景（北から）



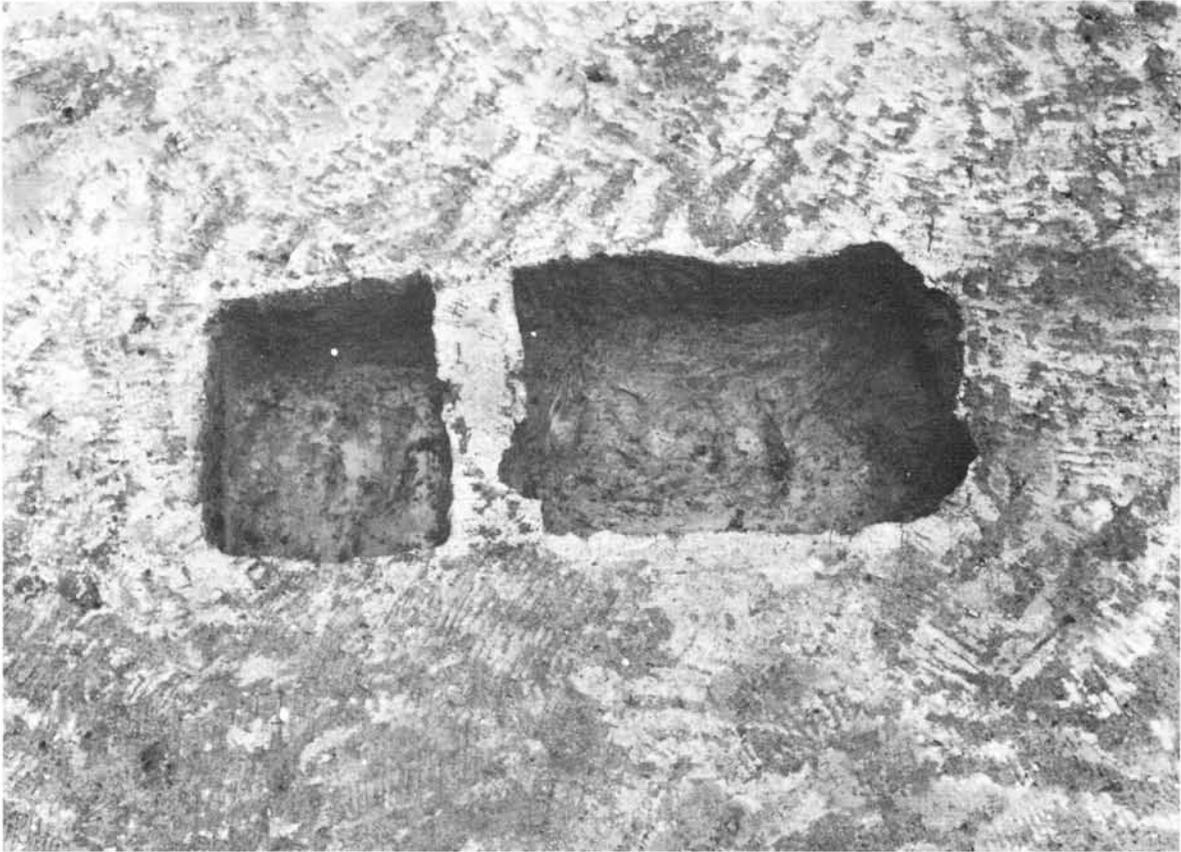
全景（東から）



全 景 (南から)



全 景 (北から) SX3・SA4・SK5



SX2



SX1

昭和57(1982)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告58

昭和56年度県営圃場整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告

昭和57年3月31日

編集 三重県教育委員会
発行 三重県教育委員会
印刷 オリエンタル印刷株式会社
